
主人公 ヒーロー 達の不自由な二択

歌崎 鏡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

主人公 ヒーロー 達の不自由な二択

【Nコード】

N1535Q

【作者名】

歌崎 鏡

【あらすじ】

都内の某マンションに、魔法師の少女が住んでいる。

彼女の仕事は、自らの意思に反して異世界へ渡ってしまった“落界者”を迎えに行くこと。

しかし、物語の主人公になるのは少女ではない。主人公はあくまで“落界者”であって、少女は裏方の一人に過ぎない。

今日も彼女は笑顔で主人公たちに選択を迫る。

「あなたはもとの世界に戻りますか？それともこの世界に残りますか？」

そう、主人公であり、選択するのはあくまで彼ら。彼女は第三者に過ぎない——はずだった。

シリアス：コメディ：恋愛Ⅱ 2：1：1位を目指します。ヒロインはまだちょっと影薄め。そのうち無双し始めます。 11/14
2章、はじまりました。

1話 日常非日常（前書き）

小説を書くのは初めてですが、よろしくお願いします。

1話 日常非日常

いい天気だ。

庭先で爽やかな初夏の風を感じながら、俺は盛大に欠伸をした。
ぐいと体を伸ばし、まだ寝ぼけている体に覚醒を促す。

5日ほど前まで降り続いた長雨も今では落ち着き、青空が広がる
日が多くなってきた。

ガリアスさんによれば、今年は天候も気温も安定していて、作物
の豊作が見込めるといふ。

太陽の高度から見れば午前4時くらいだろうか。

1年ちよつと前までは明け方に寝て昼間に起きるアメーバのよう
な生活を送っていた俺も、すっかり早寝早起きの健康体になっ
てしまった。

よく食べよく働きよく寝る。これ人間の基本。

今はリレというレタスのようなサラダ菜の収穫の季節で、最近
はここマックリン農園も大忙しだ。（これから夏に向けての忙しさは
こんなもんじゃない、とガリアスさんは笑っていたが）

農園の忙しさはつまり、マックリン農園の住み込み従業員である
俺の忙しさに比例するわけで。

しかし俺はこの生活が嫌いじゃなかった。
いや、嫌いじゃないどころか自信を持って好きだ。

ここに来て最初こそは戸惑ったし絶望した。

何しろ言葉も通じない、文化も違う、さらに魔法なんてものが存在するファンタジーな世界にいきなり放り出されてしまったのだから。

コンビニに行った帰りに、なんとなくいつもと違う道、建物の中の狭い路地を選んで帰ったら、空間に浮かぶ黒いバスケットボール大の球のようなものを見つけた。

俺は特に何も考えずにその球に手を伸ばし、呑みこまれ、気が付いたら異世界でした。はいテンプレ乙。

運が良かったのは、ここにきて最初に出会ったのがアウリだったということだ。

アウリはここマックリン農園の農園主ガリアス・マックリンさんの長男で次期後継者。

迷い込んだ農園裏手の森をうろろろしていた、言葉の通じないうえに奇妙な格好という不審者全開の俺を農園まで連れ帰り、なんと面倒を見るよう家族を説得してくれたのだ。

俺が言えることではないが、呆れたお人好しっぷりである。

どうやら俺は実年齢の24歳よりかなり幼く認識されていたらしく、しかも日本での極貧フリーター生活のおかげで決して太ることのなかった体は栄養失調のガリガリ君だと思われたらしい。

ここで言うておくが、ここの農園の人が異常に逞しい体つきなだけで、俺は現代日本人レベルだと確実に標準に収まる体型である。

そんなこんなでマックリンさん一家に逆に引いてしまうほど（失礼）すんなり受け入れられた俺は、住み込み従業員として農園で働くことになった。

農園の仕事はきつかったが、正直日本の日雇い派遣より衣食住が保証されるぶん労働条件も格段に向上したといえる。

初めから比較的打ち解けていたのはマックリン家のなかでは農園主ガリアスさん、ツイスカ夫人、長男アウリ、祖父ラモンさん、祖母コリン又さんである。

この人たちは俺を胡散臭がるどころか盛大に同情してくれて（もっとも最初は何を言っているのかすらわからなかったが）、俺の胃袋のキャパシティを遥かに超える量の食事を出してくれたり、言葉や読み書き、常識や文化を仕事の片手間に教えてくれた。

一方当初は俺を警戒していたのが次女アリサ、次男サイラス、三女カリナである。

アウリと俺が同じ年くらいで、当時はアリサが18、サイラスが15、カリナが10だったか。

ちなみに長女のサラディアさんはもうお嫁に行っている。

当初彼らは俺と口を利かないどころか半径1mに近寄らない勢いの嫌われっぷりだった。

言っておくがこっちがむしろ普通の反応なのだ。いきなり打ち解

けたらこの少年少女の将来が逆に不安になってしまう。

しかし住み込み従業員だから、必然的に毎日顔を合わせるし、仕事も食事と一緒にいる。基本的にいい人である彼らとは自然に雪解けた。

まあ決定的だった出来事は俺がツイス力さんに教えたなんちゃって日本料理が大好評だったことだろうか。食べものの力は偉大です。

ここにきて一年とちよつと（正確な日にちは数えてないからわからない）。

俺はこの世界に馴染んでいた。

言葉も日常会話には困らない。常識も不審者と即断されない程度には身に付けた。農園から最寄りの町・フラメルにも顔見知りはたくさんいる。インフラが整ってないことは未だ不満だったりするのだが——まあ慣れた。

俗にいう異世界トリップというしょっぱい経験をする羽目になった原因もわからないし（勇者として召喚されたのではないことだけは確かだ。そもそも魔法はスク・ニのファイア、サンダー、ブリザドレベルで、召喚魔法なんていうものは存在しないらしい）帰る手段に至っては皆目見当もつかない。

今日寝たら明日は築40年の木造ボロアパートの堅い布団の上で目が覚めるのかなあ、と思ったこともあった。

しかしここでの生活も1年以上も経つと、それは俺はこの世界で死ぬのかなあ、という思考に変化した。これが人間の適応能力つてやつなのかね。

俺は木製のバケツを両手にもち、中二つばい言い方をすれば始まりの場所である農園裏手の森に入った。

毎日朝起きて最初の仕事が、ここから歩いて3分ほどの所にある泉に一日分の生活用水を汲みに行くことだ。だいたい十往復で庭にある巨大な瓶が一杯になる。

森のすっかり歩きなれた道を歩く。というか俺が毎日歩くところに道ができた。

この道は俺が名前をつけてもいいんだろうか。モーニングサンライズウェイとか。

モーニングサンライズウェイの利用者は俺だけではないらしく、たまにウサギとか、羽が生えたウサギとか、緑色のウサギとか、なんとも形容しがたいがギリギリウサギとかと遭遇するが、襲ってくるような凶暴な生物ではないので基本スルーする。

ガリアスさんやアウリはたまにこれらを狩りにくるが、俺は鑑賞するだけにしておく。奴らは正直食べたいと思えるシロモノではないかな。

たまに何の生物のものか分からない肉が食卓に並ぶが、そういう時は決して突っ込まずに深く考えないでに食べるべし、というのは学習済みだ。

本日は鱗のあるウサギに遭遇した。俺がひそかにマーメイドラビットと呼んでいるウサギである。

恥ずかしいから誰にも言わないが。

しばらくすると泉に到着する。

ありがちな表現だが、朝日を反射してきらきらと光る泉の表面はいつ見ても綺麗だ。この風景も毎日の俺の楽しみだったりする。

初めは汲んだ水をそのまま飲むことにかなりの抵抗を覚えたが、呑んでみるとあら不思議。なんでこんなに美味しいの！？ヴォル・イツク顔負けである。

そう、この一年半で泉の水をそのまま飲んだり、リレやサランといった見たことも聞いたこともない野菜を食べたり、いろいろなバリエーションのウサギに遭遇したり、朝は4時に起床したりするのが俺の日常になってしまったのだ。まったく人間の順応能力って恐ろしいね。

そんな俺の新・日常は、またしても、唐突に、崩れ去ろうとしていた。

さあ汲むぞー！と意気込んで泉の淵にバケツを下した俺の視界に非日常が影を落としたのだ…。

最初は何かわからなかった。市民プールほどの大きさの泉の対岸に、黒色があった。

そこの景色を一部分黒い絵の具で塗りつぶしたような、黒。

「…?」

大した距離はないはずなのに、黒色の姿かたちをうまく認識できない。

まだ寝ぼけてんのかな、と眼を手で擦った時――

「中原元春さん?」

「うおつつつ!!!!!!?」

いきなり背後から声をかけられ、無様にもズッコケてしまった。
我ながらオーバーアクションだと思う。

「あ、ごめんなさい。驚かせちゃいました?」

くすくすと笑う声のする背後を振り返ると、先ほどの黒色が立っていた。

「え……さ、さっき、あっちに……」

立っていただろ、と言いたったかたのだが、驚きすぎて口が回らない。

「ん？ああ、それは残像ですよお」

さも楽しそうにそういう黒色の実体は、どうやら真っ黒のローブを着た人間のようだった。

大きめの黒ローブの包まれた体は小柄で、フードをすっぽりと被っているで顔はわからないが、フードから覗くあごのラインはほっそりしている。

声の高さからも子供か女性であると予想された。

「僕はユリウスっていいいます。もう一回聞きますけど、あなたは中原元春さん？」

小首を傾げた黒色もといユリウス少年の言葉を、混乱した脳が徐々に理解していくうちに、俺は更なる驚愕に襲われた。

——こいつ、今、何て、言った？

「あれ、もしもし？大丈夫？」

何の反応も返せずに、恐らく大層なアホ面をして、初めズッコケた体勢のままユリウス少年を見上げていた俺に、少年はかがんで視線を合わせる。（俺から少年の眼は見えないが）

しかし俺の驚愕と混乱は深まるばかりだった。「あやしいひかり」
をかけられたポケ・ンだって今の俺よりは冷静だろう。今ならわけ
もわからず自分どころかトレーナーを攻撃しそうだ。

こいつは、今、確かに、
日本語を喋った。

そして、この世界では誰一人正確に発音できず、「ハル」と呼ば
れる俺に、本名で流暢に「中原元春」と呼びかけてみせたのだ。

「……………何なんだ、あんたは」

ようやく絞りだすことに成功した俺の言葉に、ユリウス少年は形
のいい唇の両端をいかにも「にっこり」という形に吊り上げ、本日
三度目の質問を繰り返した。

「その質問に答える前に、確認しなければならないことがあります。
あなたは中原元春さん？」

1話 日常非日常（後書き）

2011/11/13 改稿

2話 《落界者》

《落界者》、と少年は言った。

どうやらこの世（この表現もなんか微妙らしいんだが）にはいくつもの世界が同時に存在しているらしい。

ある世界は剣と魔法のファンタジーワールドであつたり、ある世界はタイムトラベルが可能なほど遙かに発達した超科学文明をもっていたり、ある世界はようやく二足歩行の生物が火をおこし始めたところだつたり。

俺たちが住んでいた地球も、そんな世界の一つ、いや、厳密に言えば一部らしいのだ。俺たちの世界は、《ミッドガル》と呼ばれているらしい。

「地球人がいうところの銀河系をはるかに超えた領域までが《世界》という単位なんです。よくある“世界の果て”なんて表現は本当に途方もない話なんですよ？」

人間の存在なんてちっぽけなものですよねえ、とユリウス少年は芝居がかった口調で付け足した。

ともあれ、その個々の世界は、《世界律》なんてものをそれぞれ持っているらしい。

《世界律》は魔法学のテクニカルターム、即ち専門用語で、日本語に直訳すると「真理」や「摂理」に当たるそうだ。そんな名前の

宗教団体があつたなあ…。

世界はその世界律を基盤にして存在している。

しかし、その世界律にも時々、律からはみ出した《歪み》ができてしまうのだ。いきなりコンピューターにバグが発生するように、どんなに精密な機械でもいつかは故障してしまうように。

世界はその《歪み》が発生し次第、消去もしくはその歪みを正してもとの世界律に取り込みなおすのだという。そうやって世界は存在を保ち続ける。

俺の説明が要領を得ないのは、俺自身が訳分かっていないからだ。けてして作者の説明力不足というわけではありません。はいメタ発言自重。

「…もうここらでさすがの俺でも繋がったよ。そゆことね。俺が遭遇したあの黒い球体はその世界の《歪み》とやらだったわけね」

半ば投げやりな俺の言葉にユリウス少年は首肯した。

「そうやって《歪み》に巻き込まれて、世界を渡ってしまった人は《落界者》と呼ばれます。《歪み》は世界の境界にできた“落とし穴”のようなものですから、それに取り込まれてしまえば異世界へ飛ばされる、っていうのは道理ですけど——」

そこで俺の中の何かがプツンと音を立てて切れた。

「…何が道理なんだよ」

確実にトーンが下がった俺の声にユリウス少年は言葉を止めた。

「ただの一般市民の俺が、何の前触れもなく、いきなり言葉も通じない、魔法なんてものが存在する異世界へすっ飛ばされたのが道理だと？今まで培ってきた常識や知識が一切通じない世界に放り出されたことが？家族や友達に二度と会えないことが？マンガの続きを一生読めないことが？日本食を未来永劫食べられないことが！？道理どころか理不尽の極みじゃねえか。頭沸いてんじやねえのか。だいたいあんた何なんだよ。さっきからニヤニヤしやがって。日本語喋ってるってことは少なくとも地球人なんだろ？わざわざそれを解説するためにこのファンタジーワールドに来たっていうのかよ。それとも何か？俺が日本に帰りたいて言えばちちんぷいぷいで帰してくれんのk「帰れますよ」

ユリウス少年は俺の怒りの言葉を今までと変わらない調子で遮った。

「……何？」

「だから、帰れるんです。あなたが望めばね。僕はそのために来ただですよ」

少年の口は相変わらず笑みの形に歪められている。それが、俺の神経を逆なでした。

「つぶざけんな！！今更何なんだよ！！もう一年以上たつてんだぞ！！今日日本に帰ったって仕事はないわ、行方不明の家出人扱いだわ、家だって電気と水道止められてるところじゃなくアパートの家賃滞納で強制撤去されてるわ！家族友人に今更帰ったところで一年以上何してたって言えはいんだよ！！異世界にトリップしてましたなんて言ったら最後、檻のついた病院に入れられんぞ！！来るならもつと早く来ないと意味ねえだろうが！！」

「僕も最善を尽くしたんですよ？世界を渡るにはすつごく時間のかかる準備が必要ですし、ものすごくお金もかかるんです。まず落界者の存在の確認、落下座標世界の特定。渡界のための魔法式の計算、魔法のための材料の調達、渡界後は落界者を探して接触しなければなりません。ざつと挙げただけでこの工程です。これを考えると中原さんは運のいいほうなんですよ？僕が迎えに行っただのは落界後10年なんて人もいるし」

いちいち少年の口調は俺の怒りに油を注ぐ。俺は人生で一番、激昂していた。

「運いいわけあるか！！なんで俺がこんな目に遭わなきゃなんないんだよ！！」

「世界が存在する以上、《歪み》が発生するのは仕方がないことなんです。どのような条件で発生するものなのかも分かっています。発生する場所も変則的です。たまたま発生した場所・時間に中原

さんが居合わせて、接触してしまったのは、もう不幸な事故としか言いようがないです。いきなり車に撥ねられたみたいなのですよ」

……不幸な事故だと？

その言葉と未だに笑みを顔に張り付けるユリウス少年の態度に、俺の沸点は限界点を突破した。

「こ……の野郎ツツツ！！！！！！」
「ハル！？」

少年の胸倉を掴み、殴りかかろうと拳を振りあげた俺を止めたのは、聞き慣れた声だった。

反射的に声のしたほうに視線を向けると、そこには息を切らしながらも驚いた表情のカリナがいた。俺の怒声を聞いて駆けつけたらしい。

「一週間後にまた来ます。それまでに答えを出しておいてください。残るか、帰るか、ね」

突然のカリナの登場に一瞬フリーズしてしまった俺の隙を逃さずユリウス少年はそう言い残すと、文字通り、煙のように、消えた。少年の胸倉を掴んでいたはずの俺の左手には、もはや何の感触も残っていなかった。

2話 《落界者》（後書き）

2011/11/13 改稿

3話 不都合な真実

15 畳のワンルームマンションの一室にインターホンの音が鳴り響いた。

手頃な家賃の割にセキュリティのしっかりしているこのマンションに、訪問販売の類がやってくることはない。

そして滅多に来客もないこの部屋のインターホンが鳴るということとは、即ちこの部屋の主の帰宅を表すものだった。

この部屋の住人の一人である青年は、掃除の手を止めてインターホンへと向かった。

「はい」

『私です。ただいま帰りました』

見慣れた黒髪の少女——短めのボブカットに中性的な顔立ちで少年と間違われることも少なくないが、少女にしても少年にしても、その頭に“美”がつくことは間違い——がモニターに映し出されたのを確認して、青年はエントランスのオートロックを解錠した。

青年の癖のない亜麻色の髪と藍色の瞳は、彼が日本人でないこと

を容易に想像させる。

加えての整った顔立ちで、青年がこのあたりでちょっとした有名な人であることを、本人は知らない。

青年は玄関に向かい、ドアを開けた。するとそこには、今まさにドア前のインターホンを押そうとしていた先ほどの少女がいた。

「弓月君」

「お帰りなさい、遊利さん」

弓月と呼ばれた青年は、少女にっこりとほほ笑みかけた。

少女——遊利はセーラー服に身を包み、学校指定のかばんを手にとって持っている。

それだけ見れば学校帰りのように見えるが、異質なのは脇に抱えている真っ黒な布の塊だ。かなり厚手な布のようで、相当かさばっている。

弓月は持つよ、と遊利から半ばひったくるようにして荷物を受け取ると部屋に戻った。遊利もそれに続く。

この部屋の住人は弓月と遊利の二人で、実際の家主は遊利で弓月の立場は同居人なのだが、家を空けることが多い遊利より弓月のほうがこの空間に馴染んでいて、彼がこの部屋の主人に見える。

遊利は部屋に置かれた一番大きな机の椅子に腰かけた。俗に言う社長椅子をクラシックなデザインしたような椅子だ。これも弓月の

趣味である。

「何か変わったことはありませんか」

「特にないよ。平和だったな」

「…そうですか」

そう言ったきり遊利は暫く黙りこんだ。小さなため息を吐いた後、再び口を開く。

「弓月君。コーヒー貰えますか」

弓月はおや、と思う。同居が始まって2年、遊利は荒れているときにコーヒーを飲みたがるということは学習済みだ。彼女は普段紅茶派なのだ。

遊利は社長椅子の上で体育座りをしている。もともと小柄な彼女にはごつ過ぎる椅子なのでその体は椅子にすっぽり収まる。それも機嫌が悪い時の彼女のポジションなのだ。

「お疲れみたいだね？」

できるだけさりげなく、弓月は探りをいれることにした。もちろんコーヒーを淹れながら。

「……………疲れました」

遊利は膝に顔をうずめたまま言った。

「何かあった？」

「……………」

遊利が帰宅したときに機嫌が悪いことは珍しいことではない。弓月はこういう時、彼女の不満を吐き出させるのは自分の役目だと思っていた。

「今回のヒトは向こうへ残ったんだよね？」

「……………八つ当たられました」

「八つ当たり」

弓月は遊利の言葉を繰り返す。その心は？の意味を込めて。

「こっちの世界を切り捨てる罪悪感を、全部私への怒りにしてぶつけてきました。私はサンドバッグじゃないってんですよ」

今回遊利が迎えに行った落界者は、23歳（当時）の日本人男性

だった。

弓月は淹れたてのコーヒーを遊利の前に置くと、机の上にあったB6の紙を拾いあげた。【落界者 調査結果】と書かれた用紙である。

中原元春。出身地は北海道。公立高校を卒業後地元の私立大学に進学、中退して就職のために上京した。はじめて勤めた菓子メーカーも半年ほどで辞めると、そこからはアルバイトと日雇い派遣で食いつなぐ生活を送っていた。ギリギリフリーター、下手をすればニート。親戚からは厄介者扱い、父親は要介護。奨学金未完済、消費者金融に借金あり。当然のように恋人なし。

これなら戻ってきたくない気持ちも分かるねえ、と弓月は一人ごちた。

「その人、今更戻ってもアパートは強制撤去されてるわ家族に説明できねえわ仕事はねえわで手遅れだろ、てめえがちゃんたしてるせいだよ！とか言っていましたけど、私、仕事かねえのはもともとだろと言いたいのをグツとこらえました」

「……遊利さん」

「何か？」

「教えてないの」

「……必要ないでしょう」

遊利は弓月がぼかした主語を正確に把握したようだった。

「言ってやればよかったんだよ。こっちの世界ではあなたが失踪してから一ヶ月しか経ってません、って」

そうなのだ。この世界、《ミッドガル》は、他の世界と時間軸がズレている。

一般にそれぞれの世界は、どんなに環境が違っても時間軸には大きなずれはない。

それが世界が自身の存在を保つための条件であると現代魔法学は判断しているが、《ミッドガル》だけは例外で、他の世界の時間軸に比べると時の流れは1/10ほどと圧倒的に遅い。

故にほかの世界の人間が地球にしばらく滞在した後には帰郷するのだいたい浦島太郎状態になる。

その謎の解明は現代魔法学の命題となっているが、それが《ミッドガル》の世界律なのだ、という身も蓋もない定義の方向で収束しつつある。

少女は小さくため息をついた。

「教えたところで彼は戻ってこなかったでしょう。たかだか一年ぼっち離れただけでこの世界に戻らない判断を下したんですから」
「遊利さん」

弓月は幾分か強い口調で遊利を呼んだ。それまで顔を伏せていた遊利はゆるゆると顔を上げる。

弓月の藍色の瞳が、遊利の黒い瞳をとらえた。

「教えたら、その人のもとの世界を切り捨てる罪悪感を増長させると思ってたんだね。だからわざわざ『もとの世界に帰ることができないから、仕方なくこの世界に留まる』っていう逃げ道を作ってあげたんだよね？」

「……………」

沈黙は肯定だった。

遊利は、落界者のバックボーンを知って、異世界に留まった方が彼にとって幸せだと判断した。

そして時間軸のずれという情報を伏せることで落界者が異世界に留まる選択をするよう誘導したのだ。彼の理不尽な非難を甘んじて受けてまで。

「でも遊利さん、」

「わかってます！」

遊利も語調を荒げる。

「…今回は私が間違えました。軽率でした」

異世界に留まった方が中原元春にとって幸せである、と判断したのは遊利のエゴだ。

彼女の役目はあくまで落界者自身に“選択させる”こと。遊利自身が落界者の選択に介入してしまつては意味がない。

今回の遊利の行動は“選択させる者”としての立場を大きく超えたものだつた。

「…もうこんな失敗はしません」

遊利も、もともとこんなことをするつもりではなかった。しかし彼の日本での立場を知った上で、異世界にいる彼の幸せそうな様子を見た時、彼女の心に迷いが生まれてしまったのだ。

優しすぎる。これがこの少女の長所で短所。

遊利が落ち込んでいた本当の理由を理解した弓月は、俯く遊利の頭の上にポンと手を置いた。

「そういえばシャロンテールの新作ケーキを買ってきてたんだよ。食べる？」

「……食べる」

遊利はようやく顔を上げたが、笑顔を見せることはなかった。

3話 不都合な真実（後書き）

2011/11/13 改稿

4話 それぞれの思惑

「弓月君、これ、次の人のですか？」

遊利は机の上に積まれた紙の束から一番上の一枚を拾い上げた。
ケーキを食べて若干気分が浮上したらしい。声のトーンも幾分か
明るくなっている。

弓月は心底ほつとした。勿論顔には出さないが。

「ああ、それ昨日速達で届いたやつ」

ワープロの明朝体で書かれた【落界者 調査結果】という文書の
タイトルの上に肉筆で

《朝比奈遊利様へ（・o・）ヨ（・A・）ロ（・エ・）シ（・ε・
）ク？d（・ω・*）ネッ！》

と書かれている。

「…突っ込みませんよ」

「ダンさんももう年だから寂しいんだよ。構ってあげなくて」
「だが断る」

朝比奈遊利——遊利の本名だ——とこの調査書の送り主であ

霧崎弾は旧知の仲で、弓月も随分世話になった人物だ。
きりさきだん

外見は12・3歳の少年だが、年齢は200を優に超えるらしい。
弓月は眉唾だと思っているが、胡散臭いことには変わらない。

一応師弟関係な二人だが、弾は両親のいない遊利の保護者代わりの存在だと弓月は認識していた。

遊利は何を狙ったんだか、と呟きながら書類に目を通す。

「望月早沙子、27歳。…また日本人ですか、珍しいですね」

「あ、でも《歪み》の発生場所はイタリアになってるよ。旅行中だったらしいね」

外国で落界。運がないにも程がある。

「保険会社勤務、ね。前の人よりはリア充みたいですねえ」

調査書には生年月日や住所・電話番号などの他に簡単な略歴・家族構成・交友関係まで記されている。

異世界に渡るには膨大な魔力と難解な魔法式の構成、マジックツールの準備のための多額の費用が必要だ。

だから、もし《落界者》が世界を渡ることのできるほどの魔力を持つ魔法師だったり、故意に歪みを利用して異世界へ渡ろうとした

魔法師だつたりしたら、遊利と弾が渡界に費やした時間と費用が無駄になってしまう。

《落界者》の身元調査はそれを避けるために行っているものだった。正体を隠して生活している魔法師も少なくないがゆえに、できるだけ詳細に、正確に。

「落界が12日前、か。今回は落界先の世界の割り出しがえらく早いですね」

「今回はダンさんが本気出したんじゃない？」

「いつも全力で取り組むべきです」

《落界者》を迎えに行く準備の中で最も時間と労力が注ぎこまれるのは、落界先の世界を割り出すことだ。

歪みは落界者を呑みこんだ後も暫くはそこに存在し続けるが、最長一週間程で世界律に消去されてしまう。

歪みは消去されてもそこにあった痕跡は残るが、歪みがどの世界に繋がっていたのかを割り出すのは非常に困難になる。

ただ一つの方法は、微かに残った魔法要素エレメントの残滓を解析、各世界の魔法要素の成分と照合すること。

これは“優秀”というレベルを遥かに凌駕した魔法学者にしかできない神業であり、そしてとんでもない虱潰し作業になる。実際中原元春の場合は落界先世界の割り出しに一カ月かかっていた。

「なら、こちらにも急がなきゃですね。せっかく弾が頑張ってくれたんですし」

遊利は椅子から立ち上がった。

「あれ、もう行くの？」

「まさか。出発は明後日にします。二日間急ピッチで準備しますね。さすがに学校に行ってる暇はありません。弓月君、風邪をこじらせた、と学校に連絡を」

「駄目だよ、遊利さん休みなしじゃない。せめて今日明日は休んで、明後日から準備して」

「大丈夫ですよ、このくらい」

そう言っ て遊利は自室に消えた。

弓月は暫く閉まった遊利の部屋の扉を見つめていたが、諦めたようにはあ、と大げさなため息をついた。

こうなっ ては遊利は頑固なことを弓月は知っていたのだ。

「遊里の周りを嗅ぎまわっている奴がいる？」

「はい」

小学生のランドセルくらいありそうな厚さの本から目を上げたのは中学生くらいの外見の少年だ。

その見事な銀髪と、外見にそぐわない落ち着き払った雰囲気はどこかちぐはぐで異質な印象を与える。

少年の碧色の眼が捉えたのはスーツ姿の女性だった。長い青みがかった黒髪を一つにまとめた、黒縁眼鏡が似合う知的な雰囲気の女性だ。「美人秘書」という言葉が具現化したら、まさにこんな感じだろうか。

「彼女の周りにしばしばダークエルフの気配が感じられます。まあ、気配消しの技術から言って恐らく下っ端でしょう。まだ深刻になる段階ではないと思われます」

見た目を裏切らないやや冷めた声色で女性がそう告げると、少年は顎に手を当てた。

「消しますか？」

「いや、それだと逆に怪しまれるだろ。泳がせておけ。そんなやつに遊利が遅れをとるわけないしな。まあ本人が気づいて消す分には問題ないが」

少年は暫く何か考えているような様子を見せたが、やがてひとつ大きな伸びをして息をついた。

「ま、暫くは現状維持っつーことで。まあ、様子見の頻度を増やす位は考えるか…」

「……」

「…お前の言いたいことは分かるよ」

女性の微妙な視線に気づいた少年は、ふっと困ったように笑って言った。

「確かに様子見なんて回りくどいことしないで遊利を眼の届くところにずっと縛りつけとく方が確実だ。でもな、あいつは自分の力の使い方を自分で決めたんだ。それに俺らが口を出すことなんかできないさ」

「私はキリサキの采配に従うだけです。文句などありません」

澄まして言い放った女性に、少年は苦笑する。

しかし次の瞬間、その碧の眼がスツと細められ、剣呑な光が宿った。

「でももし万が一、遊利が《ユグドラシル》^{俺ら}の敵になるようなことがあれば…」

温度が数度下がったのかと思うほど、部屋の空気がガラリと変わった。

自分に向けられた殺気ではないと分かっている、女性は顔の強張りを抑えることが出来なかった。

世界でも十指に入ると言われる大魔法師・霧崎弾の殺気にあてられて平然としていられる者は世界に一体何人いるのだろうか。女性の背中を冷たい汗が流れる。

「ま、ないかそんなこと」

弾はニコリと笑ってそういった。同時に剣呑な空気も霧散する。しかし弾が元の調子に戻っても、女性は自分の足の震えを自覚していた。

「じゃあそんな感じでヨロシクな。あ、絶対気取られるなよ。隠れて様子見てるって知ったらアイツ多分ブチ切れる気がする」

「分かりました」

「あ、そうそう言い忘れてたけど」

一礼し、くるりと背を向けた女性に弾はもう一度声をかけた。

「弓月^{バカ}が遊利に手エ出そうとしてたら焼いとけ」

弾の視線はすでに先ほどの分厚い本に注がれていたが、女性は先ほどの殺気を思い出し軽く戦慄した。

4話 それぞれの思惑（後書き）

これでプロローグ的な何かが終了です。
次の話から雰囲気が変わります。

2011/11/13 改稿

5話 難有り王子（前書き）

雰囲気がまた変わります。

5話 難有り王子

私はダメ人間への道を日々爆進していた。

朝はフカフカのベッドで目を覚ます。

すると侍女さんたちが隅々まで私の身支度を整えてくれて、朝食とは思えないほどのクオリティの高いお食事を頂く。

それからはぼんやりバルコニーから町を眺めたり、城内をお散歩したり、殿下の相手をしたり、本を読んだりして一日を過ごす。

昼食は朝よりも軽めなもの。天気がいいと外で食べたりする。

それからまた好きなことをしたりお茶をしたりして時間を潰し、夜になると一流ホテルのフルコースかと思うような夕食を食べる。

ついでに量も多い。毎回残してごめんなさい。

そのあとはお風呂に入ったり、また殿下の相手をしたりしているうちに夜も更けてくるので、フカフカのベッドで就寝。こんな生活を半年近く送ってきた。

あれ？今の私ってパラサイトじゃね？

私が初めてここに来たのは、半年ほど前だった。

ようやく使えた有給休暇で2週間の纏まった休みをとり、ヨーロッパ一人旅をしていた時のことだ。

イギリス、ドイツの次に行ったイタリアのとある美術館で、異国情緒あふれる街並みにみなぎってきた私は、多分関係者以外立ち入り禁止の区域に入り込んだのだ。

立ち入り禁止などの注意書きはなかったものの、その場の空気や他の客がいなかったことからなんとなく『入ってはいけない所』だということを感じ取っていた。

しかしハイテンションだった私は、注意されたらサーセンで済ませばいいや（笑）とさらに奥へ進んだのだった。

…いや、正直調子こいてました。その結果がこれだよ！

木箱やコンテナが積まれた、薄暗い明らかに倉庫である部屋で私が見つけたものは黒い球体だった。

何かのディスプレイに乗っている訳ではなく、その空間にポツリと存在した球体。

天井から吊られてるのかな、と思ってその謎を確かめるべく手を伸ばした私は——それに吸い込まれた。

で、気が付いたら、殿下の私室にトリップしました。しかも殿下の上に華麗に着地しました。

海外旅行してたと思ってたのに、気が付いたら異世界旅行してたよ！王子様踏みつけちゃったよ！！

あははは！！笑ってくれ！！

「サーシャ様、お時間です」

いつものように部屋のバルコニーから城下をぼんやり眺めていた私は、ちよつと暴走ぎみの不健康な物思いから現実に引き戻された。

振り返ると、そこには美人侍女のクレアさんが立っている。

「ああ、ありがとう」

私はそう返事をして、彼女と共に部屋の中に入る。

ちなみにサーシャというのは私の愛称？だ。本名は早沙^{はやさ}子なのだが、誰もうまく発音できなかったので、殿下が呼ぶサーシャという名前が定着してしまった。

まあ、嫌じゃないからいいけど。

私には毎日、殿下の話し相手になる、という仕事がある。

これのおかげで私はギリギリニートではない。（と思いたいけど）
遇に見合った仕事ではないことは火を見るより明らかだ）

クレアさんに付き添われて殿下の執務室まで出向く。

お茶とお茶菓子が乗った盆はクレアさんが持っている。

一応王城の客人の身分である私に使用人の仕事はさせられないんだとか。

…いいや、私は知っているよ。本当の理由は一回お盆をひっくり返した前科一犯の私には持たせないようにしているだけだよ！あの時のお茶請けのマカロン超おいしそうだった！作った方にはジャンピング土下座で謝罪したかったよ。

もしひっくり返した現場に誰もいなかったら間違はなく3秒ルールが適用されていたな。クレアさんがいたから自重したが。

殿下の執務室の前には、近衛騎士のアレン君が立っていた。彼は私を認めるとふわりとほほ笑み礼をとった。私も御苦労さま、と笑顔で答える。

本当なら騎士の中でもかなり上位に位置する近衛騎士のアレン君が、ほぼ二トの私に礼をとる必要なんか全くないんだが、私は一応王家の客分という立場であるため、こうあるのが決まりらしい。最初こそ私も戸惑って固辞したけど、これをしないとアレン君の立場も困ったことになるらしいので何とか慣れることにした。お城っていうところは形式を重視する所だから、郷に入っては郷に従うべきだろう。

殿下の近衛で側近のような立場なのは、このアレン君とディラン君というもう一人の騎士だ。

近衛騎士団は選考基準は顔なんじゃないかってくらいの美形集団で、アレン君とディラン君もその例に漏れずに整ったお顔立ちだ。アレン君は頼れる爽やかお兄さん風で、ディラン君はストイック系無口キャラ。（予想だがクーデレの気配がする）

…まあ、二人とも私より年下なんだけどね！！あつは！！女独身27歳が通りますよ！！

アレン君が重厚な扉をノックした。コンコン、といい音が鳴る。

「殿下、サーシャ様がお見えになりました」
「入れ」

間髪いれずに返答があった。

三文字の返事だが、声色から殿下の本日の体調も機嫌も悪くないことが伺える。

失礼します、と言ってアレン君によって開けられた扉から部屋の中に入る。勿論、クレアさんからお茶とお茶請けの乗ったお盆を受け取って。

クレアさんはここまでで、殿下の執務室に入るのは私だけだ。アレン君とクレアさんに会釈をして、扉が完全に閉められたことを確認してから殿下の方を振り返る。

殿下はちょうど高価そうな羽ペンをペン立てに置いたところだった。

「あ、お仕事中だった？」

「いや、ちょうど一息ついたところだ」

テンプレの会話のように聞こえるが、本当にちょうど一息ついた所ようだった。

殿下は私に気を使ったりしない。邪魔な時は邪魔とはつきり言う。悪いが後にしてくれ、なんて言われたことも一回や二回じゃない。

ちなみに、私は殿下と二人きりの時はタメ口を使う。

これは初対面の時の名残で、異世界にトリップしたばかりの私は、着地先になった青年がまさか一国の王子だとは気付かずに失礼な口を利きまくった。

殿下が第一位王位継承者と知ってから、殿下がタメ口でいいというので、素直にタメ口を利いている。だって、4つも年下だしねでも、やっぱり他に誰かいるときはきちんと敬語を使う。大人としてTPOは弁えるべきだね、うん。

「やっとスーウェンベルク領の懸案が片付いたところだ。これで心置きなく休憩できる」

「へえ、おめでとう」

私はスーウェンなんたら領の懸案の内容は全く知らないが、面倒事が片付いたのはめでたいに違いない。

窓から春の日差しを受ける殿下の金髪は輝いていて、切れ長でスミレ色の瞳は穏やかに細められている。

私にボキャブラリがないのでうまく形容できないが、要するにイケメンです。イケメン王子様なんて、おいしいことこの上ない。

全く、近衛騎士団といい、クレアさんといい、殿下といい、なんでこの国の人間はこんなに顔面偏差値が高いんだ。見た目も中身も平凡である私への嫌がらせですか、そうですか。

しかもこの殿下、為政者としても有能らしい。

私より4つ年下で御歳23歳であるアルシエリア・オル・アクセレニア殿下は、現国王であるエヴァンシード陛下の一人息子だ。

23って言ったら、私の会社の新卒の新入社員と同一年なのだが、そうとは思えないくらい偉そ…ゲフン、しっかりしている。

まあ次期国王なんだから当たり前前っちゃんあたり前か。

しかし、この、『ルックス完璧、仕事もできる、肩書きMAX』
という三拍子そろったこの乙女ゲームの攻略対象だと思っような殿下には、その長所を補って余りある(?) 欠陥があったのだ。

「シエリア君」

「何だ」

「いいお天気だね」

「…そうだな」

いいともかよ。私はタ・リさんじゃないんですけど。

ちなみにシエリア君というのは殿下の愛称だ。

現在この名前で殿下を呼ぶのは陛下と王妃様と私の三人だけ。

畏れ多くも私は殿下がそう呼べというから普通にそう呼ばせてもらっている。これも二人の時限定だけだね。

「風が気持ちよさそうだね」

「……………」

「絶好のお散歩日和じゃな」行かんぞ」

即答された。いや、即答どころか被せやがったコイツ。
私はせめてもの意趣返しに盛大なため息を吐いた。

「シェリアくんさあ、いつまでもお部屋に引きこもってたらいい加減力ビるよ？」

「カビるか！！だいたいな、外は危険だらけなんだぞ。部屋の中にいた方が安全だろうが。執務はこなしているんだから、文句を言われる筋合いはない」

この発想、どう見ても真性の引きこもりです、本当にありがとうございます。

「頑固者」

「うるさい」

「チキン」

「…悪いか」

うわ、開き直り始めたよ。

「だいたいさあ、アレン君とディラン君がしっかりばかりばっちり警護してくれるんだから大丈夫だって言ってるじゃん。もうあの二人がそばにいたら死角ナシだよ。あ、なんだったら私も守るし」

お荷物になることはあっても役に立つことはなさそうだが。

「おまえは…」

見ると、殿下はなんと微妙な表情をしていた。何、その眼は。もしかして女に守られるなんてプライドが傷つく的なアレか？ そんなことで傷つくプライドがあるなら一刻も早くこの引きこもり生活から卒業頂きたいね。

「私が、何」

「はあ…いや、何でもない」

ちよ、だからその救えねえなコイツ的な眼は何なの！
まあいいや。本当に救いがたいのは殿下の方だ。

「あ、そうだ。今日は騎士団の団長さんと副団長さんが訓練で手合わせするんだって。めったに見られないものらしいから、シェリア君、一緒に見に行かない？」

話の流れをぶった切ったことに対してか、私の発言に対してかなのかは分からないが殿下は盛大に眉間にしわを寄せきっぱりと言いつ切った。

「俺は、絶対に、外へは、出ない！！」

そう、我らがアクセレニア王国の王子殿下は、極度の人間不信の

うえ引きこもりだった。
バッドステータスにも程があるよね。

5話 難有り王子（後書き）

2011/11/13 改稿

6話 受難と出会い

そもそも、何故アルシエリア殿下が引きこもりになってしまったのかというと、殿下は1年半前、何者かに毒を盛られたらしい。

実行犯はとくに捕まって処刑されたものの、黒幕である人物は捕まっていない。

これは私の想像だが、周りの口ぶりからすると黒幕の目星はついているっぽい。

きつとその黒幕は力のある貴族やらで迂闊に手が出せないとかいうありがちな話なんだろう。

殿下は10日間生死の境をさまよったが、優秀な医師の尽力のおかげで一命を取り留めた。

王室をあげての治療の甲斐あり、大した後遺症も残らずそれから半年で殿下はほぼ全快したらしい。

そう、肉体的には。

しかし精神には癒えがたい傷が残ってしまったのだ。

殿下毒殺未遂事件の実行犯は、王室内でも評判だった働き者のメイドさんで、殿下も名前を覚えていくくらいには気に入っていたらしい。

王宮の警備の堅さから考えて、外部犯である可能性は極めて低い。その実行犯のメイドも含めて王宮に出入りする使用人は勿論、貴族個人の使用人に関しても身元は保証されている。

となると、王宮に出入りできる程度の力を持った貴族以上の人物が殿下の暗殺を企み、刺客を送り込んだか、もともと王宮の使用人

だった彼女をとりこんだか。

まあ、冤罪の可能性も捨てきれないわな。何しろ昏睡状態の殿下が目覚めたときにはそのメイドさんと彼女の家族は肅清された後だったらしいから。

身体は全快、心は全壊。誰がうまいこと言えと。

それからというものの、殿下は完全に人間不信になってしまったのだ。絶対私室と執務室から出ようとしない。

ちなみに殿下の私室と執務室は続き部屋になっていて、扉一枚で自由に行き来できる。故に殿下は執務と引きこもりを両立させることができるのだ。

その上殿下の私室に出入りできるのは、近衛騎士のアレン君、デイルン君、幼いころからの乳母であるセリーナさん、執事のレイさん、加えて私だけ。実の両親である陛下と王妃も入れないらしい。

本来怒鳴りつけて引つ張り出してやらなければならない立場であるご両親は、城の警備が甘かったばかりに息子を苦しめた責を感じているのか、はたまた第一位王位継承者という立場を無視している息子に愛想を尽かしたのか、大したアクションを起こさない。

家臣が殿下を説得するよう進言しても、「それでは意味がない」とか「今はまだその時ではない」とかで煙に巻くんだそうだ。

一応城下には殿下は病気のため自室で療養中、という通達がされているが、人の口に戸は立てられない。

王都では「隣国の魔術師に死の呪いをかけられ、床に伏せっている」や「どこからか困い込んだ絶世の美姫に夢中で、王宮から出ようとしなない」などさまざまな噂が飛び交っている。

私がこの世界に来て、最初に会った人間は殿下だ。

イタリアの美術館で謎の球体に触れた途端、私からは平衡感覚という概念が消失した。

落ちているのか上がっているのかすら分からない、しかし高速で移動しているのはわかる。

某ラノベで時間遡行をした主人公が遡行の感覚を「シートベルトをしていないジェットコースター」と形容していた気がするけど、まさしくそれ、という感じだ。

目を開けていられなかったのは不幸中の幸いだ。開けていたら気絶は免れなかっただろう。

ややあって、ようやく地面の感覚とコンニチワしたとき、私の不快指数メーターはMAXを遥かに振り切っていた。

だから、私は自分が驚愕の表情で絶句している金髪紫眼のイケメンを下敷きに行っていることに気を配っている余裕はなかった。

パクパクと口を動かすイケメン。一方の私は、迫りくるあの感覚と必死に戦っていたのだが――

「…………無理。吐く」

「はあ!？」

あっさりと吐き気という魔物に白旗を上げた私のこれから吐きます宣告に、イケメンはようやく石化魔法が解けたかのように反応した。

本来ならどう見てもコーカソイドの青年と言葉が通じたことに突

つ込むべきだったのだろうが、その時の私にそんな余裕は以下略。

「……………」

「つとりあえずそっからどけ！」

真っ青な顔で口を押さえる私を見たイケメンは自分の上に戻されたら堪らないと思ったのだろうか、実に冷静な判断をした。

そしてむしろ自分から私をどかし、あるうことが上着を脱いで私に突き出した。

これはイケメンが絨毯を守るためにしたこと、決して私に対する好意からではない。

そして彼の上着を受け取った私は、それはもう遠慮なくその上に――リバーズした。

「えっと、上着、台無しにしちゃってごめんなさい。弁償します…」

吐き気の波が収まった後、いくらか冷静になった私はイケメンに（ここ重要）醜態をさらした羞恥から、俯きながらぼそぼそと謝罪した。

すると、私の首筋に冷たい何かが押しあてられる。

見ると、先ほどのイケメンが険しい表情で私に剣を突き付けているではありませんか。

ちょ、刃渡り5・5？以上の刃物の所持は銃刀法違反です！

「何者だ」

「……や、あの、お怒りはわかるんですけど、謝ってる相手に刃物
つて」

「もう一度聞く。何者だ」

イケメンは一層険しい表情をしたが、正直私はこの態度にはむつ
とした。

あり得ない体験を現在進行形でしているという状態が、刃物に対
する危機感を薄れさせていたのかもしれない。私はイケメンに食っ
てかかった。

「ちょっと、話し合いに刃物は必要ないでしょう？上着を汚したの
は悪かったけど、剣なんか突き付けられる覚えはないよ。それに、
迷惑をかけられた相手に名前を尋ねる時まで自分から名乗る必要は
ないと思うけど、それにしたってもっと聞き方があるんじゃないの
？」

私の反撃が意外だったのか、イケメンは面食らったような顔をし
た。

そしてゆっくりと私の首すじから剣をどけたが、その剣を鞘にし
まうことはしなかった。

それを認めた私は、イケメンは3・4歳年下だろうかとあたりを
つけてこういう時は大人から歩み寄るべきだろうと割り切った。

「私は望月早沙子。粗相をしでかして申し訳なかったね。そして助けてくれてありがとう。上着はついぶん高価そうだったけど、弁償するくらいの貯金はあるから、心配しないで」

イケメンのポカンとした表情に気付かずに、私は続けた。

「えっと、ここはどこか聞いてもいい？ 私は美術館の倉庫みたいなとこにいたはずんだけど、気付いたらここにいたんだよね。連絡先を教えたいんだけど、バッグは多分さっきの倉庫に置いてきちゃったと思うんだよね。早く戻らないと置き引きに盗られちゃうよ。あ、あとあなたの名前教えてもらえるかな」

部屋はこの高級ホテルのDXスイートにも負けないくらい立派な部屋だった。泊まったことないけど。

あの美術館にこんな部屋があったのか。ベッドがあることから、この人は美術館に住んでいるのかな？

「お前は、俺が誰だかわからないのか」

聞きようによつては傲慢な台詞だが、イケメンは本当に不思議に思っているようだ。

えっと、もしかして大人気俳優さんとか？ ああ、それならイケメンの中世貴族みたいな恰好も頷ける。

おそらく芸能人のゲストを招いてのイベントが美術館で予定され

ていたんだろう。

「…えっと、ごめんなさい。私、流行には疎くて」

知らないといつい謝ってしまう。日本人の性だ。

「…俺の名は、アルシエリア・オル・アクセレニア」

聞いたことないです、さーせん。

「偉そうな名前だねえ…てか長い。愛称とかないの？」

「…父上和母上はシエリアと呼ぶが…」

「じゃあ私もシエリア君って呼んでいい？」

イケメンはまたしてもポカンとした表情。その紫色の瞳が見開かれたのを見て私は思わず呟いた。

「綺麗な紫色…アメジスト紫水晶みたい」

「……………つく、は、はははははは！…！」

すると一瞬の沈黙の後、イケメン、もといシエリア君は突然爆笑し始めた。

今度は私が展開についていけずポカンとする番だ。

腹筋が崩壊しているシェリア君を前に、どうしていいか分からないでいると、部屋の扉を隔てた向こうから声がなにやら焦った声が聞こえてきた。

「殿下！！何事ですか！！」

「っははは…おい入れ、アレン。面白いものを……くく、っ、捕まえた」

息も絶え絶えに返事をするシェリア君。何を笑っているのかさっぱりだ。てか今、『デンカ』って言った？電化？電荷？

勢いよく扉を開けたのはまたしてもイケメン。恐らくそこで笑い転げているシェリア君と歳は同じくらいだろう。

アレン君と言うらしいイケメン2号はこれまた騎士様のようなコスプレをしていた。なるほど、この人も芸能人でゲストさんのね。かっこいいわけだ。

アレン君は一瞬は室内の若干カオスな状況にフリーズしたが、すぐに我に返ったように表情を引き締めて剣を抜き、私の鼻先に突きつけた。

おおい！またかよ！もしかしてイタリアには挨拶代わりに刃物を突き付ける風習があるのか！？ねーよ！！セルフ突っ込み乙！！

「おい、アレン、剣を下ろせ」

「しかし！！」

「下ろせと言っている」

私が内心でセルフ突っ込みを入れた時、ようやく落ち着いたらしいシエリア君がアレン君に命令した。するとしぶしぶといった態度を隠さずにアレン君は剣を仕舞う。

「殿下、これはいい」

「俺にもわからん。こいつがいきなり現れて、俺の上着に吐いた後、口説いてきた」

「はあ!?!」

恥ずかしながら、吐いたところまでは否定できない。しかしその後がよろしくない。捏造、ダメ、絶対!!

「ちょっと、私がいつあんたを口説いたって!?!」

「いきなり愛称で呼ばれるとはさすがの俺も驚いたぞ」

「あんたの名前が噛みそうだから悪いんでしょう!?!てか口説くって何!!愛称くらい誰だって使うから!!」

「瞳の色を褒めるのは口説きの常套手段だろう」

「んな文化知るかっつっ!!」

ぎゃいぎゃい言い争う私とシエリア君（騒いでいるのは主に私だが）を茫然と見つめるアレン君。

これが私たちの出会いだった。

6話 受難と出会い（後書き）

2011/11/13 改稿

7話 女神の使者？

アレン君おいてけぼりで殿下とひとしきり言い争った後、私は王室の賓客として迎えらマナウイれることになった。殿下が描いた『弱つてしまった王子を救うため女神が遣わした使者が現れた』という筋書きの通りに。

殿下は「いきなり視界が光で覆われたかと思うと、この世のものとは思えない程の美女が目の前にいた。この国の難を救うため使者を使わずと美女は言った。そして再び眼を開けていられない程の光が瞬いた後、そこには黒髪黒目の女がいた」なんていうあんまりな説明で不審者全開な私の滞在に反対する城の重鎮たちを黙らせた。

本当は、今まで全く他人との関わりを拒否していた殿下が、幾ら不審者でも他人と交流を持つとうとしていることに希望を覚えて、無為に突っぱねることもできなかったんだそうだ。

>>臣下 のようです。

まあ、要するに殿下>>>>>>
――越えられない壁――>>>>

え、超展開すぎる？まったくもって同感ですね。

唯一私の居候を止められたであろう陛下も、私のことを大層気に入ったらしく終いには「あの愚息を頼む」などとのたまいやがつのたまつた。

そしてあつさりと城に滞在することを許可された私は、半年がたった今も殿下のカウンセラーをしているというわけだ。本当にこの国大丈夫か。

「サーシャ様、おかえりなさいませ」

殿下との雑談を^{カウンセリング}終え部屋に戻った私をクレアさんが出迎えてくれる。

恐らく今や城の人間で私が『女神の使者』ではないということを感じている人は少なくない。かくいう彼女もその一人だ。

しかし私が殿下と接触してから殿下の態度は軟化しているらしいし、（私は以前の殿下を知らないので比較のしようがないが）前は殿下の私室・執務室に出入りできるのはセリーナさんだけだったが、今は私を含めた5人の臣下が出入りを許可されている。クレアさんが言うには目覚ましい変化なんだそうだ。

その功績（？）もあってか、どう見ても女神の使者に見えない私でも、衣食住保証ニート生活を送れているのだ。

「あの、王子殿下は…」

「ああ、騎士団の訓練見に行かないんだって」

おずおずといった様子で私に殿下の様子を尋ねたクレアさんは、私の返答に分かりやすくがっかりとした表情をした。騎士団の訓練の話を教えてくれたのは彼女である。

臣下は皆、殿下を心配しどうにか引きこもりを卒業していただくといういろいろ気を配っているのだ。あれで殿下は臣下から好かれている。美形補正だけじゃなく、殿下の仁徳のおかげだろう、多分。

「あ、でもね、私王族専用の薔薇園を見たい、って言ったら気が向いたら連れて行ってやるって」

「本当でございますか!？」

私が言った途端、分かりやすく表情を明るくするクレアさん。
くそう、愛い奴め。近う寄れ!

でも、最近のシェリア君は本当に角が取れてきた感じがする。

この分ならひきこもり卒業も近いかもしれない。

そうになったら私はお役御免だな。もしかしたら元の世界に帰れるのかもしれないけど、私はその可能性は限りなく低い気がしていた。なんとなく。

帰れなかったら、仕事を見つけないちゃ。まさか城側も用無しになった途端城から放り出すようなマネはしないだろう。求職期間くらいみてくれるはずだ。あわよくば仕事紹介してくれちゃったりして。

なんて事をぼんやり考えつつ、クレアさんと雑談していると、午後のゆったりとした時間は過ぎて行った。

「・・・・・・・・ん」

数十秒ぶりの地面の感覚に遊利は心底ほつとした。魔法師は渡界中に魔素マナにあてられることがないから一般人のように悪酔いすることはないが、気持ちのいい感覚ではないのは確かだ。世界を渡るために必要な膨大な量の魔素にもみくちやにされるのだから当然と言えは当然か。

險越しに渡界魔法の残滓である白い光が消えたのを感じ取り、遊利はゆつくりと瞼を持ち上げた。

眼前に広がったのは緑色。鬱蒼という表現はおよそ似つかわしくないが、青々とした木々が生い茂ってそこに若干の暗がりをもたらしていた。心地よい風が木々と髪を揺らす。

「また森ですか・・・弾もいい加減にしてほしいです」

渡界先の到達座標は、弾がその世界から適当に人気がないが危険は少ない場所をチョイスし座標を割り出し、遊利がその座標を渡界魔法の構築式に組み込む、というスタイルをとっていた。弾が指定する座標はだいたい森なのである。

過去に一度抜けるのも集落を探すのも面倒だから森はやめてくれ、と弾に言ったことがある。
すると彼はこう言った。

「今森ガールとか山ガールとか流行ってるからいいじゃん（笑）」

…あ、思い出したら腹立ってきた。

むくむくとわきだした怒りは、軽く頭を振って忘れることにした。さて、と呟いて気持ちを切り替えたところで、遊利は最寄りの集落を探そうと目を閉じて“遠視”を展開した。

7話 女神の使者？（後書き）

二人が会おうまで、もう少し。

2011/11/13 改稿

8話 期限と勝算

「そこでなんですけど、望月さんには2つの選択肢がある訳です。日本に帰るか、この世界に残るか」

「帰ります」

私が勢いよく即答すると、遊利ちゃんは少し驚いたような顔をした。

私が帰りたと言ったことが意外だったのだろうか。

「…あれ、もしかして帰る派って珍しいの？」

まじまじと私の顔を見る遊利ちゃんに私は尋ねた。

帰るという意思に揺るぎはなかったのだけど、マイノリティになった途端不安になるのは日本人の性だと思う。

「いいえ、帰られる方のほうがむしろ多いくらいです。珍しかったのは、望月さんが即答されたことですよ」

遊利ちゃんは取り繕うように少しだけ笑った。笑顔初めてみた。可愛いなオイ。

遊利ちゃんもこの世界の人々に負けず劣らずの美少女だ。髪サラッサラだし、肌白くてきれいだし、目も大きい。雰囲気はミステリアス系か。

あとで基礎化粧品何使ってるのか聞いてみよう。

全く、この世界に来てから美形との接点が多すぎて、私の美形の定義のハードルが500mくらい上がってそれで怖い。どうしよう美形耐性出来過ぎてて元の世界の芸能人が全員普通に見えたら。

私のどうでもいい不安など遊利ちゃんを知る訳もなく、彼女は話を進めた。

「一度帰るとこの世界へ再び来ることはかないませんが…大丈夫ですか？」

「おk、超無問題」

親指を立てて元気よく答えた私をやはり遊利ちゃんは見つめた。そんなに不思議かなあ？正直会社の事だけが気がかりだったが、地球では2週間くらいしか経ってないらしい。ちょうど有給が終わりかけるタイミングだな。

「…今すぐ帰ることもできますが、どうします？あいさつ回りくらいはしますか？」

「あ、そのことなんだけどね」

私は片目をつぶって遊利ちゃんを見た。

「折り入ってお願いがあるのね」

両手を合わせたお願いポーズ付きで。

…そこ、いい年してとか言わない。

「なるほど、自室警備王子の事が気かりだと」

「あはは、うまいこと言うねえ」

私は遊利ちゃんに事情を説明した。

もし遊利ちゃんが他国のスパイとかだったら国家機密（殿下の引きこもり）を洩らすのは非常にまずいんだけど、私は彼女が日本から来た魔法使いだと言う事を疑っていなかった。

なぜなら！アメ・ーク好きに悪い人はいないと思うのです。

この話で盛り上がったの半年ぶりだよ。超懐かしい。

「私が殿下の引きこもりを直すために召喚された訳じゃないことはよく分かったけど、やっぱりお城の人たちにはお世話になったし、出来ることはしてあげたいんだよね」

最近の殿下の様子を見ると多少強引に行けば外に連れ出す位は出来るんじゃないかと思っている。殿下が部屋から出ないのも、多分意地になってしている部分もあると思うのだ。そろそろ荒療治が必要な気はしていた。

私が遊利ちゃんにしたお願いとは、帰るまでにもう少し時間をもらうこと。

「それで、どれぐらい待ったらいいですか？」

んゝ、と私は考える。短すぎるとうまくいかない可能性もあるけど、待ってもらっている以上あんまり長くも出来ないな。有給も終わっちゃうし。

「えっと…2週間ぐらい？」

「分かりました」

うおーい！即OKするか！短く言いすぎたのかああ！

私的には待ってもらえる最長のラインを踏んだつもりだったのに！くそう！

しかし前言撤回は大人のプライドが許さない。

… 2週間か。

心の中で呟いた。

いや、それくらいでいいのかもしれない。

長すぎてもいいことばかりじゃないしね。

会社の書類の提出期限だって「あと一カ月もあるしー」って後回しにすると、気付いたら締切まであと三日（笑）なんてこともあったしね。人間の最大の武器は学習能力だ！

勝算はある。やってやろうじゃないの。

8 話 期限と勝算（後書き）

間があいてしまった＞＜

2011/11/13 改稿

9話 彼女の見解

彼女が帰ると即答したことに、遊利は正直驚きを隠せなかった。

遊利は通常、落界者に接触する前に場合彼らの様子を観察するために数日を費やす。

しなきゃなくてもいいことではあるが、落界者たちの状況を把握することは遊利自身のリスクを減らすことにもつながる。

たとえば落界者が勇者や生贄など何らかの役割を求められた《召喚》という形で異世界へと渡った場合、召喚した側は遊利と落界者の接触を必死で妨害することもある。

他国のスパイと勘違いして遊利を殺そうとすることも珍しくない。

そういう理由から数日間早沙子の様子を見ていた遊利は、王子殿下と早沙子の關係に気付いたのだった。

これは、互いに隠そうとしているものの好きあつてな、と。

根拠はといえば「女子の勘」に他ならないが、遊利はほぼ確信していた。

だから早沙子が「帰る」と即答した時、不覚にも驚きが顔に出てしまったのだ。

「…悩むくらいは絶対すると思ったんですけど」

小さなため息とともに独り言がこぼれる。

「ん、坊っちゃん、何か言っただかい？」

身体も声も大きな宿屋〈青空亭〉のおかみさんが遊利に声をかけた。

約束の2週間の間は滞在する予定の宿で、新しくはないが清潔で、料理もおいしい穴場的な宿だ。

おかみさんも王都の人々から慕われていて、夜には宿屋の一階部分にある酒場はたくさんバブの客でにぎわう。

遊利はそこで遅めの昼食をとりながら考え事をしていたのだ。

まだ数日ほどしか滞在していないのだけど、気さくなおかみさんとはよく世間話をしている。

おかみさんの話はどこぞの花屋の娘の三角関係から、おいしい喫茶店の情報までその内容は多岐にわたり、幾ら聞いても飽きない。これは才能だろうな、と遊利は思う。

「いえ、何でもありません」

遊利は軽く苦笑いをした。普通なら聞こえるはずないと思うつぶやきだったのだけど。

おかみさんの情報網は人脈以外にもその地獄耳によるところも大きいのだろう。

夕食の下ごしらえで忙しそうなおかみさんとはそれ以上話が膨らまなかったので、遊利は食事に戻った。

それにしても「坊っちゃん」か、と心の中で苦笑いをする。

今回は落界者が女性だったこともあり、遊利は特に男装などはしていないのだが、おかみさんにはどうやら「ちよつと良い家の子息の王都見物」と思われているらしい。

やはり髪が短いのと、動きやすさを重視した男物の服を着ていることも原因らしい。

それが最大の原因だと考えている遊利は、この国では、今自身が身につけている「黒のリボンタイ」は未婚の男性が身につける風習があるなど知る由もない。

さっきの読み違いといい遊利が女子としての自信を若干なくしたのは言うまでもないだろう。

アルシエリア・オル・アクセレニア。ここアクセレニア王国の第一位王位継承者にして現国王唯一の実子。

国王が健在な今、彼の人が直接国政を行っている訳ではないが、

郊外の王国直轄領地の運営や、政策や福祉の整備などを国王に進言していることが評価されており、国民からの支持は篤いようだ。

その恵まれた容姿も支持に一役買っているのだろう、王都の市場にはアルシエリア皇子の絵姿を置いている商店も少なくなかった。

しかし彼の人が病で床に伏せているというのも広く認知されている。

これは国から公式に発表があつたようで、王子は国の行事を一年ほど欠席している。

王都ではこれに関して様々なうわさが飛び交っているが、中には毒殺未遂↓ひきこもりと正確な事実を伝えているものもあるようだ。魔女に呪いをかけられたものの突拍子もないうわさは、政府によるカモフラージュの成果であるのかもしれない。

ここらの情報はほとんどく青空亭>のおかみさんから仕入れたものだ、おかみ様様。

遊利は、《^{ハイド}隠密結界》を使って王子本人の様子も見ていた。

一個人としてのアルシエリア王子は、「主人公気質でやや不器用」というのが遊利の感想だ。

弱者を捨て置けない性格で、熱血め、義理堅い。よくいえば実直、悪くいえばバカ正直。

ぶつちやけると為政者としてははつきり不向きだろうが、それを

補う求心力とカリスマ性を持ち合わせているようだ。
家臣に恵まれれば名君としてあることも可能だろう、と遊利は思う。

しかしこれは《^{ハイド}隠密結界》を使って数日間彼の様子を見た感想だ。
これも彼の側面ではないのだろうか。

毒殺未遂事件後頑なにひきこもっていた彼が何故望月早沙子をそんなに受け入れたのかはわからない。

波長があつたか、顔が好みだったか？

こればかりは本人に聞くほかないが、2人の相性は悪くないように見える。

少なくとも王子の方は、早沙子の事を好きだと思う。

早沙子はどうだろうか。彼を気に掛けるのは友情や恩義からだけではないうちに思うが、

どこか一線を引いて慎重に接しているように見える。

いつか帰ることを見越して必要以上に情が移らないように接していたのだろうか？

遊利は別段早沙子にこの世界に残ってほしい訳ではないが、もしかしたらうまくいくかもしれない男女の中を引き裂くきっかけを作ったかと思うと、複雑な気持ちになるのだ。女子として。

遊利の役割は、《落界者》に残るか帰るかを選択権を与えることだが、同郷のよしみというのではないが、彼らにはなるべく幸せな選択をしてほしいと思っている。

ただ「ここが元いた場所ではないから」という理由だけで帰ることを選択してほしくないのだ。

「坊っちゃん、食べ終わったかい？」

「あ、はい。とてもおいしかったです。ごちそうさまでした」

いつの間にやら食器の中は空になっていたらしく、おかみさんに声を掛けられて遊利は物思いから現実に取り戻された。

ともあれ、遊利にできることは早沙子の選択を待つだけだ。

昼食も終えたことだし、昨日おかみさんに聞いた裏通りの古書店でも行ってみようかな、と遊利は青空亭くを後にした。

9 話 彼女の見解（後書き）

2	2
0	0
1	1
1	1
/	/
1	1
1	0
/	/
1	2
3	9
改稿	誤字訂正

10話 心変わり

遊利ちゃんと期限の約束をしてからの私は頑張った。超頑張った。

強引な手もそこそこ使ったし、文字通り扉まで引っ張っていいこうとしたこともあったし、プチ説教もくれてやった。若干黒歴史。

だが思った以上に、いや、想定を遥かに超えたレベルでシェアリア君は頑なだったのだ。

気付けば約束の期限は明日に迫っていた。

「全く、どこのアイアンメイデンだよ……」

「難儀ですねえ」

私は自室で遊利ちゃんに相談に乗ってもらっていた。「殿下脱引きこもり作戦」に行き詰ったから、気分転換に現代トークしたかったって言うのもあるけど。

初めて遊利ちゃんに会った日、「何かあったら、呼んでくださいればすぐ行きます」と言っていた通り、彼女は呼んだらすぐやってきた。

来るはずないか（笑）とか思いながら、「遊利ちゃん、ちょっと

相談があるんだけど、なんて…」と呟いた20秒後、彼女はバルコニーからガラス窓をノックしていたのだった。

どとどとやって!?!とかここ5階ですよ嬢さん!?!とかお城の警備とかこれで大丈夫なんですか!?!とかテンプレな突っ込みどころは色々あるけど、全て遊利ちゃんが魔法少女だから、つてことで解決するのだろう。深く考えないことにした。そんなことよりシェリア君という名の鉄壁要塞の攻略法だ。

「もうひと押し!?!って感じではあるんだけどねえ」

私がため息とともにそういうと、遊利ちゃんは少し探るような眼でこちらを見た。

「・・・でも、まだ完全な詰み、という様子にも見えないんですけど?もしかしてまだ切り札があったりします?」

「・・・うん、まあ、ね」

私の歯切れは悪い。これは切り札と言うには余りに不確実で、私としても出来れば、というか絶対に使いたくなかった手段だ。

そしてひきこもりの根本的解決にはつながらないかもしれない。一矢報いることができるかもしれない程度の成果しか上げられない可能性が高いだろう。

でも、このお城でタダ飯食らいのニート生活を送らせていただいた身としては、何の成果もないのは流石に拙いだろう。っていうか

人としてどうかと思うのです。

正直この手も通用するか分からない。そしてこれがダメだった場合詰む。

その時は陛下に土下座するしかないな、と思い、私は憂鬱な気分になった。ブルーを通り越して紫である。

「やらないで後悔するのとやって後悔するのはどっちがいいか、は基本場合によりけりだと思いますけど、今回は後者な気がしますよ？」

「その心は？」

「後腐れないから」

私は思わずぐぬぬ・・・と唸ってしまった。私の躊躇を読み取ったのだろう、これは彼女なりに背中を押してくれているのだろうな。理になっっているから無理やりにも励まされてしまう。

優しい子だ、と思う。

お城の人々への義理を果たすために、シェリア君の友人として彼の将来のためにも、遊利ちゃんの応援にこたえるためにも。

取れる手段はとっておかねば。私は気合を入れ直した。

「遊利ちゃん、ありがとね」

心からの感謝をこめて遊利ちゃんに笑いかけると、彼女は照れたようにきよときよと視線を彷徨わせた。

・・・ぎゅってしていいかね。

遊利ちゃんとの相談を終えた後、私は例によってシェリア君の執務室でお茶を飲んでいた。

最近はずっと開口一番にこやかな笑顔と主に「さあ外でようか！」と声をかけ、あの手この手で外へ連れ出そうとしていたのだが、今日は色々思うところがあつておとなしくしていたのだ。

部屋には二人っきりで、沈黙が流れていた。カップをソーサーに置いたり、シェリア君が手にした書類をめくる音だけが響く。

普通に考えたら充分に気まずい状況なのだが、この空間は私にとつて心地よかった。シェリア君も気まずさは感じていないようだ。

「今日は、外に出ろって言わないんだな」

暫くして沈黙を破ったのはシェリア君だった。ちょうど書類に一通り目を通したところのようだ。おつかれさまです。

「諦めたのか？」

「もしかして、出ろって言って欲しかった？」

若干シェリア君が残念そうに見えるのは私の気のせいだろうか。質問には答えずに茶化すと、シェリア君も小さく笑っただけで答えなかった。

「…あのさ。シェリア君、もし——」

自然に言葉がこぼれた。遊利ちゃんが来てから、ずっと頭の中にあった言葉。

言ってみたい気も、絶対に言いたくない気もする言葉。

——もし、シェリア君が外に出なければ、私元の世界に帰るって言ったらどうする？

しかし、私の口からその続きが出てくることはなかった。そもそも私は帰ると決めているのだから、こんな交換条件は成り立たない。

そしてまた、シエリア君がこの条件を呑んだにしろ呑まなかったにしろ、私は恐らく——苦しむことになる、という予感があった。前者は勿論、元の世界を捨てなければならなくなるため。後者は——なぜだろうな。ひきとめてもらえなかったらショックを受けるってか？帰ると決めているのに？どこのツンデレだまったく。考えるのよそう。

「もし、なんだ？」

「……ん、いや、なんでもない」
「なんだ、気になるな」

そういうシエリア君だったが、私の様子を見たのかそれ以上追及してくることはなかった。マジ紳士。

でも、帰るといふ事実は絶対に伝えなければならない。

約束の期限は明日だ。世話になった人々に一通り挨拶しようと思ったら、今日中に始めないと間に合わないだろう。

半年間も侵食の面倒を見てもらったお城の人々には申し訳ないけど、私では力不足だったようだ。そのあたりの謝罪もしなければならぬ。

そう、こんなに言いにくいのは投げ出す形になってしまった罪悪感だ。それだけ。

いざシエリア君を目の前にとすると、先ほど固めた決意が揺らいでひよりかけたが、何とか自分を奮い立たせて重い口を開く。

「あのね、シエリア君——」

私はこの世界の人間ではないし、元の世界にたくさんの物を置いてきている。

つくづく城の人には申し訳ないが（大切なことなので何回もいきます）、私にだって都合がある。帰らなくてはならない。

いいにくいなんて言ってられないのだ。私は膝の上で握った両拳にギュツと力を入れた。オラに力を！

「私、帰ることになった」

言い切った直後、あ、ズルイ、と自分自身に突っ込みを入れた。「なった」って。自分で決めといて「なった」って。

「……何？」

シエリア君は器用に片眉を上げる。

「いや、だからね、私、帰るの」「帰るって、どこに」

「元の世界に」

この上なく歯切れ悪く私がそう言い切った時、シエリア君の雰囲気がサツと変わった。

表情はそれほど変化したように思えないのだけど、なんだろう、オーラが紫色になったというか。

「…どういうことだ」

数秒の沈黙ののち、シエリア君が重々しく口を開いた。なぜ、とかどうやって、と来ると思ったが、どういうこと、と来たか。一度に説明できるから手間が省けるな。

…なんて心の中では冷静さを装ってるけどね！シエリア君顔が怖いですよ！その地を這うような低い声も怖いです！そのせいで私はb k b rですよ！

私はその雰囲気には推されてばそぼそと説明を開始した。

元の世界から迎えが来たこと。私がここに来たのは事故のようなものだったこと。元の世界では2週間しか経っていないらしいこと。

一通りの説明が終わると、シエリア君は「…と長い息を吐いて、どっかりと長椅子にもたれかかり、額に手を当てた。

「帰るって、いつだ」

…うわあ、怒ってる。そして私の答えは恐らくもつと怒らせる。
超怖いんですけど。美人がキレると迫力がっパネエ。

今すぐここから逃げ出したい衝動を何とか抑えつけ、答えを絞り出す。

「…明日」

「明日!？」

シェリア君は勢いよく椅子から立ち上がった。私もそれに驚きつられて立ちあがってしまう。

シェリア君が一步私への距離を詰めた。私も一步後ずさる。

「なぜ…そんな、急に」

「ごめ…」

シェリア君が一步私への距離を詰めた。私も一步後ずさる。
シェリア君の裏切られたような表情に、震える声に、見ないふり
をしていた罪悪感が激しく存在を主張し始めた。なんか…凄い責め
られている気分。いや、ていうか実際に責められてるの?なんかも
うわけわかんない。

シェリア君が一步私への距離を詰めた。私も一步後ずさる。幾度かそれを繰り返すと、私の背にゴツンと壁が当たった。部屋の隅まで追いつめられたのだ。

そう、追い詰められているのは状況的に私なのだが、シェリア君の方がよっぽど追い詰められた表情をしていた。

「……」

何か言いたげに、シェリア君の唇が歪められる。

一飯どころじゃない恩を受けといて、投げ出す形になった私。責められる？軽蔑される？

——怖い。

私は口を開けば謝罪の言葉しか出てこないのは分かっている、キョツと口を引き結んでシェリア君の眼を見詰めた。

私とシェリア君は30センチ以上の身長差がある。だから今のように二人が至近距離だとかなり首の角度を上げないとシェリア君と目が合わない。

本当なら視線逸らして俯いていたところだけど、上を向いていないと、涙が出てしまいそうだった。年下に泣かされるなんて状況は何としても避けたいし、私が今この状況で泣くのはこの上なく卑怯、ていうか汚いと思う。KIAIで我慢だ！

沈黙が訪れる。

シェリア君は険しい顔で私を見下ろしていた。
けどその紫の瞳はきつと私を映してなくて、どこか遠くを見ているようだった。

私はシェリア君を見上げるふりをして、必死に涙腺への抵抗を試みていた。瞬き、ため、絶対。

先に動いたのはシェリア君だ。気付いたら、シェリア君の頭が私の右肩に乗っていた。

額のあたりが肩の上に乗っており、確かな重みを感じる。吐息を感じられるほどの近い距離。サラサラの金髪が、私の首筋を撫でた。

「…シェリア、君」

どうしたらいいかわからずに、私は彼の名前を呼ぶ。もしかして、これは怒ってるのではなく…

悲しんで、いる？

「…サーシャは元の世界に、家族はいるのか」

「…いるよ」

「仕事も、してたんだったか」

「…うん」

「そう、か」

今までとは比べ物にならないくらい落ち着いた声色だった。震えは、まだ完全には取れてないけど。

「なら…そうだな。帰るべきだ」

「……………」

なんて返すのが正解なんだろう。気の利いたことひとつ言えない自分が嫌になる。

そして私は結局一番無難な答えである沈黙を選ぶのだ。

数秒かも、数分かもしれない間が空いて、シェリア君はふうつと息を吐いて顔を上げ、くるりと私に背を向けた。

突然壁とシェリア君のサンドイッチから解放された私は、ここで初めて全身ががちがちに緊張していたことに気がつく。

「サーシャ」

「…ん？」

「前に王族専用の薔薇園に行きたいって言ってただろう」

「…う、ん」

「最後だからな。連れてってやる」

えーと、それはつまり…？

「……え」

この人今、いま。

外に出るって言った？

「シェリアくん、行くぞ。俺の気が変わらないうちに」

すたすたとドアにか近づいていくシェリア君の背中を見ながら、私はここでようやく『切り札』——帰る前に、薔薇園を見せてもらえないか、とお願いしてみるつもりだった——が図らずとも切られる前に叶ってしまったことに気がつくのだった。

10話 心変わり（後書き）

また間があいてしまった……

がんばります。

2011/11/13 改稿

11話 英雄譚にありがちな（前書き）

頭の中にあることを文章にするってすごく難しいですね。

11話 英雄譚にありがちな

静かに執務室のドアを開けた人物を認めて、いつものようにドアの外に控えていたアレク君はそりやあもう驚いていた。

「びつくり」のテンプレのような表情のままフリーズしたアレク君。それでもそのお顔の美しさが損なわれないとは大したものですよ。やっぱ美形は人類の宝だね。国を挙げて保護するべきだと思う。

「…何を呆けている」

アレク君の反応は恐らく予想通りだったのだろうが、シェリア君はじろりと彼を睨みつける。

「っし、失礼しました！」

シェリア君の声にハッと我に返ったアレク君は姿勢を正し、非礼を詫びた。それでもまだ動揺が抜け切れてないのか、どもってしまっているけど。

フンと鼻を鳴らすシェリア君だが、私にはなんとなく分かる。シェリア君は、照れているのだ。

例えるなら、今までジーンズばかりはいていた女の子が、急にスカートをはき始めて、周りに「どうしたの？」って聞かれて「か、

関係ないでしょ！」と答えちゃう、みたいなの。うっん、分かりにくいか。

「薔薇園に行くから、ディランを呼んで来い。あまり騒ぎにはするな」

「はっ！」

恐らく照れ隠しのために普段よりややぶっきらぼうにシェリア君が指示すると、アレン君は比較的簡素な（しかし王族に対しても失礼にあたらない）礼をとって踵を返す。

頭の中には大量の疑問符が浮かんでいるだろうに、余計な事を訊くこともない切り替えの早さはさすがだ。私に一瞬だけ、何か言いたげな視線を寄越したけどね。

特に会話もない気まずい待ち時間は、私は頭の中で童謡を歌ってやり過ごした。ちらと盗み見たシェリア君の様子は、壁に背をもたれさせ難しげな顔をしている。

一年半ぶりに部屋の外へ出た感慨に浸っている……のではありませんせんよね、どう見ても。

さんぽ、ふるさと、もみじ、さくら、アイスクリームの歌をフル

コーラスで脳内再生し、グリーングリーンの3番の歌詞を思いだしている途中で待ち人達がやってきた。この歌6番まであるんだぜ。そして結構深い歌なんだぜ。

アレン君に連れられてきたディラン君はシェリア君の姿をみても全く表情を変えずに、淡々と騎士の礼をとった。ううん、この人も大概期待を裏切らないな。

ディラン君の表情らしい表情を私は見たことがない。でもどんな場合においても、ディラン君のその無表情を不快に思ったこともないのだ。

良い大人である以上、愛想笑いくらい出来ないのは大きな問題だが、ディラン君だと何故か許せてしまう。これもあれか、美形補正と言っやつなのか。くやしいのう。

「行くぞ」

それだけいうと、アレン君はさっさと歩きだしてしまった。私たち3人はあわてて後を追う。ディラン君はさつと前に出てシェリア君の2メートルほど前を歩く。

王族の前を歩くのは基本的に失礼にあたるのだが、近衛騎士に関しては警護の場合に限りこれが認められている。そりゃあ脇は万全ですが正面ががら空き、なんて笑うに笑えないからな。

ちなみにここの王族は必ずいかなるときも2名以上の護衛をつけ

ている。城内を歩く時は勿論、寝る時も部屋の前に2名控えることになっている。まあ、これはシェリア君の事件の後に出来た慣例のようだが。

そんなわけで、デイラン君、シェリア君、私、アレン君の順番で人気がない廊下を進む。

「騒ぎにたくない」というシェリア君の言葉の意図を正確に汲み取って、遠回りになるが人の少ない道を選んでいるようだった。王族の居住区なんかは私も出入りが少なく、はじめてくる道もあるくらいだ。

移動中も勿論無言だ。

移動という明確な目的がある分さっきの待ち時間よりは気まずさは薄い、この人数で無言とか不自然すぎワロタ。

そしてその原因は私がシェリア君を不機嫌にさせてしまったからだよね。

そりゃあ、友人に何の相談もなく明日帰りますって言われたら怒るのは分かるけどさ。今回の場合は特殊なんだよ！事情が事情なんだ！…と、自分に言い訳をしてみても、ああ、浅ましいと自己嫌悪。うああ思考が負の連鎖！無限ループって怖い。

葬式のような空気の中自分の足元を見ながら歩く。気まずいよ、空気が重いよ、いたたまれないよ。ああ、なんだか警察に連行される犯人の気分になってきた。

そんなことを考えていると、ふと視界が明るくなった。足元に光がさしている。

おやと思つて自分の靴から目線を外し、顔をあげると、渡り廊下の右手に小さな庭園があつた。

四方を城の建物に囲まれた10メートル四方くらいの中庭だ。

今歩いているのはその中庭につながる渡り廊下だった。こんな場所があつたなんて知らなかった。

小さな噴水と白いベンチがあり、カラフルな種類の花がたくさん咲いている。

「きれい…」

思わず私が立ち止まると、一行も同じく立ち止まる。

「ここは、ブランカ前王妃——殿下の祖母君が作られた庭園です。ブランカ様はそれはそれはこの庭を大切になさっていたそうで、ご自分で隅々まで手入れなさっていたそうです。崩御された後も後も城の者が管理していて、今では王妃様がたまにここで休まれるそうです。サーシャ様もあまり王族の居住区画には出入りされてませんから、この庭をご存知なかったのも無理はありませんね」

アレン君が丁寧の説明を入れてくれた。なるほど、前王妃様のプライベートガーデンね。

お花も香りがきつくて華美すぎるものばかりではなく、おとなしめで上品な色合いのものが多く。前王妃様の人柄が知れるようだなあ。うん、ホントに素敵なお庭だ。

「見ていつでもいいぞ」

すっかり目を奪われてしまった私に気付いたのか、シェリア君が許可をくれる。いいの！？という気持ちを込めて彼の顔を見ると、彼は幾分柔らかい表情で頷いた。

作った人のお孫さんの許可が出たので、年甲斐もなくはしゃいだ気分で庭に下りたつ。日の光が注いで、気持ちいい。流石に中庭なので風は少ないが、とても静かで落ち着く。噴水の流れる音が涼やかで心地よい。

ううん、今でも王妃様が使っているのか。うっかりお花踏んだりしないようにしないと。

そんなことを考えながらふと視線をあげると、真向かいに城の一部が見える。4階分の大きな建物だ。先ほどのアレン君の説明通り、ここら一帯は王族の居住区なのだろう。等間隔に並ぶどの窓にも人

影は見えない。

——じゃなかった。見えた。

3階部分の一つの窓があいていて、そこに人影が見える。その人物もこちらを見ているようで、身体は窓側を向いている。あの白い服は、騎士団の人かな。

その人物がゆっくりと手かざした。ちょうど私に向けるような形で。

その手には黒いものが握られている。

あれは——

私は目を凝らした。

黒い物体が太陽の光にあたって一瞬きらめいた。

拳、銃？

私がそう認識するのと、ジュツという音とともに私の右肩が熱を持ったのはほぼ同時だった。

「……え？」

熱い。右肩が熱い。

首をひねって右肩を見ると、ドレスが焦げたような跡がついて裂けていた。

ああ、これ借りもののなのに。一応私のために仕立てられたものだけど、帰る時に返そうと思っていたのに。

ドレスにジワリと赤色がにじむ。

「痛っ……」

出血を知覚した瞬間、思い出したように肩が痛み出した。痛い。なにこれ。なんで？

思わず肩を押さえてしゃがみこむ。抑えた手が赤く染まる。

「サーシャ！！！！！！」

誰よりも先に動いたのはシェリア君だった。

私の腕を引っ張って自分の後ろにかばおうとする。

ディラン君が何事か叫んだけど、混乱した頭ではよく聞き取れない。

もう一度窓の方を見ると、先ほどの人影が再び銃を構えていた。

——撃たれる！

「やつ…」

両手で顔をかばおうとする。再びジュッという音が鳴るのと影が私に落ちたのは同時だった。

いつまでたつても肩以外に痛みがやってこないの、恐る恐る目を空けると、私を抱きかかえたシェリア君が驚きの表情のまま固まっていた。

目線を上げると、私たちに影を落としているものが視界に入った。

黒い外套がはためいている。外からの風はないのに、それ自身が風をまとっているみたいだった。私は、この人を知っている。

「…遊利ちゃん」

私も茫然としたままでその人物の名前を呼んだ。

11話 英雄譚にありがちな（後書き）

2011/11/13	誤字訂正
改稿	

12話 最後に、ひとつだけ

ちらりと私に視線を寄越した遊利ちゃんは、銃の人影と対峙する形ですぐに前を見据えた。

「逃がさない」

そう言った遊利ちゃんが右手を前に突き出した。その瞬間、周囲に風が起こる。

「わっ…」

思わずその声を上げると、遊利ちゃんがこちらに向き直った。

「傷を見せてください」

そう言って遊利ちゃんがしゃがみこむと、シェリア君が私を抱く腕に力がこもる。

「遊利ちゃん、どうしてここに…」

「知り合い、か？」

私がこくりと頷く。肩の痛みに、おもわず顔が歪んだ。

遊利ちゃんはサツと肩口部分の服を破くと、傷口を指でなぞる。
いいいいたい！！

「これならだいじょうぶ」

涙目で彼女を見ると、心底ほつとしたような表情でそう言った。
遊利ちゃんは立ち上がると、表情を引き締める。

アレン君とディラン君が遊利ちゃんに剣を向けていた。遊利ちゃんは興味のなさそうな表情で二人を見る。

「早沙子さんの止血を。手近な部屋に運んでください。弾はかすっただけですし、出血量も多い訳ではないので大丈夫です。…私はアレを追います」

未だ警戒態勢を解かない二人に、

「早く！」

遊利ちゃんがそう一喝すると、アレン君がはじかれたように私に

近づいた。私とシェリア君の安全確保を第一優先事項に置いたようだ。

その隙に遊利ちゃんが人影のいた方向にかけだすと、ディラン君もそれを追った。

「殿下、サーシャ様、こちらへ」

アレン君が警戒態勢を解かないままシェリア君を先導し、私はシェリア君にお姫様抱っこされたまま手近な部屋に運ばれたのだった。

な、なんか超展開……。肩の痛みとかどうでもよくなってきた。

くそ、なんなんだ。なんだっていうんだ！！！！

重い体を無理やり動かして逃げながら、銃を持った男——レギは内心でそう叫んだ。

簡単な仕事のはずだった。この「マガン」という武器で女に傷をつけ、用意された逃走ルートから逃げればいいだけの。

レギは王都でいわゆるゴロツキと呼ばれる存在だ。王家の御膝元である王都は国内で最も治安がいい街だが、どこにでもレギのような存在はいるもので、中心街から外れた比較的貧しい層が住んでいる区画を根城にしている。

男がレギにコンタクトを取ったのは一週間前のことだった。全体的に色素の薄い、長身痩躯の男だった。金色で切れ長の瞳からは考えが読み取れなくて、恐怖心を掻き立てられたのは記憶に新しい。

男は「依頼」と言った。王城にかくまわれている黒髪黒目の女を「マガン」という武器で攻撃すること。女はただの平民だから万が一捕まっても重罪にならない、「マガン」ならば引き金を引くだけで簡単に相手を傷つけることができる、傷つけるだけでもいいが殺してもかまわない、変装用の騎士団の制服はこちらで用意する。

言葉巧みな男の誘いと、莫大な成功報酬に釣られてレギはその話に乗ることにした。

無論きな臭い話だと思わなかった訳ではない。しかしリスクと成功報酬を天秤にかけた時、これは天が授けてくれたチャンスにしか思えなかったのだ。

——この報酬があれば、貧民街から出て家族にいい暮らしをさせてやることができる。

彼は実家から家出同然で出稼ぎに来ていたのだが、その喧嘩っ早さからまともな職に就けず、チンピラまがいの行為をしているという現状に焦りを感じていたのだった。

「くそっ……」

身体がどんどん重くなって言うことをきかなくなる。まるでおもりを付けられたようだ。背後からは先ほど中庭に突如現れた黒い影の気配が迫っている。

ついには立ち上がることができなくなり、這いつくばるようにして逃げる。レギは、身体の重さだけでなく黒い影への恐怖で力が入らなくなっていることを自覚していた。

捕まったら、殺される。

その確信がレギの中にあった。

とうとう影がレギに追いついた。ほふく前進のような格好で逃げようとするレギのわき腹を影——黒い外套を着た遊利が蹴り飛ばし、無理やり仰向けにする。

黒い髪と黒い外套と対照的な白い肌。その冷たい視線で射すくめられたレギは死神を連想して顔を真っ青にする。

「ぎゃっ」

ぐりと遊利がレギの右腕を踏みつけた。痛みで「マガン」が手からこぼれる。レギは、「マガンで反撃する」という選択肢を忘れてしまうほど、遊利に恐怖していたのだ。

遊利はレギの手からこぼれおちたものを拾い上げた。

「シルベスターエース式の魔銃マガンですか。連射速度は遅く、精度と弾速に特化した小型銃。なるほど、二発目を撃つのもたついたのはリロードに戸惑ったからですか」

抑揚のない涼やかな声色もレギの耳を素通りするだけだった。

「ひいつ…」

遊利が魔銃からレギに視線を戻すと、レギの口から悲鳴がこぼれる。

「頼む、い、命だけは……!!」

「正直に質問に答えてくれたら、ひどいことはしません」

遊利の冷徹な表情には慈悲の感情など浮かんでいなかったが、レギは最後の希望にすぎる思いですべてを話した。

「なるほど、大変参考になりました」

聞いてないことまでペラペラしゃべったレギが口を閉ざしたのを見て、遊利はそう声をかけた。

「ほ、本当にこれ以上は何も知らないんだ！あいつがいきなり現れて……」

「ええ、もう結構です」

遊利はレギの言葉を遮ると、先ほど拾い上げた魔銃をレギに向けた。

銃口はレギの頭部をとらえている。

「……な、何を」

「ひどいことはしません。一瞬で楽にしてさしあげます」

「半日ほどで痛み止めが切れるでしょうが、耐えられなくなったらまた呼んでください。安静にしていれば明日か明後日には傷も完全に塞がりましょう」

「ありがとうございます」

包帯を巻き終わると、殿下、もうよろしいですよ、とグランさんがシェリア君に声をかけた。護衛がアレン君しかいない現状では、シェリア君はこの部屋を出る訳にもいかず、治療中は律儀にずっと壁側を向いていたのだ。

別に肩だけだから脱ぐ訳でもないのに。

「…ふむ。しかしこの傷口はいつたい何でできたもので？ 剣とも弓とも違う。どこかにぶつけた訳でもあるまいて」

「それは…」

私は気まずげに目をそらす。この世界には、銃という武器は存在しない。まして、さっきのレーザー銃のようなものはもつてのほかだろう。何故あんなものがこの世界に存在したのかわんて分かる訳ないし、どう説明したらいいかも皆目見当もつかなかった。

「すまない、説明できない」

シェリア君が助け船を出すと、グラン医師は穏やかに笑った。

「とんでもない。王族ともなれば一介の老いばれ医師に説明できないことなど山のようにあるでしょう。私の本分は患者を治療することですから。出過ぎたことを申し上げたことをお詫びいたしますぞ」
「…すまない、いや、感謝する、グラン医師」
「ほっほ。礼を言われるほどの事ではありません。それより僕は殿下が昔のように「グラン爺」と呼んでくださらないことの方が寂しく感じますぞ」

茶目つ気たつぷりにグランさんがさういうと、シェリア君は苦々しい顔をする。それにまた声を出して笑ったグランさんは、深々と一礼して客室を退出した。

ややあつて、シェリア君は私が横になつてゐるベッドのふちに腰をかけた。私に背中を向ける形になつてゐるので、表情は分からないが、どこことなく思いつめた空気を感じる。

「…すまない。危険な目にあわせた」

先に沈黙を破つたのはシェリア君だった。

「謝ることないよ！」

シェリア君の性格を考えればある程度予想できた内容だったけど、

やっぱり私は即座に反論した。

「シェリア君、私の事守ってくれたじゃん。一番最初に動いてくれたの、シェリア君だったよ」

うつ、視界がうるんできた。ここまで来てやっと緊張の糸がほぐれたみたいだ。

「自分の身を呈してかばってくれたじゃん。本当は、ああゆうのしてほしくないけど、いつもなら、怒ってるけど……。嬉しかったというか、安心したんだよ」

すでに涙声だ。ああいい年してみつともない！歳をとると涙腺が緩くなるんだよ、ほんと。

「さっきは、夢中だった。何が起きてるか分からなかったからな」

私の眼からこぼれた涙をシェリア君がぬぐった。

「さっきの、あの黒い外套の者は」

「…前の世界の友達。そ、そういえば追っかけて行ったけど大丈夫かな」

「デイルンがついてる。問題ないだろう」

遊利ちゃんと知り合ったのはこの世界に来てからだから、前の世界の友達と言うのはかなり違うんだけど、まあ説明しきれないのでぼかしておいた。遊利ちゃんは心配だけど、魔法少女だし、強そうだったからなあ。銃程度には屈しない気がする。

「シエリア君、ありがとね。あんまり騒ぎにしないでくれて」「いや、こちらこそ、気を遣わせた」

遊利ちゃんが私の傷を見ていた時に、彼女は私にしか聞こえない声で

——できたら騒ぎにしないよう誘導してください。すぐ捕まえます。

と言った。理由までは教えてくれなかったが、考えがあるようだったし、私も大ごとにするのは本意じゃなかったの（まあ城に侵入者って時点でだいぶ大ごとなんだが）その旨をシエリア君に伝えた。グラン医師だけを連れて来てくれたアレン君には感謝だ。

「痛むか？」

「少し。でもへーき。かすり傷だし」

シエリア君はまるで傷が自分の者であるかのようにその綺麗な顔をゆがめた。

「…薔薇園、行けなくなったな。すまない」
「…そんな、薔薇園なんて」

いつでも見れるよ、と言いかけた私はハッとして口をつぐんだ。
そうだ、今日を逃したらもう…

「最後に、ひどい思い出になってしまったな」

苦笑するシエリア君。そうだ、これで最後なんだ――

「…最後に」

自然に、言葉がこぼれた。

「最後に、一つだけいいかな」
「何だ？」

迷いはなかった。私は一息に問いかけた。

「部屋から出なかった本当の理由って何なの？」

シェリア君の肩がピクリと揺れた。

12話 最後に、ひとつだけ（後書き）

2011/11/13 改稿

13話 告白

疑問に思うのに、時間はかからなかった。

毒殺未遂のせいで、他人が怖くなったとか、危険に対してものすごく敏感になったとか。

シェリア君がひきこもることになった理由だけど、突然現れた私に対する警戒心の薄さとか、さつき私を、身を挺してかばってくれたこととか。彼の行動はそれと矛盾、とまではいかないけれど――
違和感を覚えることが多かった。

「……ごめん、忘れて、今の」
「……いや」

バカなことを言った、と咄嗟に撤回しようとした私に、シェリア君は――

「俺は、本物じゃない」

――シェリア君は、私の目を見て、きっぱりとこういった。

「俺は、アルシェリア・オル・アクセレニアではないんだ」

ヒュンと鋭利なものが風を切る音がして、遊利は振り向かないまま意識を背後に向けた。

刃物が首に突き当てられる。

とつさに、先ほどの空砲で伸びてしまった足元の男の仲間かとも思ったが、明確な害意を感じず、心の中で首をかしげる。

「…何者だ」

男の声がそう言った。非常に簡潔な問いである。

ここで遊利ははた、と思い出した。先ほど早沙子についていた騎士二人のうち、一人は自分と一緒に追いかけてきていたな、と。

自分が付いていながら早沙子に傷を付けてしまった失態に動揺して、男を捕まえる事ばかり考えていて失念していたのだ。簡単に背後をとられてしまったという事実、遊利は絶対に相手には聞かないように舌打ちした。

「私は『サーシャ様』の友達です」

「…」

騎士は遊利の言葉の真偽を吟味しているようで、沈黙したまま動かない。

先ほど遊利と早沙子のやり取りも見ていたようで、二人に面識があることは認識しているようだ。

遊利の出方を見ているのか、何を訊けばいいのか迷っているのか、騎士はそれ以上重ねて問うてくることはしなかった。

膠着状態にしばれを切らした遊利は、自分から仕掛けてみることにした。

「あなたがしたいのは、対話ですか？尋問ですか？前者ならともかく、もし後者なら、私もそれなりの対応をとらせていただきますけど」

「…」

騎士は無言で遊利の首筋から刃をどけた。遊利はくるりと振り返り、騎士と相對する。

騎士——確か名前はディランだったか——は剣をどけたもののそれを鞘にしまうことなく、警戒を解くことはなかった。

遊利が振り向いたときにディランが若干表情を動かしたのは、遊利が少女のような外見であった（実際に少女なのだが）からだということは遊利には知る由もない。

「それは何だ」

「それ…？ ああ、コレですか」

遊利は右手に持っている魔銃を見た。ディランの警戒の色が強まる。

「こちらに渡してもらおう」

「それはできませんね」

しれっと答える遊利。ディランの表情が険しくなった。

「なぜ」

「この世界にはあつてはならないものだからです」

ごく当たり前のことのように遊利は言った。ディランはその言葉の意味を量りかねる。

「そうですねー…」

遊利は一瞬何かを悩むようなしぐさを見せた。

しかし次の瞬間、彼女の右手に握られていた魔銃がバラバラと音を立てて崩れていった。彼女の足元に極小の部品が散らばる。

「これを組み立てられるくらい技術レベルが進歩したら使ってもいいんじゃないですか？」

につこりと笑って言った遊利にディランは眉を寄せる。ディランが最小限の言葉しか発していないのは、会話が終始遊利ペースなことにへの抵抗であった。

「この人、捕まえなくてもいいんですか？」

遊利が床の男を見ながら言う。ディランは遊利を見据えたまま動かない。まるで男より遊利の方が危険だ、とでもいわんばかりである。

鼻白んだ表情をしてディランを一瞥した遊利は、フードから小さな手枷を取り出した。

仰向けで伸びている男をやはり蹴飛ばしてうつぶせにひっくり返し、後ろ手に手枷をかけ拘束する。

「どうぞ。鍵です」

遊利は手枷のカギをディランに差し出す。

少しの間をおいた後、ディランは遊利から鍵を受け取った。

「…お前は「セレバイア殿！」

何事かいいかけたディランの声に、第三者の声が重なった。

廊下の向こうから白い制服の人影が近づいてくる。あれは…確か最近近衛騎士に昇格した新米だ。名前は、残念ながらディランの記憶には残ってなかった。

ちなみにセレバイアはディランの家名である。

新米騎士はディランの前まで来ると礼をとった。

「定時の見回りか？」

「はい、異常はありませんでした。先ほどのあたりで誰かの叫び声のようなものを聞いた気がするんですが…」

新米騎士はここで一度言葉を区切る。

「それで、この者は…」

新米騎士は床に転がっている男を見て言った。

顔に疑問符が浮かんでいるのは、男が騎士団の制服を着ているからだろう。

ディランはちらりと周囲に目を走らせた。遊利の姿はない。

新米騎士も、遊利に気付いた様子はない。

「侵入者を発見したため、拘束した」

「！っし、侵入者…」

何度も言うが、ここは王族の居住区画である。侵入を許したというのは、騎士団の失態に他ならなかった。

「恐らく素人だな。連行して尋問を頼めるか？報告は俺がしておく」「了解しました！」

ディランは鍵を新米騎士に預け、彼が気絶した男を背負っていくのを見送った。

彼が廊下の角を曲がり姿が完全に見えなくなったところで、ディ

ランは振り返ってあたりを見回した。

遊利の姿は見当たらない。一体どこへ行った――？

「タイミング良かったですね」

「…っ!？」

いきなり背後から声がかかりディランは振り返って臨戦態勢をとった。

さっきまで新米騎士がいた位置に遊利がいた。バカな。あり得ない。そんな思いがディランの頭をめぐる。この近くに隠れられるような場所などありはしないのだ。

「今まで、どこにいた」

「どこにつて…隠れてました。見つかったら面倒だなんて思ってた」

なんでもないことのように言う遊利を見て、ディランは身体から力が抜けるのを感じた。

先ほどの少女が侵入者を拘束した時のことと言い、少々理解の範疇を超えるようだ、と考えたのであった。

「犯人は片付いたことですし、『サーシャ様』のところに戻りますか」

すたすたと歩き始める遊利。その後ろ姿にやや違和感を覚えて、
ディランは思わず彼女の左腕を引いていた。

「……なんです？」

遊利は歩くのをやめてディランを振り返る。

「左手」

「……」

違和感を覚えたのは、遊利の歩き方だった。左手がほとんど動いてない。

そういえば男を拘束した時も右手だけで器用に手枷をはめていたことを思い出す。

「見せる」

「……っ！」

ディランは遊利の左手をぐいと引っ張った。一瞬遊利の表情が歪む。引っ張った反動で彼女の手から赤い布が落ちる。

彼女の掌は赤く染まっていた。中央が円形にえぐれて血がにじん

でいる。

布で血を止めていたのだろう、赤く染まっていたのは彼女の血だったのだ。

これは、男が発砲した2発目の弾丸をを手で受け止めたことが原因だった。

ディランはおもいきり眉をひそめる。

「手当を」

「だいじょうぶです。自分でできます」

「ダメだ。片手では支障が出るだろう」

「でも」

「黙ってついてこい」

左手の手当てなのだから、必然的に使えるのは右手だけになり、手当に支障が出るのは明白だった。

渋る遊利を連れ、さて、医師は誰を頼るべきか、とディランは思考を巡らせた。

13話 告白（後書き）

2011/11/13 改稿

14話 自己証明の不確かさ

自分はごく平凡な一般市民なのだ、と彼は言った。

優しい母親、少しだけ頑固な父親、近所の子供のリーダーだった兄。

そんな家族に囲まれていた彼は、平凡な暮らしを幸せと感じるには幼すぎた。

ある、嵐の日だった。

俺の住んでいたのは小さな町だったが嵐なんて珍しいものじゃなかったから、大人たちも落ち着いて対応していた。

俺は…普段と違う町の雰囲気になんか浮足立っていた。雨の中屋根を補強したりしている大人たちがヒーローに見えたりしたんだ。

そして雨もやんだ頃、俺は親の言いつけを破って、氾濫した川を見に行ったんだ。当時の俺は、大人と子供の間位の年齢だったと思う。子供扱いが気に食わなかった。家族が全員家のために何かしている中、じっとしていられなかったんだ。あとは…まあ、言わなくても分かると思うが、俺は足を滑らせて濁流にのみ込まれた。

…陳腐な死に方だな。嵐がくると、近隣の町でも一人二人川の様子を見に行つて死者が出るんだ。

自分は大丈夫だなんて、誰でも思っただろうな。

知ってるか？死ぬ人間は、自分が死ぬ瞬間ってものを知覚できるんだ。

俺は口に泥水が入り、流木が体にあたって朦朧とした意識の中でも、自分の意識が途切れる瞬間ははつきりと覚えている。

次に目を覚ました時、俺はベッドの上にいた。ああ、助かったのか、と思った。

身体は石のように重いし、頭はガンガン痛む。手足はしびれ、喉はからからだった。生きている——それが奇跡だと思った。それだけで良かった。

だが——現実はその甘くなかった。俺は、『俺』ではなくなっていたんだ。

最初は訳がわからなかったな。鏡を見て、自分の姿が変わってしまったのが分かって、まだ夢だと思ってたよ。

でも、時が経つと、さすがに認めないわけにはいかなかった。自分は別の人間になってしまったんだと。

俺が周りの人間の事や、過去の記憶を思い出せないでも、毒の影響による記憶喪失ということで片付けられた。俺が自分はアルシエリアじゃないと言っても、信じるものなんていなかった。鎮静剤を打たれるだけだったな。

まあ、実際姿はアルシエリアそのものだったんだからな。……そし

て、俺は、アルシエリアとして生きていくことを余儀なくされた。

それからは、まあ、想像通りだよ。周りの顔を覚え、王族としての礼儀作法や世界の常識、政治の知識を叩きこんだ。ある程度は『アルシエリア』の身体がおぼえているようで、まあそれほど不自由したことはなかったな。

だが、無意識に他人との接触は避けていたな。相手はこちらを知っているのに、こちらは相手を知らないのが居心地悪くてな。そうして、あまり出歩かないまま半年が過ぎた。

俺が次第に回復していくにつれて、現実味を帯びてきたのが王位の話だ。アルシエリアは第一位王位継承者であるから、順当にければ王になるのは俺なんだが…

ここで、シエリア君は言葉を止めた。
そしてたつぷり間をおいてから、絞り出すような声で言った。

「俺は、怖くなっただ」

今にも消えてしまいそうな声だった。

「偽物が王になってもいいのか?と」

「アルシェリアの身体が政治の知識やノウハウをある程度おぼえているとはいえ、実際に政治を行うのは俺だ。もし俺が失政を敷いた場合、苦しむのは俺じゃない。国民だ」

「俺にはそんなに重大な選択を行う勇氣も、資格もない」

私は何か言わなくてはと必死に言葉を探すけど、何を言っても彼を傷付けてしまいそうで。

「臆病者だと笑われても、どうしてもうまくできる想像ができないんだ」

自嘲めいた笑いと共に、シェリア君は言った。

「こんな理由で、継承権を放棄できるわけがない。王家の名に泥を塗ることも、俺にはできないんだ。ああ、事故を装ってでも死んでしまえばいい、と考えたこともあったさ！！でも、俺は、あのときの事を、考えただけで体が震える。もう一度死ぬ勇氣が、どうしても、わかない」

あのとき、というのは前世で、川に飲み込まれた時のことだろう。シェリア君はもうほとんど涙声だった。

「俺には何もできない。失われていく記憶を必死に繋ぎとめようとしながら、王子としての働きを求める周りを恐れながら、こうして部屋に引きこもることしか…出来なかった。とんだ腑抜けだ」

「失われていく記憶…？」

ようやく口を挟んだ私に、シェリア君はああ、と得心したように言った。

「前の…前世、というのか。その記憶をどんどん忘れていくんだ。もう、家族の顔はおろか、自分の名前すら、忘れてしまった」

シェリア君は天井を見上げた。

「…俺は、一体何者なんだろうな」

虚しさを孕んだその言葉は、乾いた音で部屋の空気に溶けた。

14話 自己証明の不確かさ（後書き）

タイトルのセンスが来い

2011/11/13 改稿

15話 思い、すれ違い

——俺は一体、何者なんだろうな。

そのシェリア君の言葉が、私の中で何度も何度も反響した。顔を見ずとも分かる。彼の言葉には諦めと絶望が滲み出ていた。

「シェリア君は、シェリア君だよ」

何か言わなければいけない。彼はとても不安定な足場に何とか立っている状態だ。そんな思いが私を焦らせた。

「私が知ってる君は、ひきこもりで、ヘタレで、それなのに熱血で優しく、危険を顧みず私を守ってくれるシェリア君だよ。私はそれ以外のシェリア君を知らないもの」

シェリア君はこちらに視線を寄越して、フツと笑った。儚い、笑みだった。

「俺がお前に執着したのは、お前が『アルシェリア』を知らなくて、『俺』を知っている唯一の人間だったからかも知れんな」

落ち着いた声色だった。でも今はその落ち着きが、私の心をざわつかせる。

「お前がいるから、俺は…いや。いたから…ここ半年で、精神を立て直すことができた。本当に感謝してる」

「シェリア君！」

私は、必死の思いで彼の言葉を遮った。

これ以上、喋らせたなら、彼は壊れてしまう。こんな確信が私の中にあつた。

「私、何もしてない。シェリア君がそんなに苦しんでるのに、何もできなかった。ひきこもりひきこもりって的外れなことばかり言ってる…。近くにいたのに、何も気付けなかった。ほんとに、情けないよ。年上なのに、相談役なのに、今だって守られてばかりで…。私、わたし」

「もういい。お前は充分に力になってくれたし、俺も救われた。この後の事は、ゆっくり考えるさ。時間はあるんだ」

わたしはいやいやをするように頭を振った。救われてなんかない。この人は、まだ、助けを求めている。本当に危なっかしいバランスの足場で、無理して立ち上がろうとしている。

シェリア君には、誰か、手を差し伸べる存在が必要だった。

誰か？誰でもいいの？アレン君でも、ディラン君でも？

——違う。できるなら、もしかなのなら、私が——

「わたし、あなたのそばにいる。そばにいたい。私が力になれるなら、あなたを支えたい」

もういい年してるんだからとか、この世界の人間じゃないとか。妙なプライドが邪魔してずっと言えなかった、見ないようにしていた感情は、言葉になってすると私の口からこぼれた。

「シェリア君が、好きだから」

シェリア君が息をのむのが分かった。
魔法にかかったみたいにお互いの時間が止まる。

「ダメだ」

見開かれた紫の瞳が伏せられた時、魔法を解いたのはシェリア君の硬質な声だった。

「お前はもとの世界に、家族や友人や仕事を残してきていると言った。帰らない訳にはいかないだろう。やはり、話すべきではなかった。…こんな一時の同情に流されてはいけない」
「っ同情なんかじゃ！」

次の言葉を紡ごうとしたところで、割って入ったのはドアをノックする音だった。

「アレンか？」

「殿下。…あの」

「何だ？」

何やら口ごもるアレン君。ふうと息を吐いてシェリア君がドアに向かおうと腰をあげた時。

「入ってもいいですか？」

聴き覚えのある声が扉の外から聞こえた。

「遊利ちゃん！？」

遊利ちゃん、さっきの犯人を追って行ったけど、無事だったんだ。ほっと胸をなでおろす。

外からは何やら揉めているような声がした。ああ、そっか。アレ
ン君やディラン君とは初対面だもんね。

シェリア君が何か言いたげな視線を寄越す。私はその意図を汲ん
で、絶対大丈夫だから、とシェリア君に念を押した。

「入れ。アレンとディランも」

「お邪魔します」

躊躇なく扉を開いて入ってきた遊利ちゃんは、私のそばまで来て
軽くシェリア君に会釈した。王族に対して軽い会釈：！あ、アレン
君が遊利ちゃんを敵意丸出しな目で見てる。気づいていない訳では
ないのだろうけど、全く意に介した様子のない遊利ちゃん。大物だ。

「ゆ、遊利ちゃん。大丈夫だった？」

「ええ、もう捕まえましたから大丈夫ですよ。安心してください」

私が聞いたのは犯人を捕まえたかどうかではなくて遊利ちゃんに
けががないかなんだけど、遊利ちゃんの様子を見る限り大丈夫そう
だ。ほんとよかった…！

私を安心させるように微笑んだ遊利ちゃんだけど、ふとその表情
を曇らせた。

「本当にごめんなさい。私が付いていながら…不覚です」

「そんな。遊利ちゃんのせいじゃないよ」

「いえ。私のせいです」

私の本心からの言葉にも、全く譲ろうとしない遊利ちゃん。この辺の頑固さは、シェリア君と通じるものがあるかも…。

「…サーシャ。紹介があると嬉しいのだが？」

シェリア君がやや警戒のにじみ出る声色でそう言った。ああ、そうだ、すっかり忘れてた。てへぺろ。

「あ、ご、ごめん。こちら私の前の世界の友達の、朝比奈遊利ちゃんです。で、この人がこの国の王子様のアルシェリア君です。あそこの二人は、アレン君とディラン君です」

「…雑だな」

「こまけえこたあいいんだよ」

説明とか得意じゃないし。必要なことは後で補足しますし。

「で、アサヒナユーリ、なぜ君はここにいるんだ」

聞きたいことは色々あるのだろうけど、とりあえずこつこついう質問

にまとめたみたいだ。

私も知りたい。名前呼んだ覚えはないのに、駆けつけてくれた理由とか。

「早沙子さんが危険にさらされていたので。私は彼女を無事に元の世界に送り届ける義務がありますし」

元の世界、という単語に反応したのだろうか。シェリア君が剣呑な雰囲気帯びる。

遊利ちゃんもそれに気付いたのだろう、小さくため息を吐いた。

「別に、奪いに来たわけじゃありませんよ。彼女が残りたいと言うなら残っても構いませんし」

「…そうか」

シェリア君が目を伏せた。アレン君はちょっとびくりしたような顔をしている。ああ、そうだ、帰るとか言っただけなんじゃないもんね。こういうの、自分の口以外から知れた時って結構気持ち悪いな…。ああ、デイルン君に関しては言わずもがな。マジ鉄仮面。

「でも、怪我させてしまった訳ですし…延期しますか？」

遊利ちゃんが心配そうな表情でこちらを見る。
正直なところ、怪我はホントに大したことない。

けれど。

けれど、シェリア君の事情を知ってしまった今、帰るといふ決心が大きく揺らいでいた。さっきとか残るって言っちゃったし…。でも…。

わたしがうだうだと考えていた時、

「今の怪我では無理だろうか」

シェリア君がそう切り出した。

遊利ちゃんも一瞬意外そうな顔をして答える。

「いえ、来た時と違って、私が一緒なら《渡界》しても身体への影響はほとんどないはずです。でも、早沙子さんの事を考えると、無理はさせるべきではないかと」
「いや」

シェリア君は強い調子で遊利ちゃんの話を遮る。

「今回の事で痛感した。俺では、サーシャを満足に守れない。城の

中にサーシャをよく思わない奴らがいるのも事実だ。これからも、同じことが続かないと言い切れない。なるべく早く、この城を出たほうがいい」

シェリア君が、しっかりと視線を遊利ちゃんに合わせる。

「サーシャを、頼む。無事に、帰してやってくれ」

シェリア君が、遊利ちゃんに、頭を下げた。

その声が、少し震えていた気がしたのは、私の都合のいい勘違いだろうか。

15話 思い、すれ違い（後書き）

2011/11/13 改稿

16話 B R O K E N

振られた。完膚なきまでに振られた。

自室に戻った私は、一人でベッドに突っ伏していた。

私の告白華麗にスルーされたもんな。あろうことがシェリア君私の事さつさと帰したそうだったもんな。

聴かなかったことにしてさつさと帰しちゃえ！って思った、んだろつな。うーわー！マジへこむんですけどー！

好きです、って完全に言っちゃったしな…。もう今更あれは好きって親愛の好きの方だから！弟的な意味の！って訂正できないです…よね…？はい、デスヨネー！

一応間違っでは、ない。私は、うう、お恥ずかしいことにシェリア君が、好き、だ。冗談抜きで。

一応、彼への好意の中でもLove方面の気持ちにはなるべく蓋をしてきたつもりなんだけど…。普通に無理だった。普通に惹かれちゃったもんね。私の恋愛経験値低すぎ。マジあうとおぶこんとろーる。

なぜ、蓋をしようとしてたかって？ふん、愚問だな！

『独身で、27歳の、美人でも何ともないただのOLが、4歳年下の異世界の王子様（超イケメン）にガチで恋する』

お分かりいただけただろうか。超いたたまれない？

私は、ここで「だって好きになっちゃったんだから仕方ないじゃない！」などと開き直れるほど子供でもないし、素直な性格じゃない。

こつやつて、思考をアホな方向に走らせないと、泣いてしまいそうだった。

だがしかし泣いたら『独身で、27歳の、美人でも何ともないただのOLが、4歳年下の異世界の王子様（超イケメン）にガチで恋した挙句、振られて号泣』っていうさらに痛々しい状況に陥る。それだけは阻止せねば！頑張れ私のプライド！

「早沙子さん」

「ひゃっ!？」

だだだ誰だいきなり!と思ってベッドに伏せてた顔をあげるとそこにいたのは遊利ちゃんだった。

あるえー。部屋に入ってきたの全然きづかなかったんですけど。

「あの、外にいる見張りさんが入れてくれなかったので、こっそり入ってきました」

「ああ…なるほど」

部屋の外に見張りで立っているのはアレン君だ。シェリア君にはデイルン君がついている。

遊利ちゃんはシェリア君たちと一緒にいるっていう方向だったと思うんだけど、まあ、抜け出してきたみたいだ。

アレン君は明らかに遊利ちゃんを敵視している。シェリア君が遊利ちゃんに頭を下げた時なんか、射殺さんばかりの鋭い視線を送ってたもんな。

「…大丈夫ですか」

また枕に顔を突っ伏した私に、遊利ちゃんは心配そうな声色でそう言った。

泣きそうな顔、さっき見られちゃったかも。情けない、ほんと。

「もし、ここにるのが辛かったら、今この場で戻ることもできますよ」

——ああ。

その言葉を訊いて分かった。この子は、全て、把握^{わか}ってる。

私がシェリア君を好きで、告白して、玉砕したこと。そうでなかったらこんな言葉は出てこないだろう。

なぜ、どうやって、なんてこの子には今更すぎる疑問だもんね。

「…うつん」

枕に顔を埋めているから、その言葉は聞き取りづらかったと思う。でも、自分でもびっくりするくらい芯のある、まっすぐな声が出た。

「私は、シェリア君の相談役を途中で投げ出すんだから。投げ出すなりの誠意を見せなきゃならない。急にいなくなるなんて、できないよ」

ゆっくりと、私は顔をあげて遊利ちゃんを見る。

「予定通り、明日の午前中でいいかな？」

自分ではほほ笑んだつもりだったけど、たぶんへったくそな笑みになったと思う。もはや変顔の域じゃないだろうか。

遊利ちゃんはそんな不細工な顔をしている私を見て、笑うどころ

か、悲しそうな顔をした。

16話 BROKEN（後書き）

2011/11/13 改稿

17話 別れ

その日の夜は、一睡もできなかった。

怪我をしたからという理由でいつもより早く休んだのだけれど、静かな一人の時間は余計なことを考えるのに最適で。

なんとなく目が腫れているような感覚がある。一晩じゅう泣き続けたとかいうわけじゃなく、睡眠不足が祟ったのだらう。顔もむくんでそう。最悪。

一晩中栓ないことを考えてて、脳は休息を要求してるのだけど、何時間たっても一向に睡魔は訪れなかった。睡魔マジ仕事しろし。

目をこするのも億劫で、ごろりと寝がえりを打つ。今日で最後。正確にはあと数時間しかない。

小鳥がさえずる。カーテンの隙間から朝日が漏れている。そろそろクレアさんが起こしに来る時間だろう。

最後くらいは、笑ってお別れしよう。私は小さな決意を胸に秘めた。

クレアさんはいつも私を起こした後、身支度を手伝ってくれる。
この世界の服、特にドレスなどはどう頑張っても初見では一人で
は着れない構造になっている。背中にボタンとか難易度高すぎだろ。
慣れないうちはすべて手伝ってもらったが、流石に今ではだいた
い一人でできる。

でもクレアさんはこれが仕事なのだそうだから、大人しく今でも
着せ替え人形になっている。

でも今日は、自分ですから、と言ってクレアさんには下がって
もらった。

クレアさんは特に理由も尋ねることもなく、左様でございますか、
と言って退出した。

衣装棚の奥から、ずっと仕舞っていた自分の私服を出す。

ストライプのカットソーにデニム。ごくごく普通のありふれた格
好だ。

お城生活で高級な布でできたドレスを借りてたから、カットソー
の薄っぺらい生地になっちゃって驚いた。年相応の、着ても恥ずかしく
ないものを選んでたつもりだったんだけどな。これからはもう少し
生地こだわって服を選ぶことにしよう。

靴まで現代地球仕様に着替えてばおっとしてると、ドアがノック
される。

「俺だ」

「どうぞ」

予定通り、部屋に入ってきたのはシェリア君、アレン君、ディラン君だった。

普通に考えて、この時間、シェリア君の部屋からこの部屋に来るまで誰にも会わないってことはないと思う。お城の中はちょっとした騒ぎになってるんじゃないかな。か。「殿下引きこもり卒業パーティー」とか開かれるかも知れないね。割とガチで。シェリア君とパイプ持ちたがってる貴族はたくさんいるだろうし。

「懐かしいな。その格好」

あの散々な出会いを思い出したのか、シェリア君は少しだけ笑った。私も苦笑い。

「おはようございます」

例によって、いつのまにか部屋の隅に遊利ちゃんが立っていた。もう何も突っ込むまい。シェリア君とディラン君も同じ心境なのか、何も言わなかった。まあ、アレン君だけは身構えていたけど。

「もう、いいんですか？」

「ん、大丈夫」

昨日遊利ちゃんと話した結果、使用人の方々には挨拶しないことに決めた。突然現れたのだから、突然消えたほうがリアリティがあるし、なにより遊利ちゃんの事は説明しづらいから。

遊利ちゃんにできればそうしてほしい、とお願いされた形だったのだけど、まあ——この子は私に気を遣ったのかもしれない。

この世界にこれ以上縁を残させないようにしている、とか？正直クレアさんあたりに泣かれたら揺らぐもんね。私の絆されやすさばればねなんだろうか。ん、まあ考えすぎかもだけど。

流石に陛下と王妃様にはご挨拶しようと思っていて、前々からアポを取っていたんだけど、突然の公務で流れてしまった。

新たに時間を作るのが難しいということだったので、失礼ながら、手紙でご挨拶させていただくことにした。「息子を頼む」なんて言われた以上、帰りますって言うにも顔を合わせづらかったから、正直ちょっとほっとした。すいません。

「分かりました。——始めます」

少し離れていてください、と言った遊利ちゃんが目を閉じるとふっと、部屋の空気が変わった。カーテンも閉めてないし、日も高いのに若干薄暗くなったように感じる。

遊利ちゃんが人差し指をかざす。その指の先には緑色の光が灯っている。

遊利ちゃんはくるりと一回転する。指先の光が軌跡を作り、彼女の回りに半径80センチほどの円ができた。

「《時間と》 《空間を》 《繋ぎ》 《越え》 《闇は》 《光に》 《3は》
《8に》 ——」

歌うような調子のすき通った声が部屋に響く。彼女の指は絶えず何かの文字のような絵のような模様を描いていて、それが先ほどの円に幾何学模様に配置されていく。これがいわゆる、魔法陣と言っやつだろうか。

色とりどりの小さな光が遊利ちゃんをとりまく。

「きれい……」

思わず口から言葉が漏れた。

遊利ちゃんが言っている言葉の意味は分からないけど、それहतても、美しく響いていた。

「——《固定》」

遊利ちゃんの動きが止まると、魔法陣が緑からオレンジ色に変わ

った。彼女の足元には複雑な模様の魔法陣が輝いている。遊利ちゃんほう、と息を吐いた。

「準備は終わりました。いつでも行けます」

淡い光の中に佇む遊利ちゃんを見て、私は頷いてから、シェリア君たちに向き直った。

「シェリア君、アレン君、ディラン君。長い間、本当にお世話になりました。してもらってばかりで、返せたことが少なくてごめんなさい。本当に、感謝してます」

深く深く、頭を下げた。これくらいで私の感謝が伝えられるはずなのだけれど。

「みんなと過ごした時間、本当に楽しかった。一生忘れないね。ありがとう」

いいな！泣くなよ！絶対だぞ！！振りじゃないからな！！
笑って別れる！これが私に課された最後の使命だ！！

「シェリア君」

シェリア君の顔を見るのはこれで最後になる。言葉を交わすのも同様に最後。

そう思うと自然に、言っておけなければならない、という気がした。この気持ちにシェリア君にとって迷惑な代物だったとしても、はじめをつける義務が、権利が私にはある。そう思うと、言葉はスルリとでてきた。

「私が昨日言ったことはね、同情でもその場の勢いでもなく本当だよ」

につこり笑った私に、シェリア君はわずかに瞠目した。

「力に、なれなくてごめんね。でも、私、君にはしあわせに、なつてほしいな」

我ながら無責任な言葉だとは、思う。でも、シェリア君が私を必要としない以上、これ以上の言葉をかけようがなかった。

「じゃあ、ね」

私はそう言って踵を返し、魔法陣の中に入った。遊利ちゃんに視線で合図を送ると、魔法陣が一層強く光り始めた。

これから私はもとの世界に戻る。朝起きて、会社へ行って仕事して、帰ってテレビ見て寝る生活。ここで過ごした時間はまるで長い夢だったかのような不思議な感覚だ。

「サーシャ！」

シェリア君の思いつめたような声が聞こえて、私ははじかれたように振りかえった。

苦しい表情をしたシェリア君がこちらへ手を伸ばしている。魔法陣の光が、信号を連想とさせる赤色になる。

瞬く光の中で、私はシェリア君の唇が微かに動くのを見た。それは声になって私へと届くことはなかったけど、私には、確かにその言葉が分かった。

——行くな。

「シェリアく」

彼の手を取ろうと私が手を伸ばした瞬間、目を空けていられない程の光が私の視界を埋め尽くした。

私の手は、シェリア君にとどかないまま。

「行って、しまったな」

虚空を掴んだ手を見ながら、アルシエリアはぼつりとつぶやいた。これで良かったのだ、と思う気持ちに偽りはないが、心に空洞ができたかのような寂寥感は見えて見ぬふりをするには大きすぎた。

それは、アルシエリアの中で彼女の存在が何より大きかったことの証明だろう。

「殿下」

氣遣うようなアレンの声に、アルシエリアは大丈夫だ、という意味を込めて笑って見せる。

この二人も、自分がアルシエリアではないと知ったら離れていくのだろうか。

そう思った時。

——シェリア君は、シェリア君だよ。

彼女の声が、頭の中に響いた。

頭の中で何度も反響し、ずっとかかっていた霧を晴らしていく。

この二人から信頼されたいならば。

アルシェリアとしてではなく、『自分が』誠意を見せるべきだったのだと。裏切られることを恐れて、信用することを忘れていたのだと。

自分が二人を信用していないのに、二人からの信頼が得られるはずがないのだ。

何故、こんな当たり前のことに思い至らなかったのか。

アルシェリアはふうと息を吐いた。

「アレン、ディラン。すまなかったな」

唐突すぎる謝罪に、うつたえるアレン。ディランは黙ったままアルシェリアを見つめる。

「今からでも、遅くないだろうか」

アルシェリアが小さな声でそう言った時、

「何か、聞こえませんか？」

怪訝そうな声でそう言ったディランが身構える。
そう言われれば、とアルシェリアが耳を澄ませた時。

その何か、は人の悲鳴となって、

——あああああああああああああ！！！！！！！！！

！！！！

確かな重みを伴って、アルシェリアの上に『落ちて』来た。

黒い瞳をこぼれそうなほど見開いて、アルシェリアを下敷きにしているのは、先ほど別れたはずの女性。

頭部と肋骨の痛みに耐えながら、アルシェリアが彼女に最初にかけた言葉は。

「…吐くなよ」

「吐くかつつっ！……！！！！！！」

台無しだ……！と憤慨する彼女を見上げて、アルシェリアはいつかのように爆笑した。

17話 別れ（後書き）

次の話で第一章は終わりとなります。

2011/11/13 改稿

18話 舞台裏にて

「へーえ、それで背中を押したと。文字通り」

「押してませんし。指でつついただけです」

やや含みのある弓月の言い方に、遊利が反論する。

「でも危なくない？ 渡界魔法の展開中に陣から出るなんて」

「…普通なら危ないですけど、今回は大丈夫なようにしてたんです」

魔法の展開中に陣から出ると、空間の均衡が崩れて事故が起こることが多い。

特にに渡界魔法などの大掛かりな空間移動魔法ともなれば、また別の世界に飛ばされたり、最悪《境界》と呼ばれる魔素^{マナ}の溜まり場に放り出されて、一生閉じ込められることになる。

視線を泳がせる遊利の様子に、弓月はピンと来た。

「分かった！ その展開してたのって、ただの転移魔法だったんでしょ」

「うつ…」

図星、という反応を返す遊利に弓月はにやりと笑う。

「それで、長つたらしい詠唱をしてみたり、陣を無駄にピカピカ光らせることで、ただの転移魔法を渡界魔法それっぽくに偽装すると共に、別れの雰囲気を出した訳だ」

「ちよっと！それ言わないで下さいよ！それっぽい呪文を創作したり、真面目な顔で魔法ごっこやるの超大変だったんですからね！恥ずかしさで死ねるんですよあれ！！」

遊利ならば、転移魔法くらいならノーモーションでできる。わざわざ大掛かりな演出をしたのは、二人をけしかけるためだった。恨めしげな表情の遊利をニヤニヤと見ていた弓月だったが、やがてはあ、とため息を吐いた。

「…セーフですよ？これくらい」

「限りなく黒に近いグレーだけどね」

容赦ない弓月の言葉に、だってあれくらいしないと二人とも動きそうになかったんですし、とブツブツ言い訳をする遊利。

「遊利さんは、基本的に女性に甘いよね」

「そんなことはありませんよ」

「でも、またしばらくしたらその早沙子さんってひとの様子見に行くんでしょ？」

ぐ、と言葉に詰まる遊利に、弓月はやれやれ、という仕草をした。

「まゝたそうやって無駄遣いする」

「無駄じゃないです！！今回は早沙子さんにけがをさせてしまったから、アフターケアってやつですよ！」

渡界魔法は希少なマジックツールを使用するため、術者の力量だけでなく、それなりの資金が必要になる。

今回の依頼の報酬と、渡界魔法往復分でプラスマイナスゼロ、と言ったところだろう。

遊利の怪我、という言葉にふと弓月が真顔に戻る。

「ま、何にせよ」

ソファに座っていた弓月が立ちあがり、遊利の手をとった。

「これは、いただけないよね」

彼女の左掌には、白い包帯が巻かれていた。

「治療魔法は？使ったの？」

「…弾の所で、傷だけふさいでもらいました」

治癒魔法は、被術者の負担が大きく、副作用も無視できない。使い手が少ないためなかなか研究が進まず、リスクの大きさを考えると、現代医療をちよつと進歩させたもの、と言ったレベルにとどまっていた。

「治せるものは自分で治した方がいい」というのが現代魔法学の結論であつた。

「油断しただけです。大したこと」
「油断でも、何でも」

強い調子で弓月は遊利の言葉を遮る。

「…もう、やめてよね。こつこつ」と

少しの間をとって弓月がそう言つと、遊利も頷き、「ごめんなさい、と小さく返した。

「それにしても」

弓月は、淹れたての紅茶を飲みながら切りだした。

「魔銃^{マガン}のこと、何か分かったの？」

あの世界には、《ミッドガル^{この世界}ド》と同じく、基本的に魔法が存在しない。

その上銃も存在していないのだから、あの魔銃は外部——他の世界から持ち込まれたに他ならなかった。

「今《ユグドラシル》で調査してるらしいですけど、どうやらあの世界に他の魔銃の流通はないようです。持ち込まれたのはあの1個だけっぽいですね」

「…しかも、あの《宝珠》でしょ？」

深刻な弓月の声に、遊利は首肯する。

「あの魔銃には、確かに《宝珠》のエンブレムが刻まれていました」

世界には、大小さまざまな魔法師団体が存在する。それを統括するのが《魔法師協会》で、その最高評議会は著名な魔法学者や有力団体の代表者からなる。

霧崎弾^{きりさきたん}が代表を務める《ユグドラシル》や、先ほどから話題に上

っている《宝珠》こと《蒼の宝珠》も有力な団体の一つだ。

魔法師は少なからず選民意識を持っている者も多いが、《宝珠》は特にその傾向が強く、魔法絶対主義、というと極端かもしれないが、魔法の研究・発展のためなら強硬な手段に出ることも多く、多
種族や他の魔法師団体との衝突も少なくなかった。

「今回の狙いは完全に私でした。《ユグドラシル》に対するちよつかいでしょうね。早沙子さんには、申し訳ないことを…」

わざわざ《宝珠》のエンブレム入りの魔銃を使ったことから、それは明らかだろう。

遊利は正確には《ユグドラシル》の構成員ではないのだが、《ユグドラシル》からの依頼を受けている時点で《宝珠》にとつては同じことなのかもしれない。

紅茶を一口含んで、考えこんでから遊利は言った。

「でも、少し引つかかるんですよね…」

「と言うと？」

「何か、後先考えない《宝珠》の下っ端が暴走したにしては、スマートすぎると思うんです」

前述したように、《宝珠》は他の魔術師団体とはあまり良好な関係を築けていない。《宝珠》が魔法師協会から淘汰されないのは、ひとえにその研究成果の貢献を評価されているためだ。

《ユグドラシル》のような強力な団体とやり合うには相手が悪すぎるし、何よりメリットがない。故に、今回の件も普通に考えれば

《宝珠》全体の意向とは考えにくかった。

「相手は、全くしつぽを掴ませませんでした。大したものですよ」

言葉とは裏腹に、遊利は悔しそうに齒噛みした。確かに、今回の件に関しては相手の方が一枚上手だったようだ。

「遊利さんは、《宝珠》の上層部も絡んでると思うの？」

「何とも…言えません。偶々かもしれせんし」

「まあ、今回は事例が特殊だったからね。《宝珠》が研究のために調査に行った可能性もあるけど」

「ほばないでしょうね。真偽も確かめるすべもない、眉唾な話ですから。そんな話にかまけてるほど、《宝珠》も暇じゃないと思いますよ？」

弓月は嘆息した。それは、魔法師が、人間が一度は思い描く夢であつた。

「——転生、かあ」

現代魔法学を以てしても、いまだ空想の域を出ない代物。

この世界で言われるところの幽霊のように、まことしやかに存在が囁かれるものの実証されないままの概念。

「眉垂てことは、遊利さんはそのひきこもり王子の話信じてないの？」

「いえ、信じてますよ？それで一応話の筋は通りますしね」

実際に事例に遭遇したのは初めてです、と遊利は言う。

「連れて帰って研究とかしないの？弾さんあたり喜ぶんじゃない？」

「物騒な発想ですね。そんなめんどくさいことしませんよ」

鋭い視線を送る遊利に、冗談だよ、と弓月は肩をすくめる。

「興味はないんだ？」

「ありません。私は魔法式いじってる方が楽しいですし。それに、」

遊利はいったん言葉を区切ってから、吐き捨てるように呟いた。

「そんなもの転生術研究したって、碌なことになりませんよ」

転生術。それが開発されれば、人類の永遠の夢である、「不死」の一つの完成形が出来上がる。

それは、世界の理を、《律》を脅かす存在であると同時に、人類の、いや、種族を超えた争いの火種になることは必至であった。

「そう、だね。ごめん、変な空気にして」

謝る弓月に、遊利はいえ、と、短く返した。

そのタイミングでカップの紅茶を飲み干した遊利が、思い出したように話題を変える。

「ところで弓月君」

「ん？」

「茶葉変えました？」

「うん。…一か月前から」

「まじでか」

気づくの遅いよ、と不満を漏らす弓月だったが、結局「だって弓月君が淹れたやつは全部おいしいんですもん」と素で言う遊利に絆されるのだった。

18話 舞台裏にて（後書き）

これで第一章は終わりとなります。ここまで読んでくださってありがとうございます！

2011/11/13

プロローグ・第一章の改稿を行いました。

具体的には行間の調節、サブタイトルの変更、細かな表現の変更、話数の削減です。内容は全く変わっておりません。

あと、話数を削減した関係で投稿日が本来のものと異なっていることと、前書きや後書きを変更・削除した部分がございます。混乱させてしまったら申し訳ないです。

19話 金曜日の放課後に（前書き）

18話の後書きにも書きましたが、プロローグ・第一章の改稿を行いました。

具体的には行間の調節、サブタイトルの変更、細かな表現の変更、話数の削減です。内容は全く変わっておりません。

あと、話数を削減した関係で投稿日が本来のものと異なっていることと、前書きや後書きを変更・削除した部分がございます。

混乱させてしまったら申し訳ないです。

19話 金曜日の放課後に

金曜日。フライデー。

明日から2連休ということもあってか、登校する生徒たちの足取りは心なしか軽い。

迫りくる中間試験の足音は聞こえないふりをして、授業中も陽気が眠気を誘う季節。衣替え直前の、5月半ば。

朝比奈遊利は、久方ぶりの通学路を歩いているところだった。

遊利が通う都立明奏館学園は、文武両道を教育目標に掲げているものの、偏差値はそこそこ、部活動もそこそこというなんちゃって進学校だ。超難関大学を目指すには物足りないであろう環境だが、自由な校風が人気の高校であつた。

朝から校門前でビラ配りをしている大手塾の（おそらく）アルバイトに内心でねぎらいの言葉をかけながら、華麗にスルーした遊利は校舎に足を踏み入れた。

3階にある2年6組の教室に入ると、それほど早いわけでもないのに人はまばらだった。尤も、HR10分前に来る人が多いこのクラスでは、それほど珍しいことでもないが。

「あ、朝比奈さん、おはよ」

「おはようございます、相内さん」

遊利の前の席である相内マリが声をかけた。彼女は今日のように

バレー部の朝練がない日でも癖になっているのだ、と言って誰よりも早く学校に来る。

「風邪はもうなおったの？」

「ええ、お陰さまで」

渡界のためにちよくちよく学校を仮病で休む遊利は、すっかり病弱キャラが定着してしまっていた。体育でなんとなく本気を出しづらくなってしまったことを本人は苦々しく思っている。

遊利の返答に、マリはにっこりと笑う。

「そっか、良かった。でも今風邪流行ってるから、油断しないでね」

「え、そうなんですか？」

「うんうん。しかも結構タチ悪いやつみたいでねー、一回罹るとなかなか治らないらしいよ？うちのクラスでも3人くらい暫く学校に来てないさー」

「ははあ…。気をつけます」

朝比奈さんがいないと寂しいからねっ！と笑顔で言うマリにつられて、遊利も笑う。

女子と言う生き物はどのコミュニティにおいてもグループを作る習性がある。そのグループ同士が別に不仲と言う訳ではなくとも、つねに一緒に行動するメンツと言うのは決められているものだ。遊利はそのどこにも属していなく、必要があればどこかに入るタイプだった。クラスに必ず一人や二人はいる、特に珍しくもないタイプ。対してマリは、どのグループにいても違和感がない、どこともう

まくやっついていける奇特なタイプだった。遊利は、内心そんなマリを尊敬している。

「朝比奈さん、どうせなら今日も休めば良かったのにねえ。2限の数？小テストだよ」

「まじですか。あの先生小テスト多いですねえ」

「うんうん。授業するのがめんどくさいから小テストで時間つぶそうって魂胆なんだよー」

ぶう、と唇を尖らせるマリに、遊利は苦笑する。マリは、定期テストで点が取れないので、小テストで稼がなくてはならないらしい。

「と、いうわけで！この問いの答え教えてください朝比奈先生！」

「私昨日まで休んでたんですけど!？」

席の埋まり始めた教室を見渡すと、なるほど、いつもはこの時間には来ている人が見当たらないし、マスクをしている生徒も目立つ。なかなか本格的に風邪が流行っているようだ。

結局遊利が示した解を懸命にノートに写しているマリを横目に、遊利は暫くぶりの日常に目を細めた。

どちらかと言えば副業と言える高校生活だったが、遊利はこの時間が嫌いではなかった。

本日の終業を告げる鐘が鳴り響いた。

蜻蛉日記について熱く語っていた壮年古典教師の話はまだ終わってなかったが、終業のチャイムは、時間切れと共に生徒の集中力も切らしてしまう。バサバサ音を立ててと教科書やノートを片付け始める生徒たちに、苦い顔をしながら教師は授業の終わりをつけた。

遊利もそれに倣いながら小さく欠伸をする。夏至を約一カ月後に控えているだけあって、終業時間である15時になっても日はまだ高く、一日はこれから！という気分させる。

今日は掃除当番も当たっていないし、弓月も今日は外出の予定がないと言っていたから、夕飯の心配はしなくていいだろう。帰りのHRが始まる前の喧噪の中、マリが振り向いて話しかけてきた。

「朝比奈さん！これからカラオケ行かないっ？」

「カラオケ、ですか」

「そうそう！！バレー部の友達とかと、清南の男友達も何人か呼んでいるの！あ、でも合コンとかじゃなくて、もうみんな顔見知りなんだよね。だから普通に遊ぶだけ！あいつらも朝比奈さん連れてつたら喜ぶと思うの」

清南高校は野球、サッカー、剣道などのスポーツが盛んな男子高だ。出会いがないことを常に嘆いている彼らだが、周辺の女子高生

からの人気は低くない。明奏館学園の女生徒ともよく合コンをやっているなどとは、遊利の知らない情報だ。

「んっっ…どうしましょう。私カラオケとかあんまり行ったことなくて…」

「大丈夫大丈夫！きっと楽しいよ！！ていうかお願い！！！！可愛い女の子連れてくって言っちゃった！」

手を合わせてねだるマリの勢いに、遊利は思わずうなずいてしまった。

「おーっす」

「やーやーお疲れー」

「久しぶりー」

「2週間前も遊んだじゃん！」

放課後、校門前で合流したマリのバレー部のチームメイト、西田里美との3人で、カラオケボックスに向かった。遊利と里美とはほぼ初対面だったが、彼女もマリ同様気さくな人物で、道中も他愛無

いおしゃべりで盛り上がった。

駅前のカラオケボックス前につくと、清南高校の制服を来た男子生徒が3人いた。

お互いの姿を認めた直後から軽口をたたき合いながら盛り上がる明奏館女子2人＋清南男子3人＝5人。疎外感を感じ始めた遊利がやっぱり帰ろうかな…と思った時。

「あれ、この子は？」

清南男子三人組のうち、一番背の高い一人が遊利を見て言う。
弓月も身長はある方だが、それと同じかやや高いくらいはあるだろう。

「この子はねー、同じクラスの朝比奈遊利ちゃんだよ。今日は舞子も来れなくなっちゃったし、私も朝比奈さんと遊んでみたかったから誘ってみたんだ」

マリが遊利の体をぐいと清南男子3人の前に突き出しながら言った。一斉に三人の注目を浴びた遊利は、動揺しつつも自己紹介する。

「朝比奈、です。よろしくお願いします」

「よろしく。僕は古河祐介です。こっちが内田で、これが坂本」

「ちょ、祐介、俺らの名前だけ省略しやがったな…」

「あとこれとか言っなよ」

にっこりと笑った古河祐介が自分を含めた3人分を一気に紹介すると、名前を略された2人が不満げに言った。

「ちょっと祐介！まさか朝比奈さん口説こうとかしてないよね！？」
「だめだよ祐介！朝比奈ちゃんと仲良くなるのはうちらが先なんだからね！」

不平を洩らすマリと里美にいきなり抱きつかれて、遊利は目を白黒させた。

「…本気で困ってんぞ、朝比奈さん」
「お前らの変なノリについていけないんだな」
「…ありゃ？朝比奈さん、ごめんね？」

女子二人に抱きつかれたまま硬直している遊利の顔を覗き込んでマリが言った。

遊利がこうして同級生と遊ぶのは、高校に入ってから初めての事だ。

何度か誘われたこともあるが、なかなか予定が合わず断っている、周りから誘われることもなくなる。自分から「仲間に入れて」と言うほど同級生同士の遊びに執着がなかった遊利は、学校以外のつきあいをすることはなかったのだ。

学校の外に出ると「友達の付き合い方」はこうも変わるのか、と

ひそかに遊利が衝撃を受けていると、

「とりあえず中に入らね？往来で目立ってんぞ」

内田と呼ばれた青年の至極もつともな意見に頷いた一同は、カラオケボックスの中に入って行った。

19話 金曜日の放課後に（後書き）

第2章開始します！

皆様にお楽しみいただけると幸いです。

誤字脱字あればご報告いただけると助かります。

20話 黒い鳥と凶兆

歌を歌い、時には雑談をしながら楽しい時間は過ぎて行った。

時折回されるマイクに困惑しながらも知っている歌を歌っているうちに、最初に5人に感じた壁はだいぶ気にならなくなっていった。

遊利は生来どちらかと言えば人見知りな性格である。魔法師モードの時が異様に大胆なだけで、そのギャップは弓月をして「いつまでたっても慣れない」と言わしめる。

だからこの打ち解けようは、彼女にしてみればものすごく珍しいことなのだ。

「朝比奈さんて、休みの日とか何やってんの？」

遊利の隣に座っていた古河祐介が遊利に声をかけた。カラオケの中ということもあり、話し声は自然と大きくなる。

「ええっと…。本読んだり、ネットしたりしてます」

「ああ、インドア派なんだ。部活とかやってないの？」

「いえ、帰宅部です。私部活動やったことないんです」

「そうなんだ？僕はむしろ部活しかやってないんだけどね。あ、ちなみになにやってるか分かる？」

遊利は祐介を見た。制服の上だから分らないが、それなりに筋肉はついてるんじゃないだろうか。野球部にしては髪が長いし、そ

もそもそんなに日焼けしていない。

「…剣道とか？」

「ぶー。正解はバスケ」

「ああ。言われてみればそれっぽい感じもします」

遊利の適当な感想に、祐介は声をあげて笑った。

「バスケとか興味ない？」

「えっと。『左手は添えるだけ』？」

「そうそう！！あのマンガはアツいよな」

歌本をパラパラとめくりながら祐介が言った。

「そだ。今度清南と明奏館で練習試合あんだよね。もしかしたら見においでよ」

サラッと祐介がそう言った途端、

「あ！またゆんゆんが！」

里美による横やりが入った。

「へーん。残念だねゆんゆん！朝比奈ちゃんはね、練習試合行ったとしても明奏館を応援するんだからね！ゆんゆんがミスったら全力でヤジるから！」

「おま、観戦のマナーってもんがあるだろ……」

坂本青年も横から突っ込みを入れる。

「でも実際、清南と明奏館^{ウチ}じゃあまり勝負にならないんじゃない？清南は都大会常連でしょ？」

マリが首をかしげると、祐介は苦笑いした。

「それが、今年は分かんないんだよな。去年から明奏館にすげえ新入生が入ったって噂なんだ。去年は流石にそいつ一年だからスタメンじゃなかったけど、今年からはガンガン使ってくると思うし」

「ああ！聞いたことあるよ。そうそう、うちの学年にすっごいうまい子がいるんだってね！」

そこまで有名なら、遊利の耳にも入っていてもおかしくはないのだが、思い当たらない遊利は首をかしげる。

「えっとね、名前も変わってて、あだ名も面白いのがついてたはず。」

確か――」

マリがそう言って記憶を呼び起こそうとした時、軽快なメロディが部屋に響いた。マリがガッツポーズをとってマイクを握る。

「きたきた！私のターン！」

「うわでた。マリの十八番」

「者どもー、タンバリンの準備はいいかー」

マリの歌を盛り上げる態勢に入った周りに倣い、遊利も手近なマラカスを手に取った。

「あー、歌った歌った！」

うーんと伸びをしたマリと美里に、男性陣はげんなりした顔をする。

「お前ら、あれから全然マイク放さねーんだもんな」

「朝比奈さんとかあんまり歌ってなかったじゃねーか」
「いえ！私はすごく楽しかったです」

あわてて言う遊利に、男性陣はそっか、良かったと笑った。遊利もつられて笑う。

遊利自身正直こんなに楽しめるとは思ってたので、5人にはとても感謝していた。

「どうする？もう解散？」

「んー、せっかくだから軽くなんか食べていかね？」

「あ、賛成！マックでも行こうか！」

「朝比奈ちゃんも行くよね？」

里美にそういわれ、返事を返そうと思った遊利だったが、ふと、あることに思い当った。

「…あ」

「？どしたの？」

「学校に忘れ物しました」

「何忘れたの？」

「電子辞書…」

「…ああ。それは取りに行った方がいいかもね」

明奏館学園は、悲しいことに、盗難の可能性もゼロではない。実際、年に1・2回は財布が盗られた、ゲーム機が盗られた等の騒ぎ

もある。電子辞書もそういう意味では、十分に危険のあるものだ。た。

そうでなくとも、月曜までの課題に使うのでどちらにせよないと困るのだ。

「すみません、私は学校に戻りますね。今日は本当に楽しかったです。ありがとうございました」

5人に一礼すると、5人は顔を見合わせて笑う。そんなにかしまらなくても、と。

「忘れ物、ついていこうか？」

「いえ、一人で大丈夫です。ありがとうございます」

マリの申し出を断って、遊利は5人にほほ笑んだ。

「朝比奈ちゃん、また遊ぼうね！」

「こんど中間のヤマ教えてね」

「マリ、お前は…」

「朝比奈さん、今度メールするね」

「え、ゆんゆん、いつの間に朝比奈さんとアド交換したの!？」

そんな5人の会話を聞きながら、遊利は学校への道を駆けだした。

夕刻を過ぎた校舎は閑散としていた。部活動が行われているためグラウンドや体育館はそれなりに騒がしいが、この時間にも教室に残る人はそう多くはない。6組の教室には誰もいなく、オレンジ色の西日が教室を染めていた。

「あつた」

自分の机の中にある電子辞書を見つけてほつとする。同じ学校の中に盗みを働く人間がいるとは、やはり思いたくないものだ。

窓は閉まっているが、野球部の声だしが聞こえる。ああ、リアルに「ばつちこーい」とか言うんだな、と妙な感動を覚えた。その時。

不意に、首の裏がチリ、と焼けるような感覚がした。

――？

あたりを見回しても、もちろん誰もいないし、怪しげな気配も感

しない。

遊利が首をかしげた時。窓の外を、黒い鳥が横切った。

カラスじゃない。もっと小さな――

「……」

その正体が分かった途端、遊利は教室を飛び出した。

あの黒い鳥。あれは魔素^{マナ}が固体化したものだ。その形状は鳥に限らず、蝶などの虫や小動物の形状も確認されている。

それらに共通していることは、魔素^{マナ}が濃いところで発生するということ。つまり、この世界ではありえない現象なのだ。

確か、あれは部室棟の裏の方へ向って行ったはず――

息を切らしながら校舎を駆ける。

嫌な予感しかしない。早沙子の時の、《宝珠》の魔銃を思い出して、背筋がぞつとした。

勢いよく正面玄関を飛び出し、部室棟の裏側にある第二グラウン

ドを目指して走る。

途中、運動部のマネージャーであろう、重そうなクーラーボックスを持った女子が全力疾走の遊利を見て不思議そうな顔をしたが、今は手伝っている暇などない。

部室棟の裏側につくと、一気に魔素^{マナ}の気配が強くなった。何故今まで気づかなかったのか、と自分の迂闊さを呪う遊利。しかし実際、部室棟の裏側なんてそうそう来るところではないゆえに、気付かないのも無理はなかった。

尤も、この世界においても日常的に魔素^{マナ}の気配を感知する癖を付けておけば、また違ったかもしれないが。

気配をたどって、警戒しながら敷地の端へと向かう。いつ攻撃されても反撃できるように、魔法要素^{エレメンツ}を体に巡らせる。

部室棟からやや外れたところにポツンと建っている倉庫があり、その裏側に、事態の原因はあった。

「嘘」

それを見た途端、遊利は思わず呟いた。

そこにあつたのは、世界を切り取ったように黒い球体。

《歪み》——それに他ならなかった。

20話 黒い鳥と凶兆（後書き）

2部はまだ導入部です。日常パートを挟んだら長引いてしまいました…。

会話文たくさんあると書くのが楽しいですね。

1部でやった転生ネタに関して、短編を書きました。

この作品とは全く関係ないですが、もしよかったら覗いてやってくださいませ。

21話 虎穴

なぜ。どうして。

疑問が頭を支配する。

あり得ない、訳じゃない。

歪みは、いつどこで発生する未解明である。だから、ここ明奏館学園の部室棟、倉庫の裏に発生する可能性も0ではない。

でも、その可能性がいかに低いかは、語るまでもないだろう。

ここ最近日本人の落界者が続いたこと、そして、遊利が通う明奏館学園に歪みが出現したこと。ただの偶然で片付けるには、あまりに出来過ぎていた。

ぐらりと視界が揺れた気がした。

バランスを失いかけた体を、足に力を入れて支える。そう、呆けてはいられないのだ。

深呼吸して精神を落ち着け、瞬時に周囲の気配をさぐる。怪しげな気配は感じられない。

歪みは、バチバチと黒い電流のようなものを放電させながら、脈打つように数センチ幅で拡大と収縮を繰り返していた。

少し見ただけで分かるほどに、世界律の干渉が強い。この速度なら、本日中この歪みは修復され、跡形もなくなるだろう。

警戒を解かないまま、遊利はポケットから携帯を出して、通話履歴を呼びだす。

目的の人物に電話をかけると、相手は3コールほどで出た。

『もしもし?』

「緊急事態です」

『遊利さん?どしたの?』

「緊急事エマージェンシー態なんです」

『…ものすごい焦ってるのは分かったから、順を追って説明してくれないかな?』

弓月の困惑した声が、通話口から聞こえてきた。

『…畏だね』

「ですよね」

弓月の冷静な見解に、遊利は同意する。

早沙子の時は歪みの発生場所はイタリアだったが、中原元春の時といい、こんなに日本に歪みが集中するのは珍しい。遊利の行動範囲内でまた新しい歪みが発生したということには、何者かの作為を感じずには居られなかった。

『もしかしたら《宝珠》と関係あるかもね。今、周りとか大丈夫なの？』

「ええ。不審な人物が潜んでる気配はしません」

そっか、と安心したように息を吐く弓月。最近は大失態続きだが、遊利の索敵能力は本来ならばかなりの精度を持っている。弓月はそれを信用していた。

『じゃあ、とりあえず修復できそうなら修復しちやえば？無理そうならダンさんに連絡して——』

「それが、そうもいかないのです」

遊利の視線の先には、靴が片方転がっていた。

歪みから50センチほど離れた位置に、男物の、黒いスニーカーが落ちていたのだ。人気スポーツメーカーの最新デザイン。ごつめのシルエットが特徴だ。

そのことを説明すると、弓月は深刻そうな声色でいう。

『じゃあ、誰かが巻き込まれた可能性があるってこと？』

「はい。まあ、これを含めて罫である可能性も否定できませんが――」

状態を見るに、この歪みは今日中に、早ければあと数時間で消失

してしまうだろう。」

そうなればまた弾に調査を頼んで、落界先の世界を特定する作業が必要になる。それには早くて一カ月、長ければ数年の時間を必要とする。

もし本当に誰かが巻き込まれていた場合には、大きな時間のロスとなることは分かり切っていた。

「弓月君。私――」

「…行くの？」

弓月に先回りされて一瞬沈黙したが、遊利ははっきりとはい、と言った。

はあ、とため息を吐く気配が電話口から伝わってきた。正直、落界先の世界が分からない状態で歪みに飛び込むのは危険極まりない。しかし、もし落界先の世界が危険だったとしても、今なら落界者を助けられるかもしれない。その希望を捨てられるほどに遊利は大人ではなかった。

「…分かったよ。でも僕も行くからね」

「それには及びませんよ。私一人で」

「あのねえ遊利さん。危険なのは分かり切ってるし、僕はホントは反対なの。でも遊利さんが一回決めたことは梃子でも動かないのを知ってるから、最大限の譲歩をしてあげてるの。わかる？」

「弓月く」

「それに遊利さん、前科もちだしね？」

う、と言葉に詰まる遊利。彼女の左掌の包帯はまだ取れていなかった。

先ほどマリに「そこどうしたの？」と聞かれた時もぶつけました、と適当にごまかしていたのだ。

『僕も一緒に行く。異論はないよね？』

「はい」

強い調子でそう言われ、遊利はしぶしぶ返事をする。弓月は少しでも危険のある行動をいちいち咎めるので、動きづらくなるな…と心の中で愚痴を言った。

「なるべく早く着てください。あんまり時間はないと——って」
『うん、もう学校ついた』

遊利の索敵範囲に弓月の気配を察知した遊利は閉口する。電話をとった直後からこっちに向かっていたのだろう。過保護——弓月に聞こえないように口だけを動かしてそう言った。

「いいんですか、荷物の準備とかしなくても」

『渡界では物資は現地調達が基本でしょ？あんまり外界の物を持ち込むべきじゃない』

「…。もう、切りますね」

終始弓月ペースだったことへの意趣返しか、遊利は弓月の返答を待たずに通話を切った。

どちらにしろ後1分もしないうちに弓月はここへやってくるのだ。咎められる謂れもない。

遊利は脈打つ歪みを睨みつける。やはり、不自然だ。通常の歪みよりも世界律の干渉が強い気がする。遊利も直接歪みを見たことはそんなに多くないが、修復スピードが速いのは気のせいじゃないと思う。もしかしたら、この歪みは、誰かによってこじ開けられたものかも――

「お待たせ」

振りかえると、息を切らした弓月が笑顔で立っていた。

「…偉く早いですね」

多少の皮肉をこめて遊利がそう言うと、弓月はたまたま近くにいたんだ、と嘯いた。

しかし、歪みを認めた弓月の表情は陰しくなる。

「…ホントに行くの？」

「愚問ですね」

「もー。ほんっとに危ないことはやめてよね」

「善処します」

納得してなさそうな弓月を置いておいて、遊利は歪みに向き直る。

「ダンさんに連絡しなくていいの？」

「メールでも入れときます。うるさそうなんで」

うるさいのは弓月君だけで充分です、と呟いた遊利の声は果たして弓月に届いただろうか。

遊利は目を閉じて歪み修復のための魔法式を組み立てる。二人が歪みに入った直後に修復が開始されるように設定を付けて、歪みの真下に陣を固定した。

自分に軽く‘酔い止め’のための保護魔法をかけた遊利は、弓月を振り返って笑顔で言った。

「弓月君に‘酔い止め’はかけれませんから。気合いで乗り切ってください」

「…わかってるよ」

やや特異体質である弓月には、保護魔法の類は効果を表さない。

遊利のいい笑顔は、小姑全開な弓月に対する小さないやがらせだ。

遊利は落ちたままだった黒いスニーカーを拾い上げる。

「さて、シンデレラさんを探しに行きますか」

二人分の人影が、黒い球体に吸い込まれた。

21話 虎穴（後書き）

日付が変わる前に更新しようと思ったら…このザマです。

これで2章のプロローグ的なものが終わりです。
次回新キャラがわさっと出ます。

22話 正しい休日の過ごし方

ドンドンと、乱暴に部屋の扉が叩かれ、俺はまどろみの沼から引き揚げられた。

それでも来訪者への対応が面倒で、聞こえなかったふりをして寝がえりを打つ。往生際が悪いと言っな。

「リン！ちよつとリン！」

「…うるせーな。開いてるよ」

声で来訪者を特定した俺は、無視した場合の後々のめんどくささと今起き上がるめんどくさを天秤にかけ、結局後者をとった。「ちよつとリン」ってチャップリンと似てるよね。どうでもいいか。

ずかずかと部屋に入って来て、仁王立ちでベットに腰かけた俺を見下ろす少女。蜂蜜色のロングヘアをポニーテールに結って、やや釣り目でハシバミ色の瞳が印象的な少女だ。名をアリシアという。なかなかの美人さんだが、貧乳。これはガチ。

「リン、あんたまさか寝る時鍵かけてないわけ？」

「たまたま忘れたんだよ…」

俺の適当な返事にむっとしたような表情をするアリシア。すいませんね、平和ボケした日本人で。

「まったく、いくら休日だからっていつまで寝てるの。もう昼前よ」
「昨日キツかったから疲れてんだよ…って痛ってえ…」

厳しい表情をするアリシアを前に伸びをすると、右わき腹が悲鳴を上げた。

「え、ちょっと、大丈夫？」

「…っつ…昨日お前にどつかれたところが…」

「っご、ごめんね！えっと、何か冷やすもの…薬の方がいいかな！？」

「悪い…ちょっと近くきてくれるか？」

「え！な、何？」

わき腹を抑えてうつむいたまま、アリシアを呼ぶ。アリシアは俺の前にしゃがみこみ、ベッド縁に座る俺を見上げる形になった。

俺は彼女と目を合わせて——言った。

「う・そ」

「…」

アリシアはゆらりと立ちあがると、俺の顔を両手で持ち上げ——

——ゴッ！！！！！！！

「つつつてえ！！？」

ヘッドバット
頭突きをかました。鈍い音が部屋に響き渡る。視界に火花が散った。CRITICAL！という文字が躍る。

「リンのバカ！！最っ低！！！！」

ぶんぶん怒って少女は乱暴に部屋を出て行った。ドア閉めてけドア。
ア。

「う————いててて」

割とリアルに痛むわき腹とデコを抑えながらベッドで悶える俺。
わき腹には昨日の修行でアリシアと撃ち合いをした時に、柄で突かれた時にできたあざがある。

人体の極限に挑戦したような色になっていて、人体ってこんな青黒くなるのか、と我が体ながらドン引きした。

打ち合いで傷や痣ができるのはいつもの事なのだが、昨日のはちと強烈で、アリシアも気に病んでいた。気にすんなって言っても気にするからなー、アイツ。

「そーいえば、アイツ、何しに来たんだ？」

涙目になりつつもだいたい痛みが引いた俺は、はて、と首を傾げた後、寝間着から普段着に着替え、階下へと向かった。

「よーお少年。また嬢さんと痴話ゲンカか？」

一階の食堂に行くと、30そこそこの男性が客席で酒を呑んでいた。ニヤニヤすんな、気色悪い。

「おっさん…昼間っから何呑んでんの…」

「昨日の夜はマリアが放してくれなくてよう。呑めなかったから、今呑んでる」

半目になりながら俺はおっさんを見る。

俺から見ればやる気も締まりもないけどさうな顔は、「色気がある」と女性からは人気があるそうだ。納得いかねえ。

俺の宿である>三日月食堂<は、昼は食堂、夜は酒場^{バー}、二階部分は宿になっている。俺とおっさんは下宿扱いだ。

宿通りからやや外れた位置にある>三日月食堂<には宿泊客はめ

つたに来なく、ここしばらくは俺とおっさんの二人しかない。

昨夜はおっさんが帰った気配はなかったから、大方、娼館に行っ
たか、たक्सんいる彼女のところに泊まったのだろう。

女に背後から刺されてしまえ！という呪いを込めた視線で睨んで
やった。

これでこのおっさんは腕の立つ冒険者で、この界限では有名なの
だ。アル中でニコ中で女癖最悪と言うゴミのようなステータス持ち
なのにな。

「お前な。嬢さんはあのポテンシャルの高さだぜ？数年後にはエ
ライ美人になつてるだろーなあ。今のうちに捕まえておかねーとそ
のうち寝盗られんぞ」

「俺とアリシアはそういう関係じゃねーって！そしてあいつは顔は
ともかく、胸は多分成長の見込みないぞ」

「そこは俺が育ててやる！って言うところだろーが」

「…もう黙つとけよおっさん…」

肩を落とした俺にワハハ悩め青少年！と酒を呷るおっさん。

するとカウンターの奥からおかみさんが飛んできて、またあんな
はお酒持ち込んで！とおっさんを一喝した。酒を取り上げられたお
っさんの表情が青ざめる。

ウチに泊まる以上は健康な体でいてもらいますからね！と豪語す
るおかみさんは、おっさんが飲みすぎると酒に制限をかける。恐ら
く朝帰りの件も含めてこつてり説教されることだろう。ざまあ。

般若モードに入ったおかみさんに軽く挨拶をして、店の外に出る。
空は快晴。今日という休日をリフレッシュに使うには絶好の天気だ。

俺は一つ深呼吸をして、にぎわう街の中心に向かって歩き出した。

迷宮都市アルン。ここが、俺の住む街だった。

迷宮。それはある人にとっては恐怖の対象で、ある人にとっては一獲千金の夢とロマンが詰まった宝箱だ。

ここ迷宮都市アルンには“自由都市”という別名もある。地理的にはアセライ王国の北西部に位置するのだが、王国の支配を受け付けない唯一の自治都市である。ここには種族・血筋の貴賤や国家権力からの圧力は存在しない。あらゆる意味において『強いこと』。これが、アルンで生きていくための最低条件だ。

中央広場が続くに大通り出た俺は、遅めの朝食を取るべくして馴染みの軽食屋へ入った。ドアを開けると、涼しげなベルの音が鳴る。

「あら、リン。いらつしゃい」

「おはよう、フィーナ」

「おはようって、もう昼前よ？」

クスクスと笑いながら俺を出迎えたフィーナは、20代前半くらいで気立てのいいお姉さんだ。美人というより、愛嬌のある顔立ち。わりと俺好み。

はす向かいの雑貨屋の息子のガイルがフィーナに懸想しているのはこの界限じゃ知れた話である。

今日は天気がいいので、俺はオープンスペースに案内してもらう。適度な太陽の日射が気持ちいい。光合成なう。

「いつもの」とだいたいの人が一生に一度やってみたいと思うであろうオーダーをした俺は、（自分に酔ってるわけじゃないぞ、断じて）大通りをゆく人々を眺める。

屈強な肉体を持った戦士風の男。細身の剣を腰にさした女。耳が尖ったエルフ娘。大きなバスケットを持って走るお使い犬耳少年。

「ファンタジーだよなー……」

誰に言うでもなくぼそりと呟く。幼いころ興じたテレビゲームを思い出した。俺はテレビゲームなんかは割と好きだが、最近は部活も忙しくてご無沙汰だったからな。あ、そーいえばオリオンヴァルキリー2が最終章で止まってたんだった。よし、帰ったらやることが増えたな。

「お待たせしました」

ぼんやりと本日の予定に思いを馳せていた俺の前に、サンドイッチと紅茶が置かれる。

「今日は修行も探索もお休みなの？」

「ああ。たまには体休めろってさ」

「リン、ずっと頑張り通しだったものね。私ちよつと心配だったのよ？」

「まあ、最初はきつかったけど。なんか慣れた」

あら、と笑うフィーナ。開店直後だったためか俺のほかに客はいなく、フィーナは雑談の態勢に入った。

「アリシアがあなたを褒めてたわよ。とんでもない成長スピードだつて」

「うわ。それ直接言つて欲しいんだけど。アリシアに褒められたことなんか一回もねーぞ」

「そうかしら？リンが鈍いだけなんじゃないの？」

「…？それどういう意味？」

「…これは大変そうね、アリシア」

「え？」

やれやれ、と首を振るフィーナ。こういうお約束な展開中に申し訳ないが、言っておくと俺は恋愛関係において鈍い訳では断じてない。彼女だっていたことあるし（今はないけど）、それなりに女の子から告白されたりなんかもする。バスケ部補正超うめえ。

そして、この流れの中でのテンプレは主人公が鈍すぎてヒロインからの好意に気付いてないパターンだが、あのアリシアが俺を好きなんてことはまずない。友人として好かれていないのだとしたらそれはかなりへこむが、俺の気を引くような言動は一切ないし、何より、恋する乙女特有のあの熱の籠った視線で見つめられたことなんかただの一回もない。これガチな。

「で、今日は何して過ごすの？」

「んー。武器屋とか魔具屋とか回るかな」

「えー。結局探索関係おしごとのことするんじゃない」

「ってか、もはや趣味だし。ライフワーク的な？」

命を懸けて迷宮に挑む冒険者たちからすれば、聞き様によってはものすごく不謹慎な俺の発言だが、本心なのだから仕方ない。

俺の目的は迷宮の踏破や財宝の入手にあらず。人それぞれってやつだ。

話しながらパクパクとサンドイッチをたいたらげ、お茶を飲み干した俺は、ごっそさん、と言ってフィーナに代金を支払う。ここでゴールドカードで支払えれば超スマートなんだけど、残念ながら、というかご想像の通りこの世界にクレジットカードなんかは存在しない。てか逆にあつたらロマンが壊れるよな。

ありがとうございますー、と笑うフィーナにひらひらと手を振ると、入れ替わりのタイミングで他の客が店に入るのが見えた。あれで結構な人気店なのだ。

さてと、とひとりごちた俺は、馴染みの武器屋へと向かうべく大通りを外れる小路に足を向けるのだった。

22話 正しい休日の過ごし方（後書き）

2章は、みんな大好き迷宮編です。

ボーイミーツガールのなあれは、もうちょっとお待ちくださいませ。

23話 正しい休日の過ごし方・2

商店から1・2本外れた通りに、>レスタール武器商会<はあった。

ここは、俺の所属する冒険者ギルド《銀の一閃》のマスターの顔馴染が経営する店で、最初に来た時はその少し寂れた店構えにがっかりしたものだ、自分で使うようになって分かった。武器や防具の値段と性能、そう言った意味でのコスパではアルンでもトップクラスの店だと思う。

「よーお、坊主」

「こんにちは。お元気でした？」

「そりゃこつちの台詞だ。俺は命懸けるような商売はしてねーからな」

そういつてカラカラと笑うレスタールさんは、この世界で俺に最初に武器（戦う術）を売ってくれた人だ。

セールの品のなまくらの中からいわくつきの妖刀を見つけたり、素質を店主に認められてその店に代々伝わる宝刀を授けられたりなんて言うドラマは一切なく、普通にレスタールさんのお勧めを買った。あ、でもマスターのコネで少し安くしてもらった。あざーす。

そこで買ったのが今も腰に差している双剣^{ダブルエッジ}《村正》《村雨》（命名・俺）だ。ここにおいてある剣はレスタールさんの知り合いの鍛冶屋の作品が多く、気まぐれな彼は自分の武器に銘^{さくひん}を与えたり与えなかったりするらしい。これは後者のパターンだったので、俺が頑

張って考えて名前を付けた。

…正直、反省はしている。でも、エクスカリバーとかつけるのは自重したんだぜ？

「どうだ、双剣あいぼうの調子は」

「ん、問題ないよ。最近はいだいぶ斬り方も覚えてきたから、損傷も少ないし」

「おまえ最初ひどかったもんな…。正直、一時期お前に剣を売ったことを後悔したことがあった」

「…最初は誰だって初心者なんだよ」

剣もむちゃくちゃに振りまわすだけじゃ当たらないし、何より剣にかかる負担が重くなる。

俺も修行初めたての頃はモンスターを倒すたびに刃をぼろぼろにして、レスターさんにはガチで怒られてたな。

ぐるりと店内を見回る。この店には剣、槍、弓、銃、ナックル、斧、ハンマー、フレイルなど、古今東西のあらゆる武器が揃っている。この辺は鍛冶屋の作品じゃなく輸入ものだな。おお、トンファーまである。

ここの物は結構良い値段するものが多いが、レスターさんは客も選ぶ。チンピラみたいな冒険者や、武器の扱いが悪そうなやつらには絶対に売らない。

たまにゴネるやつもいるらしいが、そう言うやつは店から叩き出すらしい。レスターさんも一応元冒険者だ。今は現役を退いているものの、当時は相当“鳴らした”らしい。本人談。

「今日は何か探しに来たのか？」

「いや、見に来ただけ」

「なんだ冷やかしか。けえれ」

「ひつどいな」

こんな気軽なやり取りができるくらいには俺は常連だ。特に何か買う予定はなかったのだけど、結局剣の手入れに使う道具をいくつか買った。

「修行は順調みてーだが、探索の方はどうなんだ？」

「んー、こないだようやく10階層にたどり着いたよ」

「2か月で10階層か。なかなかのペースじゃねーか」

「でも、アリシアとアーネストの力があっての成果だからね。まだまだだよ」

俺が普段パーティーを組んでいるのは、>騎士<アリシアと>魔導師<アーネストだ。二人とも、《銀の一閃》のギルメン、即ちギルドメンバーである。

俺はアリシアに剣術を、アーネストに魔法を教えてもらっている。やや数が少ない、二刀流の>魔導剣士<だ。アリシアにはよく“火力職”と揶揄される。ふん、上等だ。

「魔力のコントロールがうまくいなくなつてね。なかなか火力が出ないんだ」

「俺も魔法に関してはからつきだから何とも言えねえが…。そういやクレイドルがいい魔法具を入荷

したって言うてたぞ。なんでも、魔力を制御しやすくなるんだと」

「マジでっ!」

アリシアはきつと、アイテムの効果を使って魔力のコントロール力を上げることには面を作るだろうが、アーネストはきつと、興味なさそうにこういうだろう。

——いーんじゃねーの？

飄々として何を考えているのか分からない所があるアーネストだが、使えるものは使う、と意外としたたかだ。アルンで生きていくうえでは、この上ない適性と言えるだろう。

俺に魔法を教えるのにそれほど乗り気じゃないのを隠そうとしないアーネストだが、ヤツの的確な意見・アドバイスで俺も魔法の扱いには慣れてきた。やる気はないが非常にいい先生だ。

レスタールさんにお礼を言って、今度は魔法屋に向かう。目的地は、クレイドル魔法用品店。

目的の店に着くと、魔法屋独特のにおいが鼻腔をつく。魔法薬やポーションの香り。病院で感じるのとは違った種類の薬臭さだ。

「クレイドルさん、こんちわ」

「あら、リンじゃない。いらっしやい」

クレイドルさんは、見た目アラフォーくらいのおばさんだ。なんでも、腕のいい錬金術師なんだとか。

でも彼女の噂は、錬金術師としてのそれではなく、商売の腕のものを聞くことが多い。

「何か探しに来たの？」

「ああ、なんかレスタールさんに聞いたんだけど、魔力のコントロールがしやすくなる魔法具が入ったって」

「そうそう！そうなのよ！この指輪」

クレイドルさんが新商品の棚の隅から取ったのは、シルバーリングだった。俺はそれをクレイドルさんの許可をとってから指にはめる。とたんに、体中の魔力がその存在感を声高に主張し始めた。ふわ、と全身が総毛立つ。

「うわ……」

「最初は気持ち悪いわよね。すぐ慣れるわ」

目を閉じて、ぐっと我慢する。深呼吸で気持ちを落ち着けて、両手を広げた。

右手。人差し指、中指、薬指、小指。その順に指先に魔法で火をともした。火の色は赤、青、黄、緑の順。よし、順調。

今度は左手だ。人差し指、中、ゆ、び……。くそう、点かない。やっと中指に付けることが出来ても、人差し指の火が消えてしまったり、右手の火の色が変わってしまったたりする。

「……うまくいかないな」

「あまり変わらないかしら？」

「そうだね。俺はあんまり変化を感じないな」

残念ながら、俺はコントロールの上昇をそこまで感じられなかった。クレイドルさんがゴメンね、と謝る。魔法具の効果にはものすごく個人差があるから、クレイドルさんが謝る理由はまったくのだけど。

指輪を返して、今度は適当に店の中を見て回った。店では魔法強化^{スト}付きのアクセサリーが人気商品らしい。

ここに置いてある武器・防具は、すべて魔法付与されたものだ。^{マジックエンチャント}だから相当値段も張る。俺もホイホイとた買いもの出来ない。

その中で、目立つピアスがあった。値段的な意味で。

そのお値段、300ペシル。1円＝1ペシルくらいだと考えていただけと分かるところだが、この店には相当似つかわしくないお値段だ。

「クレイドルさん、このピアスは？」

「ああ、それね。こないだ南の商人から商品を仕入れた時に一緒に買ったのよ。その商人には良くしてもらったし、処分したそうだったからね。何でも“運命の人”に出会える”ピアスなんですって。すこーしだけ何かの加護はかかっている”みたいけど、まあ、効果は期待しない方がいいわよ。呪いの類はかかってないから、とりあえず店においてみたってわけ」

それでこのお値段なのか。要するにがらくたですね、分かります。ピアスは、金色（金メッキ？）で飾りに琥珀色の石がはめ込まれている。窓から光に透かすときらりと蜂蜜のような光がこぼれた。

「クレイドルさん、俺、これ買っわ」

「…いいの？効果なくっても返品はきかないわよ？」

「大丈夫。なんか気に入った」

俺はピアス穴は開けているが、今は何のピアスも付けていない。ちよーどいいし、300ペシルなら損した気分にもなれんだろう。俺も一応冒険者のはしくれた。まだ駆け出しとはいえ、300ペシル位はポンと出せるぜ。どやっ。

俺は購入したピアスを早速身につけ、他の客が来るまでクレイドルさんと世間話をした。

中央広場。アルンでも最も人が集まる場所のひとつ。

太陽も既に最高高度を越えて暫く経った頃、これは広場の一角に腰かけ、近くの屋台で買ったタコスの巻き物を食べていた。スパイシーな味わい。

ぼんやりと人を眺めていると、ふと、こちらを見る視線に気がついた。あの、金色頭は――

「アリシア――！！！！！！！！俺だ――！！！！！！」

!!!!

「ちよつ」

目があつた途端に踵を返して逃げ出そうとするアリシアに、俺は大声で名前を呼んだ。道行く人、というか広場にいるほとんどの人ががきよつとして俺に視線を向ける。

逃亡を続けようとするアリシアだが、一向に叫ぶのをやめない俺。
5・6歩踏み出してから体の向きを180度変え、俺に突進してくるアリシア。ありや、怒ってる。

「ちよつとリン……人の名前大声で叫ぶのやめなさい……！恥ずかしいでしょ……！」

「だってお前が逃げるから」

「私が悪いみたいに言わないで頂戴！！」

言い争う俺たちを尻目に、なんだ痴話ゲンカか、と周りが俺らへの興味をなくした。痴話ゲンカじゃねーっての。わざわざ訂正はないけど。

「逃げられたら謝れないじゃん」

「…」

「朝は、ごめんな？あんなに怒るとは思わなかったんだ」

「朝っていつか昼よ」

目線を逸らして、懽然としてどうでもいいことに突っ込むアリシア。よし、もうひと押しだ！

「ほんと。もうしねーから。アリシアに避けられっと、俺もへこむ」

俺がアリシアをからかって怒らせることは割と良くあることだが、アリシアは細かいことをいちいち根に持つタイプではない。そういうところ、とても素敵だと思えます。

「…わかったわよ。私ももう怒ってないから」

はあと息をついて、俺の隣に腰掛けるアリシア。先ほど買った2本のタコスもどきのうち、一本を彼女に差し出す。慰謝料としても

らっておくわ、と澄まして受け取るアリシア。

「…おいしい」

「だろ？俺も今日初めて買ったんだけど、ハマりそう」

二人でタコスもどきにかぶり付く。数分でたいらげた俺が横目でアリシアを見ると、ちまちま手や包み紙を汚さないように食べていた。時間かかりそうだな。

ああ、そういや高校のクラスメイトとラーメンを食べに行った時に、麺をいちいち蓮華に乗せてそっと口に運んでる女子がいた。時間掛けやがった拳句、「麺がのびちゃった」とか言って残してたなあの子とはもう二度とラーメン食べたくない。

ぼんやりと広場を眺める。屋台や露店が立ち並ぶ中央広場は、いつもたくさんの人でにぎわっている。冒険者なんて職業を生業にしている人たちが多いこの町では、やはりもめごとが多い。ギルド同士の派閥争い、つまらないイチャモンからの喧嘩、正々堂々決闘を挑む者もいて、争いの火種は枚挙に暇がない。

収集がつかなくなると自警団が出張ることになるが、基本的には当人同士か、または周囲の冒険者で何とかするのだ。いざとなれば周りの人で喧嘩両成敗。この風潮故、この町では自分の身が守れないような弱者は生きにくいのだ。

「ねえ、リン。今日は今まで何してたの？」

ぼんやりと広場を眺める俺に、アリシアが話しかける。俺は前を向いたまま答えた。

「武器屋とか魔法屋とか。買い物してた」

「ふうん。これから行くところあるの？」

不意に、ふらりと視界に一人、黒髪の少年——いや、少女か？——が入った。特に武装をしている訳でもなく、シャツにサスペンダー付きのハーフパンツ、編み上げブーツと一般的な町人（服は男物だが）の格好をした少女。この都市にも黒髪はいないことはないが、絶対数でいうと少ないことは確かだ。黒髪同士で親近感を覚え、俺の目は自然と彼女を追った。

「いや、特にない。考え中」

少女は、周りをきよろきよろと見回した後、小走りで広場を抜けていく。その少女の横顔を俺が捉えた途端、俺は、強い既視感に襲われた。

あの子は、確か——

「……。あの、よかつたら私と——」

アリシアの言葉を聞いている余裕などなかった。俺は思わず立ち上がる。

「リン？」

動悸が鳴る。アリシアが不審げな表情で俺を見上げているが、構ってはいられない。

追いかけては。これが、その時の俺の絶対最優先事項だった。

「アリシア、悪い。急用思い出したわ」

「え？ちよっと、どうしたの。リン――」

「わり！行くわ！」

全速力で駆けだす俺。人ごみをかわし、少女の後を追う。

「…もう！なんなのよ！！」

アリシアの声が聞こえた気がした。

23話 正しい休日の過ごし方・2（後書き）

振る舞いが相当フリーダムなリン少年

ボーイミーツガールはお次の話です。

24話 邂逅

俺は、先ほどの黒髪少女を追いかけ、街中を疾走していた。しかし鮮やかに人ごみを躲しながら走る少女に、俺はなかなか追いつけない。

途中、強面のおっさんに思い切りぶつかって、ぎろりと睨まれる。
(速攻で謝って事なきを得たが)

どんどん人気のないほうに走っていく少女。一方俺は、障害がなくなっても一定の距離を保って彼女を追っていた。

追いかけている途中で多少冷静な思考を取り戻せたのだ。新米とはいえ冒険者である俺が結構飛ばしても追いつかない速度で走り続ける少女。相手も、ただの一般人でないことは明らかだった。

横道を抜け、少しひらけた通りに出ると、少女は立ち止った。ここらはアルンでも怪しげな商店や、人の目を見て言えないお仕事をしている人たちが住む、治安が良くない地区だ。

こぎれいな格好をした少女は明らかに異質で、ちらほらいる通行人の注目を集めていた。

俺は軽く物陰に隠れて少女の様子をうかがう。心臓が大きく脈打っているのは、街中を疾走したせいだけではないと思う。

この位置からでは彼女の後ろ姿しか見えないが、俺の中には一つの確信があった。

——俺は、彼女を知っている。

少女はゆつくりと歩を進め、家と家の間の狭い路地に入っていた。その時に再びちらりと横顔が見える。

「…やっぱり、似てる」

思わず呟いた。ここが俺や彼女がもともといた世界とは別の世界である以上、そっくりさんの可能性の方が高いということは分かっているが、どうも雰囲気一致しすぎているような気がした。

人気のない路地だと、尾行は難しくなるかもしれない。さて、本人に声をかけるべきだろうか――

俺がそうして二の足を踏んでいると、如何にも柄の悪そうな体格のいい男が二人、彼女が曲がって行った路地に近づいた。

二人は顔を見合わせてにやりと笑いあい、小走りで路地に入っていく。

「やつべ…」

俺も物陰から飛び出して、男の後を追った。前述したが、この辺りはあまり治安が良くない。弱い者に対する搾取は珍しいことではなかった。

ただでさえ力のあるものが多く住むアルンでは、たとえチンピラ

といえどもそれなりに強い。男二人相手では彼女に分が悪すぎる。俺はここの地理には詳しくないが、入り組み具合から言って少女が袋小路に入り込むのも時間の問題だろう。急いで角を曲がると男たちの姿はもう見えなかった。奴らも走って少女を追いかけているようだ。

「くそっ……」

俺も速度を上げる。そして三つ目の角を曲がった途端――

ドン！！！！

大きな音があたりに響く。血の気が引いた。

魔族の気配を追っていた遊利は、細い路地に入りこんでいた。弓月に落界者の搜索を任せ、遊利はあの歪みをあけた（かもしれない）人物の手掛かりを探していた。

特定できたのは、相手がダークエルフ、もしくはダークエルフを
使役している人物、ということのみ。早沙子を襲撃した人物が語つ
た「金色の目」という特徴や、体育倉庫の裏で感じた気配はダーク
エルフのそれに一致する。

それに近い微かな気配をたどってこの路地まで来たのだが。

「猫」

行き止まりにいた金の目を持つ黒い猫は、ひとことにゃんと鳴い
て小さな塀の隙間に消えていった。

ダークエルフの魔力（気配）、と一言に言っても個体によつてそ
れは千差万別で、絶対的な指標にはなりえない。遊利が少しだけ魔
力を持った猫をそれと勘違いしてしまつても、両者の気配が似てい
たのだから仕方のないことであつた。

ただでさえこの世界には魔力をもつものが多い。これは相手からの
アプローチを誘つたほうが早いかもしれない——そう考えた時。

背後でジャリ、と足音がして、遊利は振り向く。

狭い路地に、ガラの悪い男が二人いた。なんともむさくるしい。

「よお、坊主。ここらじゃ見ない顔だな？」

「この辺は危ないやつが多いから近寄るなつて教わらなかつたかあ
？」

ともすればゲヘヘ、と笑いそうな下卑た笑みを浮かべながら男た

ちがそう言う。下衆の権化のような表情だ。

「…カツアゲですか？」

「授業料だ。とりあえず金目のものは置いてってもらおうか」

めんどくさそうに言った遊利に、男はパキパキと拳を鳴らす。遊利への距離を詰めていく男たち。遊利の背後は行き止まりだった。

「嫌だと言ったら？」

「痛い目見ることになるぜ」

男たちと遊利は優に30センチ以上の身長差がある。上目づかいでそう聞いた遊利に男はどすの効いた声で答え、遊利の胸倉をつかみ上げた。

小さなため息とともにそうですか、と遊利が呟いた瞬間。男たちの体が宙に舞った。

「…弱」

ぼそりと遊利がそうつぶやく。地面にたたきつけられただけで失神してしまった男二人。そもそも受け身すらとっていなかった。

おそらく、この二人は迷宮の探索写ではなく、本当にただのチンピラだったのだろう。

遊利はのびた男をたち冷めた目で一瞥して、路地の先に視線をやった。

もう一人、肩で息をした少年が立っている。このチンピラの仲間かとも思ったが、それにしても体格も雰囲気も違いすぎる。少年は呼吸を整えながらまっすぐに遊利を見ていた。

黒い髪に、黒い瞳。自分と同じ特徴だ。この都市にもいないことはないが、どちらかというと珍しい部類に入る色の組み合わせ。

このひと、どこかで――

遊利がスッと目を細めた時、少年が口を開いた。

「…朝比奈？」

その声を聞いた途端、遊利の中で記憶が一気によみがえった。学校で幾度かすれ違った。去年の球技大会で、他を圧倒する技量を見せつけ、一年生ながらクラスを優勝に導いたバスケット部員。そして、カラオケでの、マリの台詞。

『ああ！聞いたことあるよ。そうそう、うちの学年にすっごいうまい子がいるんだってね！』

『えっとね、名前も変わってて、あだ名も面白いのがついてたはず。確か――』

「
…あ
」

全てを思い出した遊利は目を見開き、少年を、指差した。

「ふわりん!!!」

「…そのあだ名で呼ぶな」

そう呼ばれた少年、ふわりんこと不破倫太郎ふわりんたろうは思いっきり顔をしかめた。

24話 邂逅（後書き）

ようやく出会いました。

そしてこの章の主人公の名前が…！ダサイとか言わないであげてく
ださい

10000PV達成しました！ありがとうございます！これからも
がんばりますので、よろしくお願いします。

25話 ある雨の日

そもそも、俺と朝比奈に絡みらしい絡みは一切なかった。

俺が朝比奈の名前を初めて知ったのは、高校に入って一番最初の中間テストの成績上位者が掲示板に張り出された時だった。彼女は
その時だけでなくほとんど上位20名に名を連ねる秀才だった。

俺はちなみにいつも平均以下です。成績優秀者とかかすりもしません。

また、朝比奈は「可愛い女子」として仲間内で話題に上ることも多かった。白い肌にサラサラの黒髪、くりくりとした大きな目の彼女は間違いない美人であつたし、少し体が弱いということも男子共にとつてポイントが高いようだ。

余談だが俺は朝比奈みたいなタイプより、元気で気が強い子の方が好みだ。バレー部の相内マリとか可愛いと思う。

彼女に関してはその程度の認識だった俺だが、朝比奈の印象に残るエピソードが一つある。

あれは一年の秋、冷たい雨が降った日だった。

その日の部活はミーティングのみで、早々に解散したチームメイトたちを尻目に俺はボールと戯れていた。家帰っても特にすること
もなかったし。勉強しろとか言う突っ込みは受け付けていません。

満足いくまで遊んだ俺は、ボールとゴールを片付けて帰宅態勢に

入った。持ち上げたかばんは空の弁当箱と筆記用具しか入っていないので激軽だ。素晴らしき文化かな、置き勉。

一時間ほど前には多くの生徒を掃き出した出あろう生徒玄関は閑散としていた。幼児のない生徒はとつくに帰宅し、部活がある生徒は練習に精を出す時間帯だ。この時期、日は徐々に短くなっていく。まだ五時前なのに空は既に藍色に変化し始めていた。

「…はい。はい。お願いします」

涼やかな声がどこからか聞こえてきた。それほど大きな声ではなかったが、いかんせん静かな空間ではそれなりに響く。

（…お、朝比奈遊利）

声の主は朝比奈だったのだ。げた箱で彼女の姿を認めた俺だが、当然挨拶をするような間柄でもないため、何のアクションを起こすでもなく靴を履き替える。

どこかと電話していたらしい彼女は、携帯をポケットにしまつとさつさと昇降口に出て行った。

外はなかなか強い雨が降っていた。朝比奈は雨の当たらない位置で立ち止まり、ぼうつと外を見ている。鍵付きの靴箱に入っている大量の置き勉を軽く整理した俺が昇降口に出ても、彼女は変わらずそこに立ちつくしていた。

——もしかして、傘がないのか？

そこで俺はさてどうするか、と考えた。雨脚は一向に弱まりそうもない。体が弱いらしい彼女の事だから、雨にぬれながら帰るなど論外だろう。

さて、俺のかばんには一本の折り畳み傘が入っている。ここで傘を取り出し、立ちつくす彼女の傍らをてくと通り過ぎるのは簡単だが、紳士的な振る舞いとは言い難いだろう。

彼女と一緒に傘に入って帰宅するのもやぶさかではないが、全く親しくない女子と相合傘はなかなかハードルが高い。

全くクサイことこの上ないが、彼女に傘を押しつけて走り去るのが一番無難だろう。幸い俺の家は近く、走れば5分はかからない。普通に考えれば相手は遠慮するだろうから、その隙を与えないことが肝要だ。

頭の中で一連のシミュレーションを終えた俺は、少しだけ勇気を出して彼女に声をかけようと息を吸い込んだその時、校門から一台の車が入ってきた。

…見るからにタクシーである。

朝比奈は昇降口まで来たタクシーに乗り込んで、すぐに俺の視界から消えた。

「…ブルジョワ」

黙ってタクシーを見送った俺は、思わず呟いた。なるほど、先ほどの電話はタクシーを呼んでいたのか。だがしかし、女子高生が傘忘れたからってタクシー呼ぶか？呼ばねーよな。

…ってか、あつぶねー。もし俺が早まって、彼女に傘を押し貸しし、雨の中走り去って行ったとしよう。

暫く走るとタクシーに乗った朝比奈が追いついてきて、申し訳なさときまずさが入り混じった表情で、きつとこういうのだ。

「…折角ですけど、これ、お返しします」

差し出された俺の傘。ずぶ濡れの俺。走り去る朝比奈（の乗ったタクシー）。

うーっわーっわー俺超かわいそう。完全に濡れ損じゃねーか。

最悪のパターンを運よく回避した俺は、神様に感謝しつつおとなしく着途に就いたのだった。

朝比奈になんて声をかけるべきか俺が逡巡していると、足もとに

転がっている男の一人が「うう…」とうめいて身じろぎした。

「うわ。やべ」

「このやろつ…よくも…」

「走るぞ、朝比奈！」

頭を抱えて起き上がるうとする男をかわして、俺は朝比奈の手をとって走り出した。

うわ、手やわらけーとか下らないことは考えずに、割と全力疾走。角を曲がるときにちらりと振り返れば、立ち上がった男が酒瓶の入った木箱の山に突っ込むのが見えた。脳しんとうでうまく立てなかったみたいだ。ざまーみる。

「…っと、ここまで、来れば、大丈夫、かな」

貧民街を抜け、中心街の外れまでたどり着いた俺たちは、徐々にスピードを緩め、やがて立ちどまる。俺も流石に呼吸を乱し、朝比奈に至ってはへなへなと座り込んでしまった。

「…はや…すぎ、です」

「わ、悪かった」

あれ、さっき走ってたのを見る限りでは体力ありそうだったんだけどな。やっぱり病弱お嬢様キャラなのかね？

…まあ、さつき地面に転がってた男二人は朝比奈がやったんだとしたら、かなり、イメージが崩れるけど。

やや呼吸が落ち着いた様子の朝比奈に手を差し出すと、彼女はややためらったような表情を見せるも手を預けて立ち上がる。

「なんか飲むか？買ってくるけど」

「いえ、大丈夫です。ありがとうございます」

ぺこりと頭を下げる朝比奈。むう、やっぱり学校の時とは印象が違うな。前は儚げで、どこか遠くを見つめているぼんやりとした雰囲気だったが、目の前の少女は目に強い光が宿っている。

不意に朝比奈がニコリと笑った。うわ、笑顔初めてみた。普通に可愛い。

「お互い聞きたいことはたくさんあると思うんです。どこか落ち着ける場所に行きませんか？」

もつともな意見だ。俺も朝比奈に聞きたいことは山のようにある。頷いた俺は、彼女にこう提案した。

「それなら、うちの“ホーム”に来ないか？」

25話 ある雨の日に（後書き）

諸事情により更新が遅れてしまいました。申し訳ないです。
年末年始は一週休むかもしれません。

26話 ホームにて(前書き)

あけましておめでとございますー！本年もよろしくお願いします。

26話 ホームにて

「あ、お帰り、リン」

俺たちの“ホーム”——ギルド《銀の一閃》の本部ギルドハウスに戻ると、カウスターの中で受け付け条件看板娘のエトナがそう声をかけた。俺に伴い本部に足を踏み入れた朝比奈を認めておや、という顔をする。こんにちは、とエトナに軽く会釈した朝比奈は、周囲の注目を集めた。

「…おい、見る。リンが女連れて来たぞ」

「え、あれ男じゃねーの？」

「バカ野郎。どう見ても女の子じゃねーか」

本部にいたギルメンたちが一斉に『ひそひそ』と言うにはいささか大きすぎる音量でざわめいた。うるせーぞ非リアどもが、と怒気を込めて奴らを睨みつけるとざわめきのボリウムは5段階くらい落ちる。お前も非リアだろーがという突っ込みは自重していただきたい。

「ここは…酒場、ですか？」

「ああ。各ギルドの本部はギルドメンバーの交流の場になるんだ。うちの規模になると、こういう飲食店の形態をとることが多いよ。まあ営利目的でやってるわけじゃないから、客はほぼギルド

の構成員だけだな」

「部外者^{わたし}が入っても大丈夫なんですか？」

「問題ないよ。ギルメン以外の出入りを禁止してるわけじゃない。まあ、ギルメンじゃない人が入りにくいのは分かるし、それをよしとしてる時点で同じことなのかもしれないけど」

うちのギルドは、非戦闘員も含め総勢30名程度の規模だ。よより小規模なギルドはそもそも本部を持たなかったり、集合住宅の一部屋を借りて軽い集会所として使っているところが多い。前に知り合いの小規模ギルドの本部にお邪魔した時は、学校の小さな同好会の部室のような雰囲気を感じた。

興味深そうに周囲を見渡す朝比奈を、俺は一番奥の席に案内する。改めて正面から朝比奈と向かい合って話を始めようとするものの、何をどう説明したら良いのかさっぱりで俺の脳内会議は閑閑諤諤のあり様だ。

「あの。私から話しても構いませんか」

困惑した表情の俺の状況を組みとったのか、口火を切らない俺にしびれを切らしたのか分からないが、願ってもない朝比奈の申し出に俺は頷く。

「結構長い話になると思うので、何か飲み物でも頂きませんか？」

カラン、とグラスの氷が音を立てた。注がれているのはポールマ二という果物の果汁を炭酸で割ったもので、アルンではごく一般的な飲み物だ。

今まで滔々と説明を続けていた朝比奈は、グラスについた水滴を指でぬぐい、ポールマニを一口口に含んだ。

「さて、何か質問はありますか」

「話の途中では色々あったはずなんだが、なんかもう忘れた」

胸を張って答えた俺に、朝比奈は苦笑する。

「よーするにあれだろ？朝比奈がりりかるハーマイオニーで、契約して俺を助けに来たんだろ？」

「そうですね。だいたい間違ってますけど、大事なところはかろうじて合ってます」

「じゃー俺、帰れるのか？」

朝比奈はコクリと頷く。なるほど。俺プランとしてはこれからアールンで実力を付けた後、元の世界へ帰る方法を探す旅にでも出ようと思ってたんだが、過程をすっ飛ばしていきなりゴールにたどり着いた感じだ。なんというあなぬけのヒモ。

「あー良かった。もう一生帰れないんかと思ってたわー」

俺はそう言ってポールマニを一気に飲み干す。うえ、げっぷ出そう。

「あの、大変言いにくいのですが」

大していいにくくなさそうに朝比奈は口を開く。

「準備の目処が立たないのです」

「準備って？」

「元の世界に帰る準備」

朝比奈によると、この世界では世界を渡るのに必要な材料があまり市場に出回ってないらしい。いつもは帰りの分の材料もある程度持つてくるらしいのだが、今回は事情が事情なためにそう言う訳にもいかなかったんだとか。

「渡界に使うマジックツールは希少なものも多いですが危険のあるものはほとんどありませんし、この世界のようにある程度魔法が発達しているところでは流通は必ずあるはずなんですけど」

「え、もしかして全く出回ってない？」

「いえ、モノはあることはあるんですが…」

ここで朝比奈は一呼吸おいて、深いため息をついた。

「クソ 高い」

彼女の声には微かな、いやはつきりとした怒りがにじんでいた。あれ、朝比奈嬢？クソなんて言葉使っちゃっていいのですか？

「なんであんなにちっさい魔石が18万…。消費者に挑戦状をたたきつけているとしか思えません」

「え、魔石とか割とどこ行ってもあんなもんだと思うけど」

「そうですね。この世界は割とどこへ行っても相場は変わらないらしいですね」

俺的には魔石が法外な高さだという感覚はない。魔石は小さくてもそれが持つ効果は大きく、冒険者で欲しがらない者はいない。そしてその価値が物語るのはその希少さ。そう、魔石は純度の低いものならばともかく、高い力を持つ者は迷宮の中でしか採れないのだから少ない供給に対しての高い需要が財の価格を高騰させる。

「あー、それで資金が足りない感じが」

「…不甲斐ないです」

頭垂れる朝比奈。一体いくら足りないのか想像もつかないが、彼女の様子を見るに少し働いたくらいで何とかなる額ではないのだろう。

「あのさ、もとはと言えば俺のせいだし、少ないけど貯めてる分出すよ。頑張って修行して、深いところまで潜ってレアアイテムでー

攫千金狙うし。任せろって」

俺は努めて明るい口調で言った。もともと10年単位で時間にかかるだろうと思っていたし、帰る手段があると分かっただけで俺は十分に満足だ。

「いえ、多分お金集めるより迷宮でアイテム掘った方が早いと思います。どんなモンスターがでるとかどんな素材が取れるとか分からないですけど、まあ、1〜2週間あればなんとかかなるか」と

「…え」

「そう言う訳で、もう少し時間をください。なるべく早く済むように頑張るので」

「ちょ、待て。朝比奈が潜るのか？」

「そのつもりですけど」

「…。」

さて、どのように説得して諦めさせようか、と俺が逡巡すると、俺の意図を理解したらしい朝比奈が不満げに口をとがらせた。

「私だって魔法師です。自分の身くらい守れます」

「つつてもなあ…。多分、朝比奈が思ってるよりきついぞ」

「大丈夫です。もう一人、戦える連れもいますし」

「連れて、魔法使い仲間か？」

「魔法は使えないけど、まあ仲間です。同僚みたいな感じですね」

俺の納得していない雰囲気、朝比奈も困ったような顔をした。

「無理はしませんから」

「じゃあ聞くけど、さっき裏路地でチンピラ二人転がしたの、朝比奈か？」

こくと頷く朝比奈に、俺は息を吐く。アルンでは「女の子を戦わせるなんて……」なんて価値観は通用しないが、やはり同郷の、しかも同級生の女の子を迷宮に連れていくのには抵抗を感じずにはいられないのだ。紳士としてね。

「……わかった。絶対無理はしないのと。俺から離れないこと。約束な？」

「はい、約束です」

朝比奈は俺の目を見てしっかりそう言った後、少し唇の端を持ち上げる。

「心配していただいてありがとうございます、不破くん」

改めて礼を言われると非常に面映ゆい。俺は紳士として当然のことを……って、そんな恥ずかしい台詞言える訳がない。

「倫^{リン}でいいよ。名字あんまり好きじゃないし」

照れ隠しに話題の矛先を変えつつ目を逸らす。視界の外で朝比奈が笑った気配がした。

「私も遊利で構いません。これからよろしくお願いします、倫、くん？」

「改まると照れるな。よろしく、遊利」

どちらからともなく自然とお互い手を差し出し、握手する。おおつと周囲が小さくどよめいた。うるせーぞ、外野。

ちらりと朝比奈——おつと、遊利の顔を見ると、彼女も軽く目を見開いて俺の後方を注視している。

何事だ、と俺が後ろを振り返ると、俺の後方直線状にある>銀の—閃くのドアを開けた少女が、こちらに厳しい視線を向けていた。

本日3度目の、アリシアとの遭遇である。

26話 ホームにて（後書き）

少し久しぶりの更新でした。

活動報告にも書きましたが、年末年始は家を空けていたので更新できませんでした、すみません><

また今週末家を空けるので、次の更新は来週のおそらく半ばになります。

2月中旬まではなかなか忙しいですが、徐々にペースを戻していきます。

27話 修羅場（前書き）

気づいたら金曜。

おそくなりました；；

27話 修羅場

ドカドカと大股で俺と遊利のテーブルに近づいたアリシアは、腕を組んで俺を睥睨する。

「私の事ほったらかして女の子とお茶とは、いい御身分ね？」

WARNING！俺の脳が緊急地震速報を発令した。もし空気が許すなら机の下に避難したい。

昼間より明らかに怒っているアリシアに、俺は冷や汗を滲ませる。

「アリシアさん。もしかして、怒ってらっしゃいます？」

「当り前よ」

彼女の怒りを鎮める方法を探るべく、とりあえず自明の事を聞いてみた。

こいつはどうやらマジグレすると表面上冷えるタイプのようだ。絶対零度のまなざしが俺の体を容赦なく貫いた。うう、これはうやむやにして煙に巻くのは厳しいだろう。誠意を持った対応が解決への最短ルートのようなのだ。

「アリシアさん。本当、今朝の件に関しては心から反省してます。せっかく心配していただいたのに、茶化するようなマネをして、大変失礼「そのことじゃないわよ」

「…え。違っの?」

アリシアの眉がつりあがる。うわ、しまった。予想外の展開のあまりつい素が出てしまった。

「ホントにつ…わからないの…?」

「ごめん。俺何かしたか?」

顔を紅潮させ、唇をゆがめるアリシア。なんで怒らせたか分からない、これは怒らせた側としては最悪の状況だ。俺は必死に今日の振る舞いでの落ち度を探す。あれか? 昼間に合った時に失言でもしたか?

「わたしとは出来ないのに、この女とはデートする訳!？」

しびれを切らしたらしいアリシアが目には微かに涙をためながら言い放った。周囲がシンと静かになる。…え。なに。デート?

「…えっと、デートって、俺とお前がか?」

「私とのデートは断っておいて、その女とはするんじゃないっ!」
「待て。今の発言には色々誤解がある。というか誤解しかない」

どうやら俺とアリシアの間には大きな認識の違いがあるらしい。

「まず、これはデートじゃない。遊利は友人、というか協力者だ」
「嘘」

「嘘じゃない。それに俺は女の子とのデートコースには間違ってもこんなところ選ばない」

ここを話し合いの場所を選んだのは、ここが俺にとってアルンで最も安全な場所だからだ。デートで女の子をこんな汗臭い場所に連れてくるやつなんている訳ないだろう。

「そして、俺がお前とのデートをいつ断ったんだ？」

「昼間、広場で」

「言われた覚えが全くないんだが」

「言ったもん」

「…。」

俯いて黙りこむアリシア。さて、どうしたものか。

「あんなアリシア。お前そんなこと言うと俺の事好きみたいだぞ」

少なくともこの場にいるギルメン達にはそう誤解されても仕方ないことは確かだ。俺はなぜそんなデートにこだわるのかという呆れ半分、彼女の名誉アリシアのための親切心半分でそう言ってやった。俺がいい終わるかいい終わらないかの瞬間バツと顔を挙げたアリシアは憤

怒の表情で。

「だれっ…。誰が、あんたなんか」

「あの！ちよつと」

アリシアの絞り出すような声を遮ったのは、今まで沈黙していた遊利だった。派手な音を立てて椅子から立ち上がる。その場にいる野次馬も含めた全員の注目が彼女に集まる。

「えつと、私は、彼に助けをいただいたんです。大きな男の人に裏路地に連れて行かれそうになったところを偶々目に留めていただいて」

「え…」

「おかげで助かりました。それがお二人のデートの邪魔になってしまったとしたらごめんなさい」

アリシアと俺に頭を下げる遊利。アリシアはポカンと彼女を見ている。

「もともとちよつとした知り合いだったので、助けてもらった後も親切にしていたいたのです。倫さん本当にありがとう」

「いや…」

「いやいや遊利さん。こちらこそマジで本当に誠にありがとう。マ

ジ天使。マジ女神。マジゼウス。

「わ、私の勘違いだったの…」

赤面して急に声が小さくなるアリシア。目に見えてうるたえてる。アリシアが視線を足もとで彷徨わせている隙に、遊利は俺に少し厳しめの目つきで――目配せした。お、オーライ。分かったからそんなに睨まないでっ！

「ア、アリシア。良かったら今度の休暇デートしないか？」

「え、」

「いつつも修行で世話になってるし、ホラ。うまいもん食わしてやるよ。あー、もしアリシアが嫌じゃなかったら、で、良いんだが…」

「…考えとくわ」

「ああ。ぜひ前向きに検討願いたい」

「うん」

ようやく落ち着いたらしいアリシアが我に返ったように遊利に非礼を詫びたり、和解に拍手を起こしかけたギルメンに「見世物じゃないわよ！」と一喝するのを尻目に、俺もほっと息を吐いた。――とりあえず、危機は脱した、か？

27話 修羅場（後書き）

短いですが、キリもいいので。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1535q/>

主人公 ヒーロー 達の不自由な二択

2012年1月13日01時47分発行